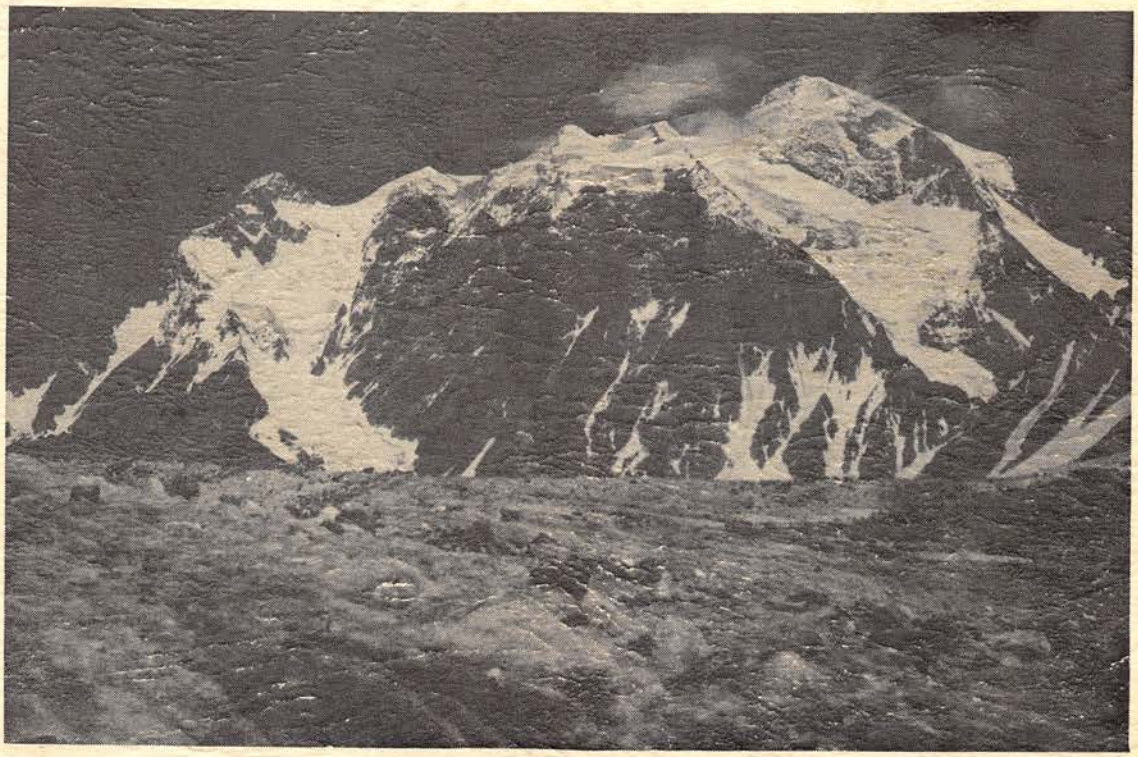
千人の悪魔の峰

MOUNTAIN OF THOUSAND DEVILS

-INDO-JAPANESE JOINT KARAKORUM EXP. -
1984



日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

千人の悪魔の峰

MOUNTAIN OF THOUSAND DEVILS

－INDO－JAPANESE JOINT KARAKORUM EXP. －

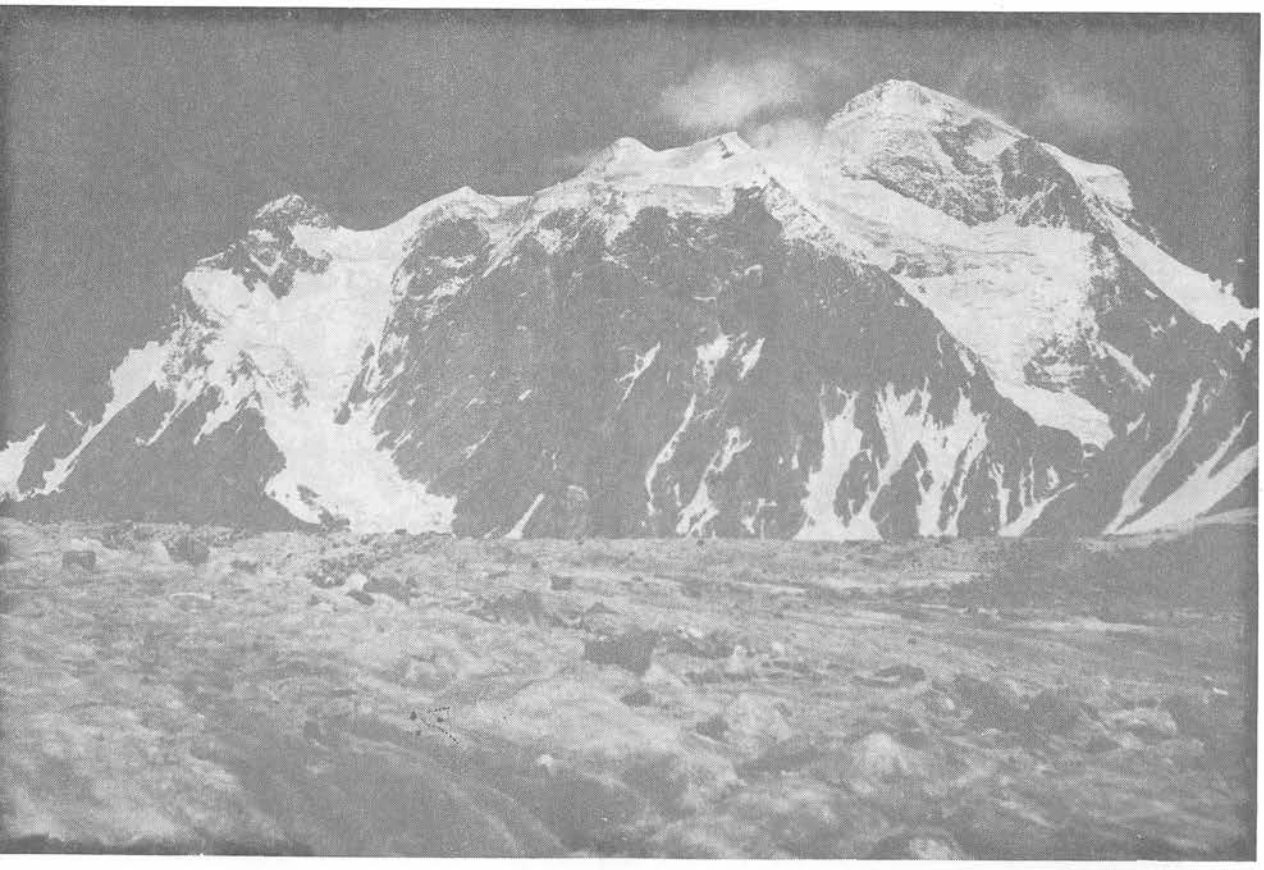
1984

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

千人の悪魔の峰

MOUNTAIN OF THOUSAND DEVILS



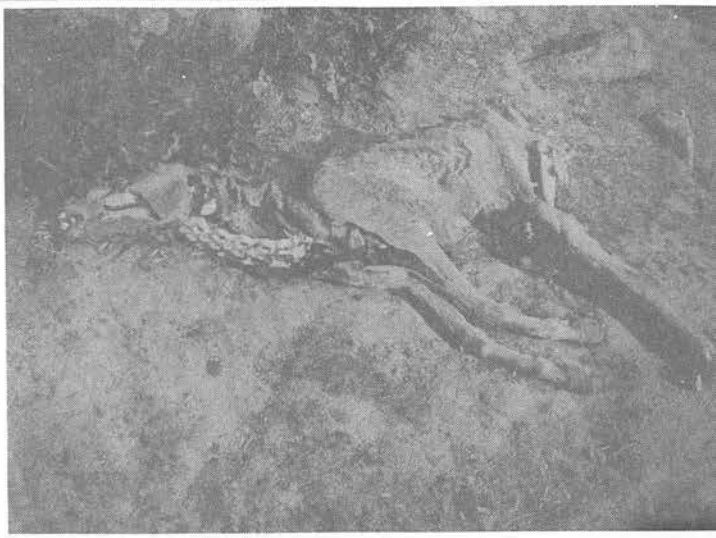
マモストン・カンリ(7,516m)の全容

The whole aspect of Mamostong Kangri from Mamostong GL. side.

日本人として７５年振りに訪れた

中央アジア交易路を辿って

トロンポティ・ナラ(川)の徒渉
Wade across a stream.



炎熱下に晒される馬の死骸
Mummy of horse.

天まで続くような岩の道を辿る

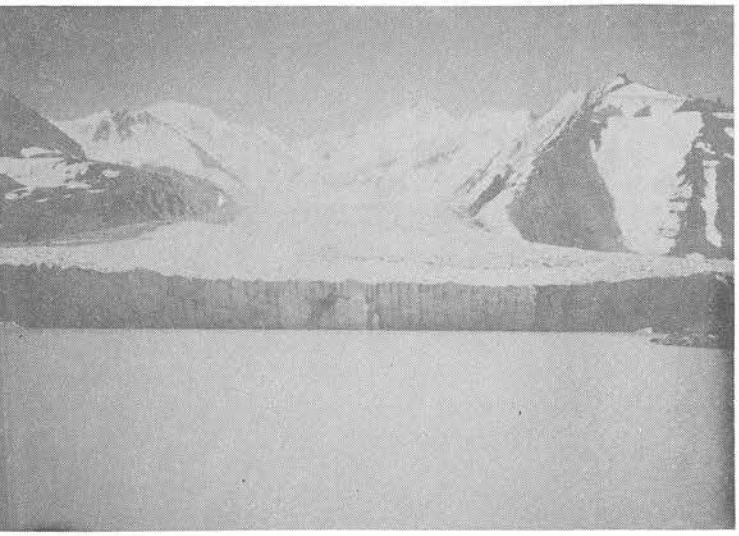
Central Asia Trade Route passed the extremely steep on the wall.

キャラバン初日は、ジンモチェ泊り

We arrived the camp site at Jhingmoche on the first day of approach march.

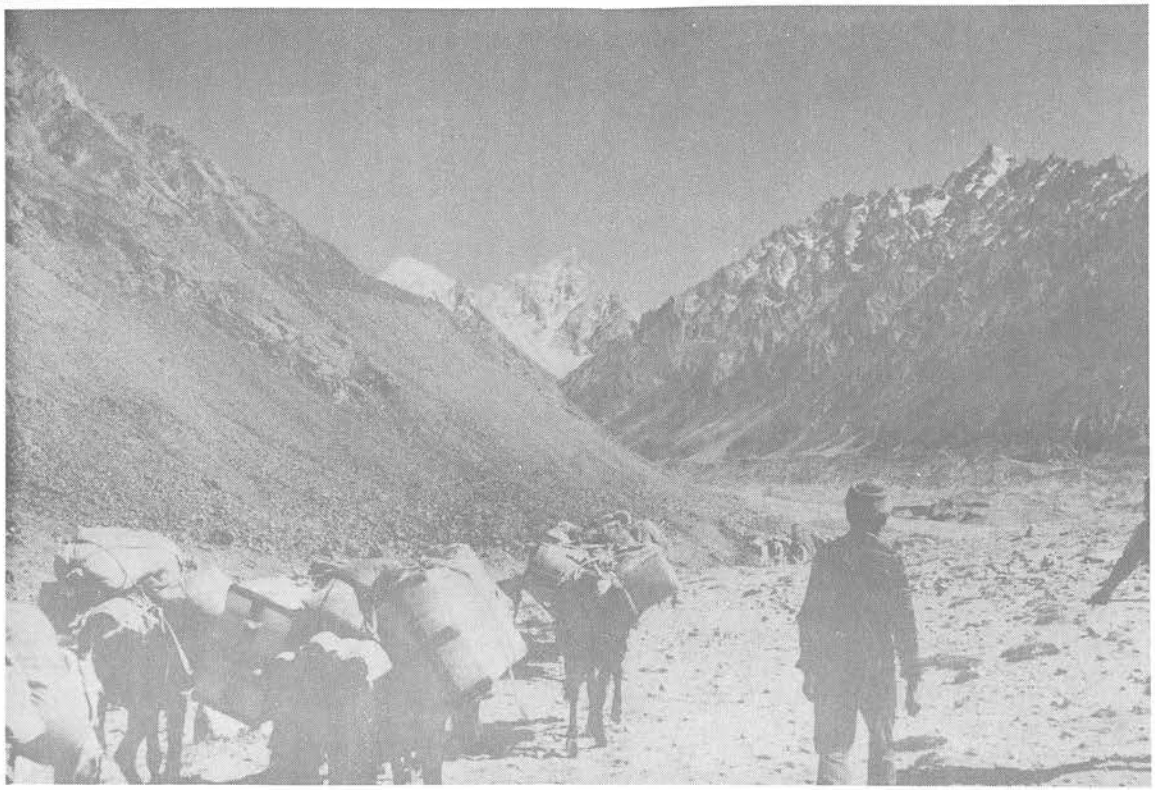
サセル・ラ(5,395m)近くの氷河湖

a Glacier Lake, near the Saser La (5, 395m)



マモストン・カンリの頂が初めて顔を出す

We had our first sight of the Mamostong Kangri at Skyampoche.



ラダックの婦人

Ladakhi lady.

―ラダック―

We stayed the Leh just at t
time held a Summer Festiva

勇壮なポロ競技

Polo game.

夏祭りにやって来たヤク

" Yak" is a good worker
at the Himalaya.

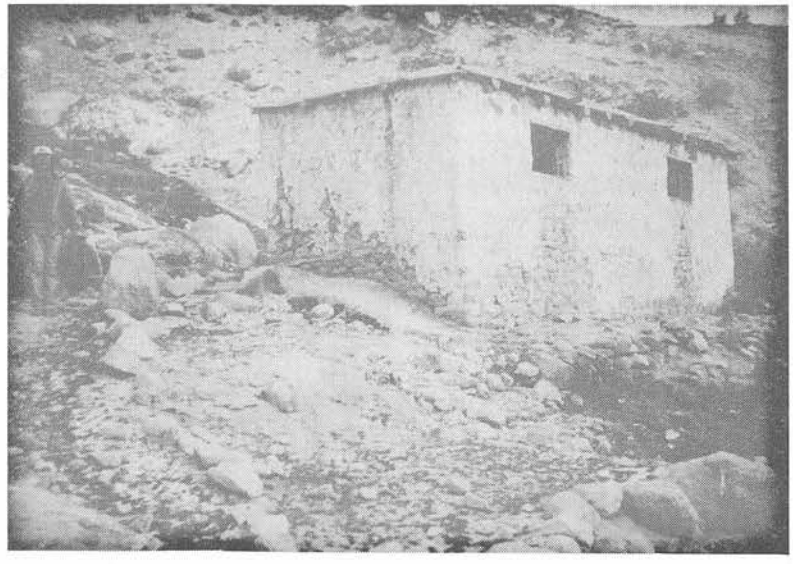
カルドン・ラへの道、
背景はストック・カンリ山群

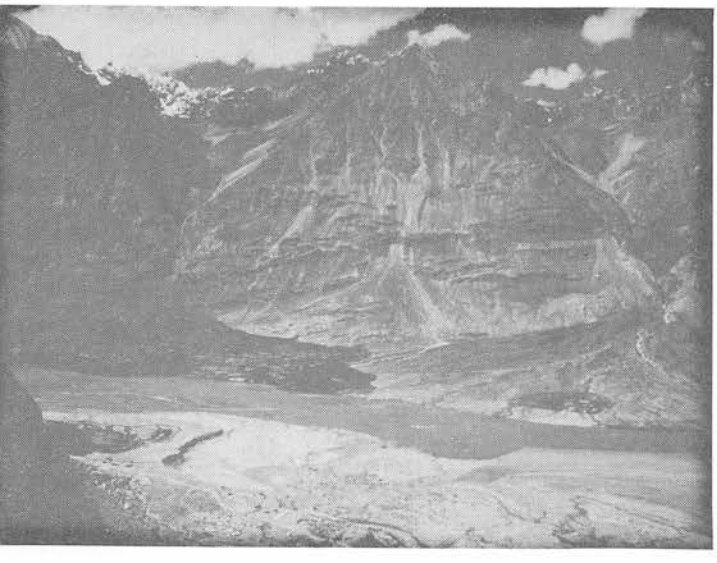
a way to the Khardung La , It's the heighest pass that crossed by autotruck.

—ヌブラ谷—

907年、此の地を訪れた我が国の先蹤者
野強に『清国の垢と英領の垢とを同時
洗い去る、あに快事ならずや』と云わ
めたパナミックの温泉

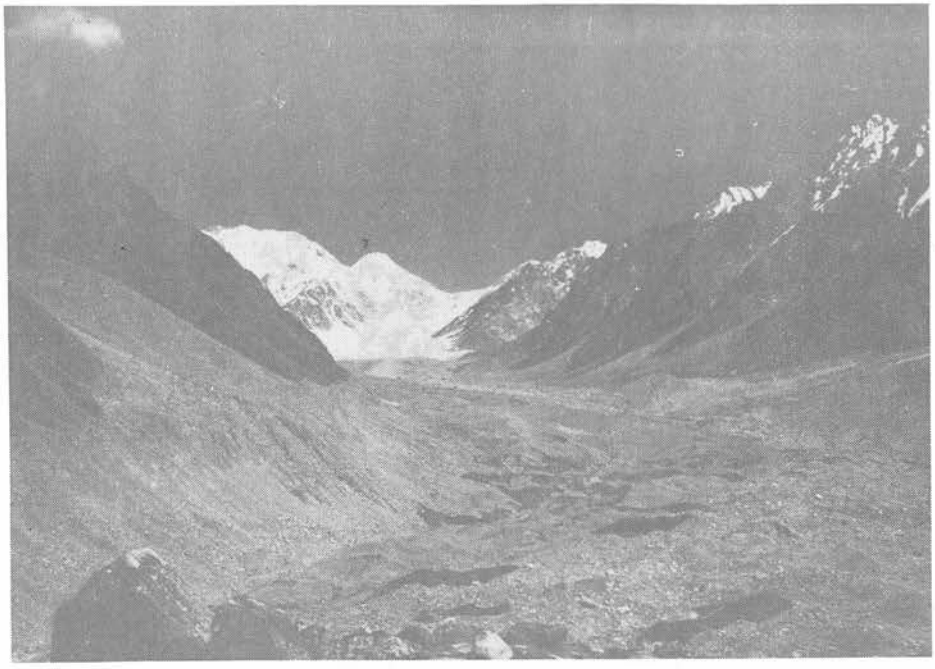
We were washing ourselves in the hot spring at Panamik.





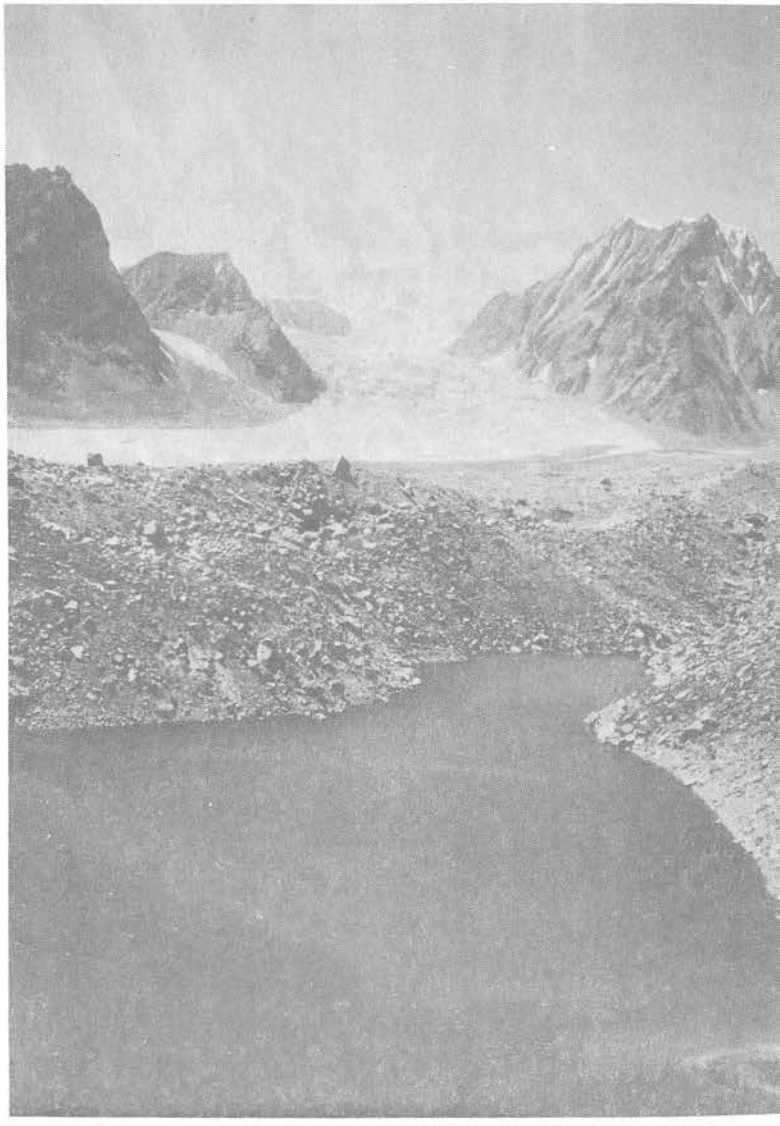
トロンポティ・ラの峠に立つとヌブラ谷
の白い河床が俯瞰出来る

Looking down the Sasoma and Nubra R. from Trumputi La.



スキャンポチェからのマモストン氷河

The entrance of Mamostong GL.



コバルト・ブルーに輝くモレーン湖

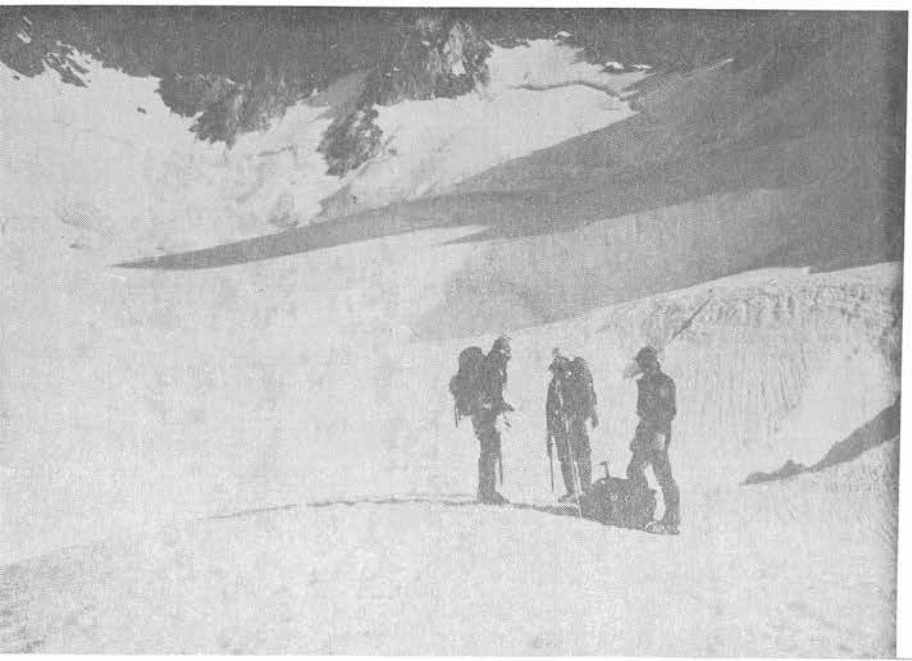
a beautiful moraine lake near the Advance Base Camp.

マモストン氷河右岸の山々

a view of unnamed peaks at the head of Mamostong GL.

壁の基部に設けられたCamp 1

amp 1 at the heigh of , 600m situated on end f Mamostong GL.



氷河上の休憩

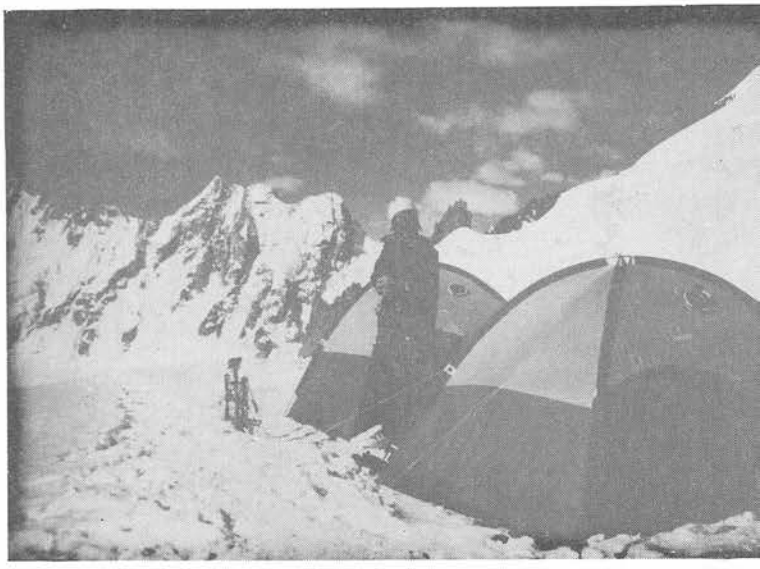
take a rest at just below the Camp 2.

タンマン氷河源頭部を進む

We went on lengthy Thamgman GL. to Camp 2.

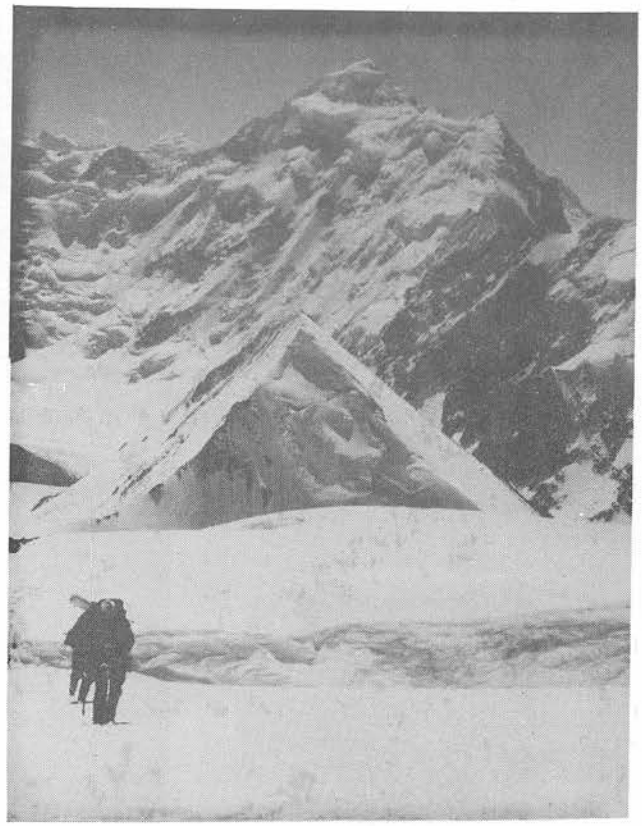
Camp 2(6,100m)

Camp 2 at the heigh of 6, 100m situated on snow plateau in upper Thamgman GL.



Camp 3への雪面を登る

The route up to Camp 3 went on lengthy snow slope, with no technical difficulty.

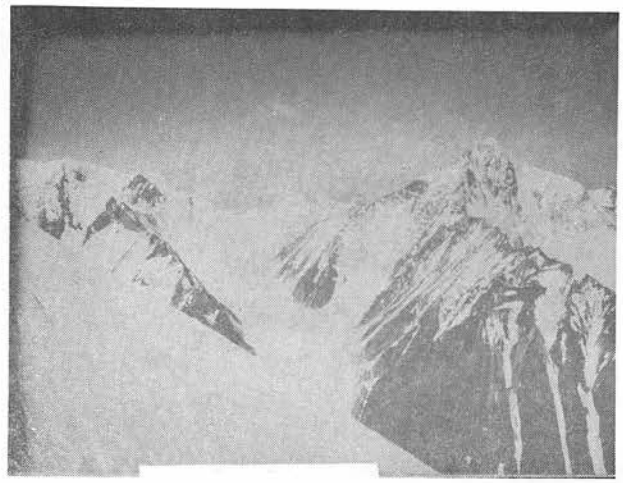


マモストン・カンリⅢ峰(7,016m)

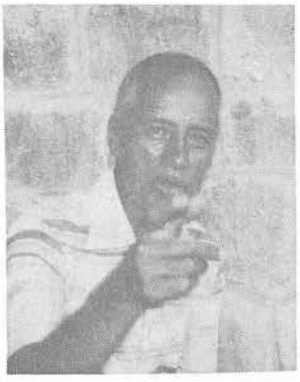
a view of the North Face of
Mamostong Kangri 3.

マモストン・カンリⅡ峰(7,071m)
(別名: チョング・クムダン・ピーク)

a view of the South Face of
Mamostong Kangri 2.

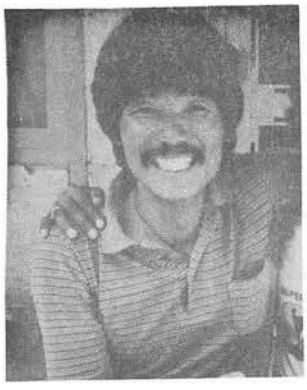


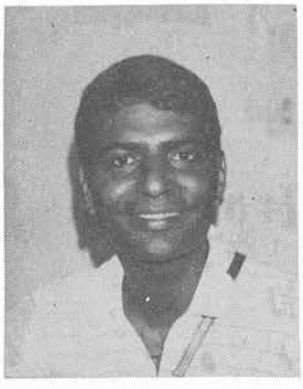
バルワント・S・サンドゥ大佐
Col. Balwant S. Sandhu



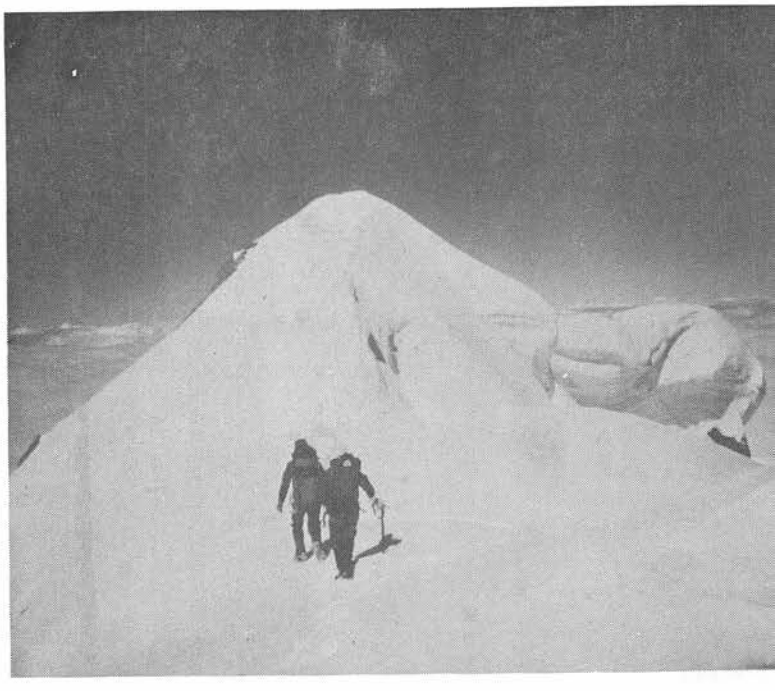
尾形好雄
Yoshio Ogata

山田　昇
Noboru Yamada

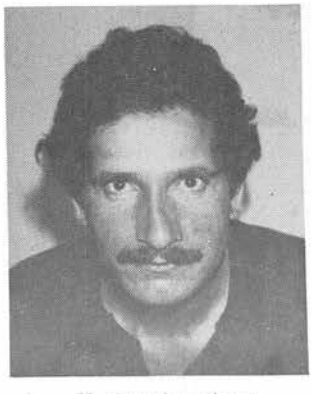




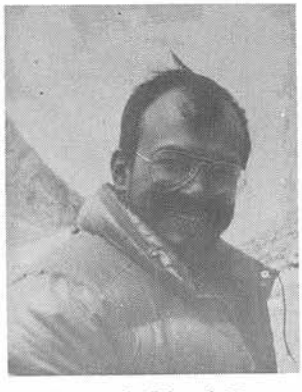
Ranjit Kumar
ランジット・クマール



Nandlal Purohit
ナンドゥーラル・プロフィット

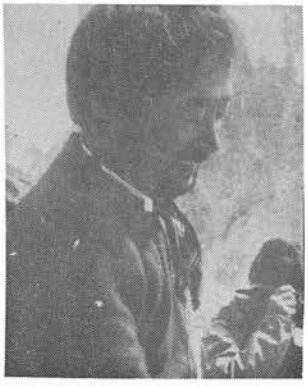


H. C. Chauhan
H・C・チャーハン

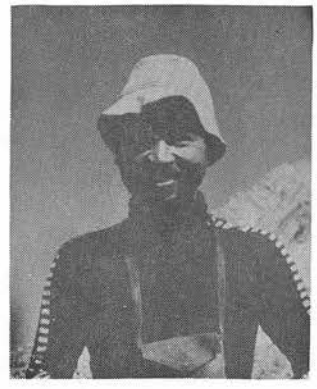


Parash Moni Das
P・M・ダス

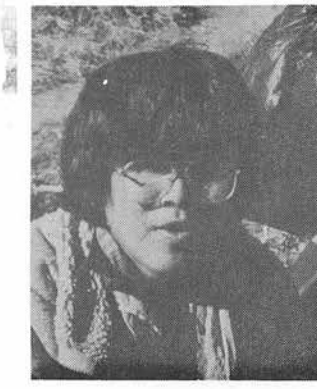
新郷信廣
Nobuhiro Shingo

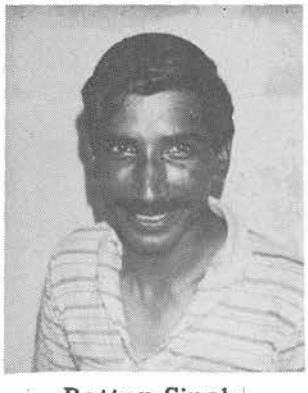


吉田憲司
Kenji Yoshida

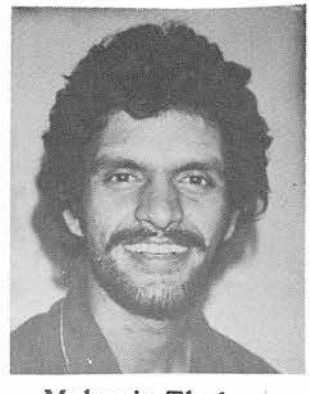


岩崎　洋
Hiroshi Iwasaki



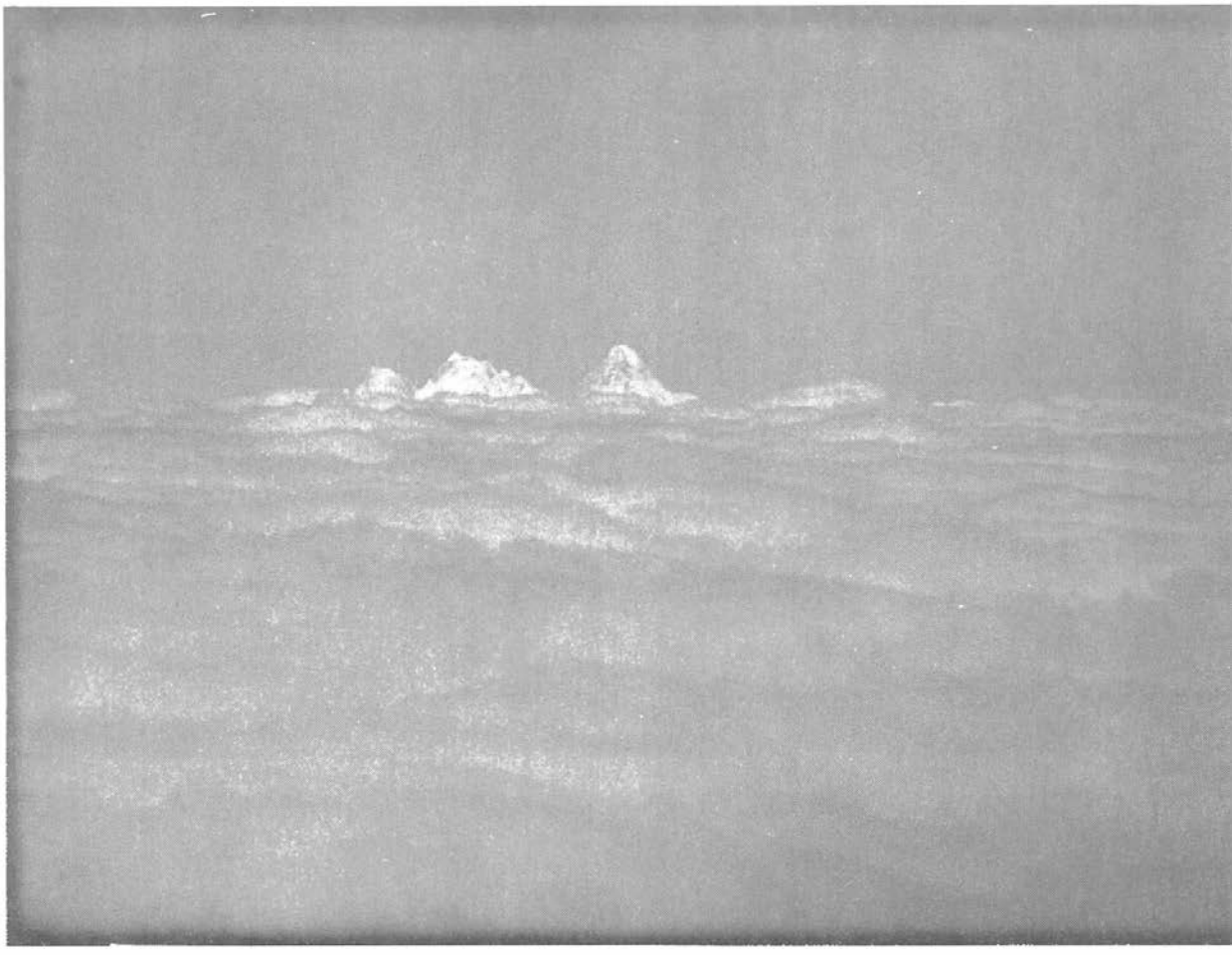


Rattan Singh
ラッタン・シン



Mahavir Thakur
マハビール・タクル

Rajeev Sharma
ラジィブ・シャルマ



a view of Rimo Mountains from the summit.

雲上に浮かぶリモ山群

有志者事意成也

日本ヒマラヤ協会
専務理事　稲　田　定　重

東部カラコルム(インド領)の山々の名が有志の間でささやかれ出したのは、今から１５年前頃からであった。当時、東部カラコルムにあって最も我々を引き付けていたのは、サセル・カンリであった。マモストン・カンリは言うに及ばずであるが、それは、余りにも奥にあり、国境(停戦ライン)に近く、一層の難しさを意識していたことからであった。

以後、サセル・カンリは、ＨＡＪの精神である未踏への憧れの象徴となってきたのである。そして、その彼方にそびえるマモストン・カンリは、サセルに続く遙かなターゲットであった。

1973年、最初の正式アプリケーションを出した当時は、ラダックそのものさえまだ開かれていなかったのである。サセルをやれるなら職を投げ打ってもと、正直、何人かの人間はそう思うほど、此の地への意志は強烈だったのである。

アプリケーションは、辛抱強く毎年出し続けられた。１２年の時の流れの間にＨＡＪとインドとの結び付きは次第に強められ、また、国際情勢も幾変転を重ねた。そして、推進する中核も入れ替わりがあったが、思いは絶えることなく引き継がれた。

1984年９月13日、見事にそれはマモストン・カンリの頂上に結果した。サセル・カンリ隊もこの７月に出発する。同じような積み重ねは、ブータン、ネパール、中国にも見ることが出来る。今まさに結実しようとしているものもあり、密かに芽をふいて進行しているものもある。

頂に立った者は、たどってきたトレールの彼方に連なる多くの先蹤者に想いを馳せるべきであり、新たなトレールを開拓する務めを負ってほしいと念願する。マモストン・カンリへのそもそもの道を拓いた沖允人氏に託して感謝を捧げるものである。

そして、誰にもましてインドを愛し、東部カラコルムへの道途中にして、ナンガ・パルバットに消えた角田不二氏の霊にこの書を捧げるものである。

『有志者事意成也』・・・志あれば事ついに成る・・・この言葉は、常に希望であり、心の支えである。たとえ今は、絶望的な状況にあろうとも志を持ち続けることである。それは、年月を経て発酵し、やがて芳醇な美酒となろう。それを汲む者も発酵させた者も共に幸いではないか。

１９８５年６月

はじめに

隊長　尾形好雄

1984年の夏は、一際暑い夏であった。

7月の中旬に先発隊を送りだした後、インド側の準備が遅れているので本隊の出発は少し遅らせてくれとの連絡が入り、本隊の出発は1週間遅らせた。そして、まさかこの1週間に、悲しみの深潭に突き落とされ完膚なきまでに自分を打ちのめす事態が起るとは夢にも思わなかった。

ＨＡＪナンガパルバット隊の遭難の第一報が外務省領事課よりもたらされたのは7月23日であった。ナンガパルバットの隊長角田不二君は、マモストン・カンリの隊員としてナンガパルバットの登山終了後、スリナガールで落ち会うことになっていたのである。その頼りにしていた角田君らの思わぬ悲報に我が耳を疑った。

然し、事態は日増しに悲劇を肯定する方へと進み、憂色が濃くなっていった。事務局に連日泊り込み神経の擦り減るような応対に多忙を極める中で、「いざ出陣！」と高まっていたマモストンへの意欲は次第に消え失せていった。何度も「行くべきなのだろうか。」の自問を繰りかえし思い悩んだ。最終的に稲田専務理事をはじめＨＡＪの会員諸兄より「後は何とかするから是非行くべきだ。」の励ましの言葉に意を決し、正に断腸の思いで出発することになった。

出発当日は、暗黒の雨雲が上空を覆い、車軸を流すような豪雨の中を成田へ車を走らせた。正に自分達の出発を暗示するかのように嵐の中を飛び立つた。機内で、自分が念じた事は「何としても事故は起こせない、何が何でも全員無事に連れ戻らねばならない。」と云う思いであった。

インド人と一緒と云うことで、それでなくとも気苦労の多い合同登山の中で、このプレッシャーは両肩にずしりとのしかかり最後まで解放されることは無かった。隊長として何度かヒマラヤへ出かけた中で今回ほど精神的苦痛を味わった遠征も無かった。

それだけに、9月13日、15日、16日の3度にわたるアタックで全員が初登頂に成功した時は、本当に嬉しかった。「千人の悪魔」の絶頂は自分のヒマラヤ登山の中でも感慨深い思い出の一頁を記してくれた。

こうして、千載一遇の好機を得て地球上に残り少なくなった未踏峰にインドの岳友と共に初登頂の旗を掲げることが出来ましたのも、偏にこの遠征を支えて下さった皆様方の深い御理解と御支援、御協力の賜と隊員一同深く感謝を申し上げます。

ここに、自分達の足跡を記した拙い報告書を上梓しましたので御一読頂ければ幸甚に存じます。

１９８５年5月

目　　次

有志者事意成也 …… 稲田定重
はじめに …… 尾形好雄
第1部　計　画
計画概要 …… 9
登山隊員 …… 12
第2部　報　告
マモストン・カンリ初登頂 …… 19
頂　へ …… 32
関嶺を越えて …… 35
シアチェン氷河をめぐる印・パ国境 …… 41
隊荷の輸送及び通関 …… 44
合同隊について …… 48
東部カラコルムの気象 …… 50
インドの食糧品価格の一例 …… 52
隊務日誌及び行動概要 …… 53
MOUNTAIN OF THOUSAND DEVILS(英文) …… 58
第3部　資　料
登攀行動表 …… 67
隊員別行動表 …… 71
インド・ヒマラヤ解禁峰一覧 …… 74
新聞スクラップ …… 85
協力者名簿
編集後記

I　計　　画

計画概要

登山隊員

計画の概要

趣　　旨

日本ヒマラヤ協会は、創立以来１０数年、高地アジアの山々を対象に連続的な登山と調査・研究活動を実施しながらこの分野をリードし、その発展に尽力してまいりました。

此の度、私達は更に大きな飛躍を求めて東部カラコルムの未踏峰へ登山隊を送るべく準備をしております。

東部カラコルムのシャイヨーク河とヌブラ谷の間に挟まれて南東に連なる山脈には、リモ・ムズターグやサセル・ムズターグといった未踏峰の宝庫ともいうべき魅力ある山群が横たわり、世界のヒマラヤニスト達を引きつけてやまない垂涎の地となっております。

然しながら、この辺りのヌブラ・シャイヨーク・アクサイチン地区は、インド・パキスタン・中国の三国が境を接しているため、これまでも度々国境紛争の場となり、未だに外国人の立入りが許されない厳しいコントロール・エリアとなっております。

今般、当、日本ヒマラヤ協会は１０年の星霜を重ねるインドとの継続折衝が実って、東部カラコルムの未踏峰では最高峰であるマモストン・カンリ(7,516m)の登山許可を取得しました。これは、インド登山財団（ＩＭＦ）との合意に基ずきインド登山財団側との合同隊という条件付きで許可されたものであります。合同隊とはいえ、とにかくもこの待望久しいインド北西辺境地区へ外国登山隊としては、印・パ分離独立以来初めて入域することを許されたのであります。

地球上に残された7,500m台の未踏峰も１０指に数えられるほど残り少なくなった現在、この好機を最大限に活用して、目標とするマモストン・カンリのみならず自然科学、人文科学上深い興味がもたれるこの地域について様々な成果をもたらす所存であります。

何とぞ、本遠征の趣旨を御理解の上、絶大な御支援を賜りますようお願い申し上げます。

１９８４年４月

日本・インド合同カラコルム登山隊１９８４
隊長　尾形好雄

目標の山と遠征の目的

1．目　標　の　山

東部カラコルム、マモストン・カンリ峰(Mt.MAMOSTONG KANGRI) - 7,516m -

（　北緯３５度０８分、東経７７度３５分　）

2．登　山　期　間

１９８４年7月 ～ 9月

3．遠　征　の　目　的

1）未踏峰・マモストン・カンリの初登頂

2）インド登山家との交流親善

隊の名称・組織

1．隊　の　名　称

日本・インド合同カラコルム登山隊１９８４年

(英文名) INDO-JAPANESE JOINT KARAKORAM EXPEDITION 1984.

(略　称) ＩＪＫＥ－84

2．主　　催

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN (H A J)

インド登山財団

INDIAN MOUNTAINEERING FOUNDATION (I M F)

3．隊　の　構　成

日　本　側：隊　長　尾形好雄(36)　隊　員　　4名

インド側：隊　長　Col. Balwant Sandhu(48)　隊　員　　6名　　医　師　1名

4．推　進　の　組　織

日本・インド合同カラコルム登山隊実行委員会

会　　長	柴田金之助(日本ヒマラヤ協会々長)
実行委員長	稲田定重(　〃　専務理事)
副実行委員長	尾形好雄(登山隊々長)
事務局長	山森欣一(日本ヒマラヤ協会事務局長)
委　　員	八木原圀明　飛田和夫　登山隊々員
事　務　局	〒160　東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル 506号 日本ヒマラヤ協会　電話 03-367-5821
現地連絡先	INDIAN MOUNTAINEERING FOUNDATION(ＩＭＦ) Benito Juarez Road, Anand Niketan, New Delhi-110 021, INDIA. Phone : 671211

目標の山の概要

母なるインダスの遥かな水上の一つであるシャイヨーク河は、カラコルムの東部、リモ氷河を源頭として、その直ぐ下流でカラコルム峠及びその東方に広がるデプサン高原の北を源とするキプ・チャップ河を合わせて南下し、さらにパンゴン湖に発する支流を飲み込んだ後、サセル・カンリ山群の南端で突然流れを北西に転じる大屈曲部をなし、悠久なるインダスの流れへと注ぐ。このシャィヨーク河には、右岸から多くの氷河が流入しており、それらの氷河の流動は活発で、度々シャィヨーク河を堰止めては氷河ダムを形成し、やがて決壊して大洪水となって下流の村々に大きな被害を与えてきた。特にチョング・クムダン氷河のダムは有名で、1926年10月末にはこの氷河ダムが決壊して大洪水をもたらしている。また、1928年には上流5マイル以上にわたって大湖水を出現させ、翌年にはこの氷河ダムも決壊している。(※1)

一方、ヒマラヤの山岳氷河では最長の長さと云われるシアチェン氷河(72km)はその舌端でヌブラ河の流れへと注入し、やがてシャィヨークの流れに合流する。「ヌブラ」とは、ラダックの言葉で「緑の谷」を意味すると云う。その名の通りヌブラ谷は、この辺りの一面荒涼とした世界に潤いを与えてくれる。

このシャィヨーク河とヌブラ谷の間に挟まれて南東に走る山脈が、リモ・ムズターグとサセル・ムズターグの山塊である。1930年、K・メースン、F・E・ヤングハズバンドら当時の著名な地理、測量、探検関係者ら12名が一同に会して開かれたカラコルム協議会の区分によると、これらの山塊には次のような山群が属する。即ち、リモ・ムズターグには South Teron Group, Sherkar Group, Kumdan Group. サセル・ムズターグには Sas erGroup, Chhushkun Group, Shuupa Kanchang Group, Arganglas Group, Kunzang Group, Shyok Group が含まれるとされている。

本遠征で目標とするマモストン・カンリ(7,516m)は、このリモ・ムズターグに属するクムダン・グループの盟主としてサセル・カンリの北西に位置(北緯35度08分 東経77度35分) する。

マモストン・カンリは3つの大きな氷河を有している。南には約16kmのマモストン氷河が有り、この氷河は舌端でトロンボティ川と合流し、やがてこの流れはヌブラ河へと注ぐ。東には約20kmのタンマン氷河が横たわり、そして北西面にはこれも長大なチョング・クムダン氷河が有る。この2つの氷河はいずれもアッパー・シャィヨーク河へと注ぎ、時として前述したような氷河ダムを形成してきた。

「マモストン」の謂は、ヤルカンドの伝説から来ていると云われる。昔、中央アジアからの隊商の一隊がサセル・ラ(5,328m)の高嶺を越えた所で大勢死んでるのが発見され、それ以来この山が「千人の悪魔の山」と呼ばれるようになったと云う。こうした伝説もこの山が、ラダックのレーと中央アジアのヤルカンドを結ぶ古来の中央アジア交易路の傍に位置していたからであろう。

こうした怨念のこもった名の由来のせいか、1860年代に測量された山でありながら、長い間沈黙を保ち本格的な登山活動の記録が見聞されないまま不遇をかこってきた。インド測量局からK-32のマップ・ナンバーを付与されたこの山を最初に探査したのは、1907年のアーサー・ニーヴ、D・G・オリバーの一行であろうか。その後は1928年にイギリスのM・L・A・ゴンパーツらがマモストン氷河に入った記録が見られる。然し、以後約40年の間この山への足跡はみられず、1969年になってプレム・チャンド大佐の率いるインド陸軍隊がマモストン氷河に入って偵察を行った。

このようにこの山の記録は少なく、従って同峰の写真も少ない。これまでに発表された殆どの写真が遠望写真で、山容を識別できる程度のものばかりでルートを検討出来るような写真は未見である。

(※1: Himalayan Journal Vol 1 P4 by F.Ludlow, Vol 2 P35 by J.P.Gunn)

登山隊員
CLIMBING MEMBERS LIST

<日本側メンバー>

(1) 生年月日　(3) 勤務先
(2) 住所・TEL　(4) 登山経歴（海外）

隊　長

尾形好雄　1）1948年7月生
Yoshio Ogata.　2）東京都中野区

3）日本ヒマラヤ協会事務局
4）1974年春　ツクチェ・ピーク(6,920m)隊長、登頂者
1978年春　ヒマルチュリ(7,893m)隊長、西峰初登頂者
1980年秋　ケダルナート・ドーム(6,831m)隊長、登頂者
1981年春　カンチェンジュンガ(8,598m)縦走隊長、西峰登頂者
1981年秋　ナンダ・カート(6,611m)捜索隊副隊長
1983年秋　ナンダ・カート(6,611m)隊長
1984年秋　マモストン・カンリ(7,516m)隊長、初登頂

副隊長

山田　昇　1）1950年2月生
Noboru Yamada.　2）神奈川県川崎市

3）(株)カモシカ・スポーツ
4）1978年秋　ダウラギリⅠ峰(8,167m) 登頂者
1980年春　カンチェンジュンガ(8,598m)偵察
1980年秋　ケダルナート・ドーム(6,831m)副隊長、登頂者
1981年春　カンチェンジュンガ(8,598m)登頂者
1981年秋　ランタン・リ(7,239m)登攀リーダー、初登頂者
1981年秋　ナンダ・カート(6,611m)捜索
1982年秋　ダウラギリⅠ峰(8,167m)登攀リーダー、登頂者
1982年冬　マナスル(8,163m)隊長
1983年秋　ローツェ(8,511m)登攀リーダー、登頂者
1983年冬　エベレスト(8,848m)登攀リーダー、登頂者
1984年秋　マモストン・カンリ(7,516m)初登頂者
1984年冬　アンナプルナⅠ峰(8,091m)登攀リーダー

隊　員

新郷信廣　1）1943年3月生
Nobuhiro Shingo.　2）佐賀県佐賀市

3）新郷酒店（自営）
4）1978年夏　マッキンレー(6,194m)副隊長、登頂者
1980年秋　ケダルナート・ドーム(6,831m)登頂者
1981年秋　ナンダカート(6,611m)捜索

1982年冬　マナスル(8,163m)
1983年秋　バルテクンタ(6,578m)副隊長
1984年秋　マモストン・カンリ(7,516m)初登頂者

隊　　員
吉田憲司　1）1953年1月生
Kenji Yoshida.　2）東京都新宿区

3）日本ヒマラヤ協会事務局
4）1979年　ヨセミテ
1979年　カナディアン・ロッキー
1980年　ヨーロッパ・アルプス、グランドジョラス北壁他
1981年　ヨーロッパ・アルプス、フレネイ中央岩稜他
1982年夏　ハチンダール・キッシュ(7,163m)副隊長、初登頂者
1983年秋　スークーニャン(6,250m)偵察
1984年秋　マモストン・カンリ(7,516m)初登頂者

隊　　員
岩崎　洋　1）1960年2月生
Hiroshi Iwasaki.　2）栃木県足利市

3）明治大学々生
4）1984年秋　マモストン・カンリ(7,516m)初登頂者

<インド側メンバー>
隊　　長　バルワント・S・サンドゥ大佐（48）
Col. Balwant S・Sandhu
ウッタルカシのネルー登山学校々長
IMF 及び ヒマラヤン・クラブの終身会員
<主なる登山歴>

1964年	トリスル、ナンダ・デビィ	1979年	オーシャン to スカイ Exp.(新西蘭・印合同)
1966年	レオパルギャ	1979年	ラタバン
1967年	クリンウー	1981年	シブリン(国際隊)
1968年	ザナケル、シュクム	1982年	ガンゴトリI
1973年	ブラマー(英印合同)	〃	マナ・ピーク
1974年	チャンガバン(英印合同)	1984年	マモストン・カンリ
1975年	ナンダ・デビィ縦走(仏印合同)		その他
1976年	キンナール無名峰I，II		
1977年	パワラ・ラング		

医　　師　ランジット・クマール(38)

Ranjit Kumar.

インド空軍々医

(住　所) 812, 12th Main, 1st Cross, HAL stageII,
Indira Nagar, Bangalore-560 038.

<主なる登山歴>

1978年　バルテクンタ(6,578m)

1979年　ムルキラ(6,517m)、KR I(6,157m)

隊　　員　ナンドゥーラル・プロフィット(42)

Nandlal Purohit.

グジャラート登山学校のインストラクター

(住　所) Gujarat Mountaineering Institute,
Sadhanabhavan, Mount-Abu, Rajasthan.

<主なる登山歴>

1963年　スリ・カイラス他

1964年　ディオ・ティバ

〃　ローター(プレ・エベレスト)

1966年　ハヌマンティバ他

1966～68年　マナリのW・H・M・Iでインストラクター。

1969年　アビガミン

1970年　ナンダ・デビィ

1971年　ナンダ・デビィ

1972年　ハヌマンティバ

1973年　マナ・ピーク

1974年　ガンゴトリI.II.III

1974年　マカルベー

1981年　ナンダ・デビィ

1983年　マナ・ピーク(プレ・エベレスト)

1984年　マモストン・カンリ

隊　　員　H・C・チャーハン(33)

H・C・Chauhan.

インド陸軍山岳戦登山・スキー学校インストラクター

(住　所) c/o 56 A・P・O India.

<主なる登山歴>

1981年～82年　インド陸軍ヒマラヤ・トラバース800Km.
アイランド・ピーク(6,160m)
パルチャモ(6,187m)
ストック・カンリ(6,153m)他

1983年　マナ・ピーク(7,272m)

1984年　マモストン・カンリ(7,516m)

隊　　員　　P・M・ダス(33)

Parash Moni Das.

パンジャブ州、ルディアナ市警察官

(住　所) Superintendent of Police,

Ludhiana City, Punjab.

<主なる登山歴>

1974年　アングドゥ・リ(5,791m)

1975年　ガンゴトリ II(6,599m)

1978年　バンダールプンチ(6,387m)

1981年　バギラティII(6,512m)

〃　　パルバティ・パルバット(6,096m)

〃　　マカルベー(6,069m)

1982年　ガンゴトリ I(6,672m)

1983年　マナ・パルバット(6,794m)

1984年　マモストン・カンリ(7,516m)

隊　　員　　ラッタン・シン(31)

Rattan Singh.

ネルー登山学校のインストラクター

(住　所) Nehru Institute of Mountaineering.

Uttarkashi-249193, U・P.

<主なる登山歴>

1972年　ナンダカート(6,611m)

1973年　ケダルナート・ドーム(6,831m)

1976年　ナンダ・デビィ東峰(7,434m)

1981年　ナンダ・デビィ(7,816m)

1984年　エベレスト(8,848m)

1984年　マモストン・カンリ(7,516m)

隊　　員　　マハビール・タクル(27)

Mahavir Thakur.

マナリ登山・スキー学校のインストラクター

(住　所) Mountaineering Institute and Allied Sports

Manali, Manali-175131, H・P.

<主なる登山歴>

1980年　クル・プモリ(6,553m)

ムルキラ(6,517m)

ディオ・ティバ(6,001m)

レオ・パルギァル(6,791m)

1982年　カブルー・ドーム(6,600m)
1983年　マナ・ピーク(7,272m)(プレ・エベレスト)
1984年　マモストン・カンリ(7,516m)
　　他にシグリ・パルバットなど

隊　　員　　ラジィブ・シャルマ(29)
Rajeev Sharma.
マナリ登山・スキー学校のインストラクター
(住　所) Mountaineering Institute and Allied Sports
Manali, Manali-175131, H・P.
<主なる登山歴>
ガンゴトリ I(6,672m)
ムルキラ(6,517m)
ダルムサラ(6,445m)
シャルミリ(6,096m)-C B53-
ディオ・ティバ(6,001m)
シグリ・パルバット(6,645m)

<高所ポーター・コック>

高所ポーター　　ナレシ・タパ
Naresh Thapa.
ヒマレィ・シェルパ(26)
Himaley Sherpa.
ケシ・バハドゥール・タパ(26)
Kesh Bahadur Thapa.
コ　ッ　ク　　スリンディラ・ドゥット
Surinder Dutt.
パァタープ・シン
Partap Singh.

II　報　　告

マモストン・カンリ初登頂

頂　　へ

関嶺を越えて

シアチェン氷河をめぐる印・パ国境

隊荷の輸送及び通関

合同隊について

東部カラコルムの気象

インド食糧品価格の一例

隊務日誌及び行動概要

a view of snow cap of Mamostong Kangri from the Skyampoche.
▲スキャンポチェ手前から初めて見るマモストン・カンリ

はじめに

「千人の悪魔」と言う気味悪い異名を取るマモストン・カンリから招待状が届いたのは今年の正月早々であった。

当、協会がこの東部カラコルムに連らなるリモ・ムズターグやサセル・ムズターグの山群に興味を持って、インド登山財団（ＩＭＦ）をはじめとするインドの関係諸機関にアプローチを開始したのは古く、１０年も昔の１９７３年であった。以後、機会あるごとに打診してきたものの仲々色良い返事を貰うことはできず、いたずらに星霜を重ねるだけであった。

それでも諦めずに根強く継続折衝を重ねてきた結果、昨年の１２月に所用で来日されたＩＭＦ副総裁のCap.M・S・コーリー氏に例によって登山許可の件を打診したところ、意外にもＩＭＦとの合同なら許可されるだろうとの耳よりな話しを聞かされた。

そして、明けて正月早々、ＨＡＪが毎年開催している恒例の「インド・ヒマラヤ会議」の席上、講師として招請したコーリー氏より、今年、ＩＭＦとＨＡＪの合同でマモストン・カンリへ登山隊を派遣すると言うセンセーショナルな発表がなされた。

ＨＡＪは当初、サセル・カンリと言う事で長らく折衝してきたのであるが、登山許可が具体的になった時点で、既登峰よりは未踏峰をと言う事でリモ・ムズターグの盟主で、東部カラコルムの未踏峰の中では最高峰であるマモストン・カンリ（７,５１６ｍ）に目標は変更された。

早速、１月下旬には稲田専務理事が訪印してＩＭＦと合同隊についてのネゴシェーションを行い基本的な合同条件が決められ、日本側では出発準備に着手した。

然し、其の後インドの国内事情に変化があったのか我々のエントリー・ビザは仲々交付されず、月日だけがどんどん経過していった。

この間、新聞、テレビ等ではパンジャブ州のシーク教徒の暴動でアムリッツァールのゴーデン・テンプルに軍隊が入ったと言うショッキングなニュースをはじめとし、スリナガール発国内機のハイ・ジャック事件、反ガンジー派のカシミール州政権の崩壊、そしてシアチェン氷河に於ける印・パ両軍の衝突など我々にとっては不安材料ばかりのニュースが報道され、憂色がただよった。

６月下旬に隊荷発送と入国通知をＩＭＦに送ったところ、『隊荷は送るな、隊員の出発は待て。』と言ったテレックスが届き、我々の出発は増々絶望色が濃くなった。当然の事乍ら出発準備の方は一時ストップとなり、やりきれない日々が続いた。

失望のドン底に沈んでた我々に朗報がもたらさ

れたのは7月4日であった。漸くGO/サインが出たのである。

7月8日に来日されたコーリー氏にそのへんのいきさつを伺ったところ1週間に及ぶ政府との交渉で漸く許可を認めて貰ったとの事。IMFも仲々大変だったらしい。

こうして、どうにかこうにか我々の長年の夢は叶えられ、東部カラコルムの垂涎の地へと飛び立つことができたのである。

計画概要

サセル・カンリに長い間想いを馳せてきたHAJでは、この方面の資料はかなり蓄積されており、アプローチに関する資料はそれほど苦労せずに入手することができた。

然し乍ら、ことマモストン・カンリに関する資料となると極端に少なく、ルートを検討できるような写真や詳しい地図などは手に入らなかった。国内で見聞できる写真となると、殆どの写真が山容を識別できる程度の小さな遠望写真ばかりで、西面以外からの写真をみることはなかった。

インドの山岳関係者へも写真、資料等について問い合わせしたところ、N・クマール氏から2枚の写真が送られてきた。この写真は、同氏がヌブラ、シアチェン、シャイヨークと空撮した際の写真で『この山が99%、マモストン・カンリだと思う。』とのコメントがつけられてあった。この写真が唯一入手できたマモストン・カンリの全容写真であったが生憎と余り鮮明でなく、ルート検討等には余り参考にならなかった。

結局、AMS(US Army Map Service Corps of Engineers)の25万分の1の地図を頼りに北東面のチョング・クムダン氷河側からマモストン・カンリ北東稜にルートを取ることにして当初の計画がたてられた。

このチョング・クムダン氷河側に登路を求めたのにはもう一つの理由があった。それは、日本人として実に76年振りに辿ることになるあの中央アジア交易ルートを通って一歩でもカラコルム峠へ肉迫したいと言う気持とリモ氷河等の踏査もしてみたいと言う願望からである。

然し、本隊がデリー入りした時点でこの当初の計画は修正される事になった。

インド陸軍にはこのエリアすべてにわたって美しい3色刷りの5万分の1の地図ができており、40m毎にコンターの入ったこの詳しい地図を見るとマモストン・カンリの地形はすべて明らかになった。日本から持参したAMSや学研など幾つかの地図と照し合わせてみると尾根、氷河の派生具合がかなり違っており、チョング・クムダン側から北東稜に取付くのはかなり難しい事が窺われた。

加えて計画段階から懸念されていたアッパー・シャイヨーク河の増水問題について、カラコルム峠へ行ったことのあるインド側メンバーより助言があり、アプローチの困難さを知らされた。

これらの事由から当初の計画は変更され、ルートを南面のマモストン氷河側に取ることにした。

メンバーは当初、日印双方7名づつのフィフティ・フィフティで構成する筈であったが、日本側が5名に減った為、インド側で1名増やして8名となり、13名の隊員構成となった。

——日本側メンバー——

隊長　尾形好雄(36)　副隊長　山田　昇(34)
隊員　新郷信廣(41)　隊　員　吉田憲司(31)
隊員　岩崎　洋(24)

——インド側メンバー——

隊長　バルワント・S・サンドウ(49)
ドクター　ランジット・クマール(38)
隊員　H・C・チョーハン(33)
〃　マハビール・タクル(27)
〃　ナンドゥ・ラル・プロフィット(42)
〃　P・M・ダス(31)
〃　ラッタン・シン(31)
〃　ラジブ・シャルマ(29)

アプローチ

7月14日、15日と山田、吉田の2人を先発として相次いで出発させた後、本隊の3名は7月28日に成田を飛び発った。本隊の乗ったAI-315便はバンコックでエンジン・トラブルが生じ約15時間程遅れて、翌29日にデリーに到着した。

本隊が現地入りした時には粗方の出発準備は終っており、あとは若干の現地購入品の買足しと隊

荷の再梱包を残すのみであった。

8月1日、隊荷を積み込んだトラックをレーに向けて送り出し、翌2日に残りの隊員は空路スリナガールに向かった。

スリナガールでは、印パ停戦ライン駐屯軍の総司令官、P・N・フーン陸軍中将よりティー・パーティの招待があったり、軍のジープで名所景勝地を案内されるなど熱烈な歓迎を受ける。

8月3日、スリナガールを後に空路レーへと向かう。スリナガール空港では、過日のハイ・ジャック事件の御蔭で厳しいセクレタリー・チェックが行なわれ閉口する。幾重もの厳しいチェックを受け、漸くIC－429便の機上に乗り込んだ後、搭乗機は30分程遅れてスリナガールを飛び発った。

スリナガールからレー迄は、僅か30分程のフライトであるが、この間、素晴らしいマウンテン・フライトが満喫できる。重畳と連らなる雪嶺を眼下に見降し、ひときわ大きく聳えるヌン・クン山群を飛び越えると間も無く、眼下に広がる様相は一変する。それ迄眺めていた氷雪の世界が眼下から遠のくと今度は見事に浸蝕された赤茶けた山肌が飛び込んでくる。まるで月世界を想わせるような荒涼とした景観が暫く続くと、やがて砂漠の中のオアシスのように谷間に僅かな緑地が見降せるようになり、程無くレーに着く。

我々は、このレーで隊荷の到着待ちやヌブラ谷のポニー、ポーターのアレンジと言った準備で1週間の滞在を余儀なくされた。それでも丁度レーでは8月5日から1週間、夏のフェステバルが開催され、連日いろいろな催しがあってこの入山前の長い滞在も厭きることなく楽しむ事ができた。

8月1日にデリーを出発した我々のトラックは5日夜遅くレーに到着した。パンジャブ州のトラブルやスリナガール～カルギル間の道路アクシデントなどで陸路の隊荷搬送は仲々大変だったようである。

一方、ヌブラ谷に於けるポニーのアレンジもレーのフェステバルにやって来ていたヌブラ谷のボスに運良く会う事ができ、我々の隊に便宜を計ってもらえることになった。

ポーターの方は、ヌブラ谷で雇うことは難しいと言われたので、レーに出稼ぎに来ていたネパール人を募って14名ほど連れていく事にした。カルドン・ラから先に入るには、ネパール人のポーターと言えどもラダック地区ディプティー・コミッショナー（D・C）の入域許可が無いと立入ることは許されず、この許可取得の為にレーの出発はさらに1日遅れてしまった。

8月10日、レーでの長い滞在を終えて、いよいよヌブラ谷へ出発。アーミー・トラック3台に隊荷を積み、このトラックにそれぞれ隊員ポーター達が分乗する。

カルドン・ラを越えて

レーを後に我々を乗せたトラックは、草木一本見当たらない赤茶けた山腹を砂塵を巻上げ、エンジン音を唸らせて進む。時速はせいぜい10～20㎞／Hの遅々としたスピード。途中、何度か止まってはラジエターに水をかけ、エンジンを休ませ休ませ走る。それでも最後の1台はカルドン・ラの5分程手前でダウンしてしまった。

レーから喘ぎ登ること2000m。自動車で越える事のできる峠としては世界で最も高いカルドン・ラ（5.486m）に着く。

ラダックのレーからシャイヨーク河に入域しようとする場合、どのルートを辿ろうともインダスとシャイヨークの分水嶺をなすラダック山脈の高い峠を越えなくてはならない。チャン・ラ（5.360m）、ワリ・ラ（5310m）、ディガー・ラ（5420m）、カルドン・ラ（5486m）、ラシルモウ・ラ（タンラスゴ・ラ、5420m）などいずれも5000mを越す高い峠となっている。然し、この関嶺も今では、ヌブラ・シャイヨークの前線基地への軍

▲カルドン・ラの手前から見るストックカンリ山群
a view of Stok Mountains from the road to Kardung La

事補給道路として車で越えられるのであるから便利なものである。

このカルドン・ラに立つと初めて正面にサセル・ムズターグ山群の雪嶺が眺められる。然し乍ら目指すマモストン・カンリやサセル・カンリの雄姿はラダック山脈の支稜に邪魔されて見ることはできない。

峠にはヒンズー教のお堂が建てられてあり、この峠を通る者の手向の神が祭られている。

峠からの下り道もひどいもので、峠の直ぐ下で懸垂氷河を横切り、デコボコ道のつづら折りを車はゆっくりと高度を下げる。峠から小1時間ほど下ると「ノース・ブルー」と言う軍補給隊の中継キャンプがある。峠の反対側（レー側）には同じ様に「サウス・ブルー」と言う中継キャンプがあり、この両所で峠を往き交う車の交通整理をしているようである。

これより車は、バルカ・トゥクポの流れに沿ってシャイヨーク河へとひたすら高度を下げて行く。見事に浸蝕された土砂の大ゴルジュや広大な扇状地、飛行場が出来そうな河岸段丘など大自然の素晴しい造形美には只々驚嘆の連続であった。

やがて眼下にシャイヨーク河が俯瞰できるようになり、その河幅の広いことと言ったら地図から想像する以上の広さであった。その広い河幅の中をまるで墨流しでもするかのように真黒な濁流となって流れるシャイヨーク河は将に悠久なる流れそのものである。

シャイヨーク河の河床に下り切った所にカルサルと言うアーミー・キャンプが在り、埃で真白になった顔を洗って、一休みする。

この先、ヌブラ谷への道は、暫くシャイヨーク河左岸に沿って走り、やがて砂漠のような広大な河原を突っきってからシャイヨークを対岸に渡る。

シャイヨーク河右岸の山々から押し出された巨大な扇状地の土砂は幾つもの小山のように積み上がり、この小山を捲いて広大な扇状地に上がると正面に青々としたヌブラ谷が広がってくる。

「ヌブラ谷」とは、ラダック語で「緑の谷」の意味だと言う。そしてラダックの人達はこの谷を緑の多いこの世で最も美しいところだと誇らしげに語る。

東部カラコルム概念図

あのブラウン一色の荒涼とした世界からやってきてこのヌブラ谷の光景を見たら誰もが、そのように感じるであろう。緑と言ってもかん木帯の中に僅かにポプラや柳の木が見られる程度なのであるが……

この日は、シャイヨーク河から別れて、ヌブラ谷入口のスムレ村に泊る。

8月11日　スムレから今、キャラバンのロード・ヘッドであるサソマ迄は約45㎞の道程で、車で3時間ほどである。

この日は、出発前にこのスムレ村にある大きなゴンパを見学する。このゴンパは「サンタンリン・ゴンパ」と言い、テンジン・ギャルツオと言うラマがこのゴンパの僧長である。

今から350年ほど前に建立されたと言われるこのゴンパには4つのお堂が存り、それらのお堂にはいずれも素晴しい仏像、仏画、タンカ、教典……の数々が沢山あり目を見張らせられる。特に畳3～4畳分はあるかと思われる巨大なタンカには驚かされた。ラマの親切な説明を受けながら案内されるも、乏しい語学力と知識ではラマの説明を充分に理解することは難しく、残念であった。

2時間ほどのゴンパ見学の後、ラマに謝辞してサソマへと向う。

スムレ村を後に広大なヌブラ谷に車を走らせると1時間半ほどでパナミックの村に着く。この村には、軍はもとよりITBP、病院、学校等の施設が在り、かなり大きな集落である。また、村の入口には豊富な温泉が湧き出ており、挨まみれの身体を洗うのにはもってこいの場所でもある。我々が入山中は、この村より新鮮な野菜類を何度か

▲悠久なるシャイヨーク河の流れ
a view of Shyok River.

▲緑の谷、ヌブラ谷
the Nubra Vally is Green Vally.

B・C迄上げて貰うことができた。

パナミックからサソマ迄は約15㎞、小一時間の距離である。途中の道々には、ストパー、チョルテン、マニ車（立派なガラス張りのお堂に祭られた大きなマニ。）などが幾つも見られ、また、車から見る家々の造りも平屋根の石積み家屋であり、このヌブラ谷はどこ迄行ってもラマ教圏であることが窺われた。

パナミックから小一時間程度走ると、正面に広大な飛行場のように見える河岸段丘が現われ、ほどなくサソマに着く。

レーから此のサソマ迄、2日間の山岳ドライブで約160㎞の距離を走り、約2000m登って2.200m下ったことになる。此の地で我々のトラック旅行も終り、漸く尻や背中の痛みから解放されることとなった。

サソマのアーミー・キャンプを通り過ぎ、トロンポティ・ナラ（川）にかかる橋を渡った対岸に我々はキャンプを張った。

中央アジア交易ルートを辿って

サソマからB・Cへのキャラバンは、ポニーの手配の都合で4隊に分かれて出発することになる。

8月12日に第一陣が出発。以後、13日、15日、16日と順次サソマを出発してB・Cに向った。

サソマからの道は、昔のレーからサセル峠、カラコルム峠を経てヤルカンドへと至る、あの中央アジア交易ルートを辿るのであるが、その登り口はどこを登っていくのかと思うような凄まじい様相の懸崖とゴルジュが立ちはだかっている。

▲トロンポティ・ナラを俯瞰する
a view of Ttumputti River

サセル峠より流れ来るトロンポティ・ナラ(川)は、ヌブラ谷へ出合う手前に大ゴルジュ帯をつくり、沢沿に遡る事はできず、道は右岸にそそり立つ大岩壁に取られており、その道は石を積み上げて作ったギャング・ウェイで幾度となくジグザグ・ターンを繰り返し、一気に600 mもの高度を稼いでしまう。このはてしない石の道を登りつめたところがトロンポティ・ラである。この峠に立つと眼下にはヌブラ谷の白い河床が俯瞰でき、行く手には両岸が切り立ったトロンポティ・ナラの激流が眺められる。峠の下にはこの細い石の道から転げ落ちた哀れな馬の死骸が灼熱に照らされており、よくもこのような険しい道を荷を積んだ隊商が通ったものだと感心させられる。

峠から一旦、トロンポティ・ナラの河原迄高度を下げた後、また登り返しとなり、河原からひと登りするとウムロンに着く。このウムロンには何軒もの石積みシェルターがあってインド軍が駐屯している。

このウムロンの下は、トロンポティ・ナラの川幅が僅か2～3 mにもせばまる大ゴルジュ帯となっており、このゴルジュ帯にかけられた石の橋を渡って対岸に渡り、河岸段丘のボロボロの懸崖につけられた道を登る。一気に150 mほど登って左岸の河岸段丘上に上がるとほどなくサソマから一日目の泊り場、ジンモチェに着く。

2日目は、ジンモチェから左岸の河岸段丘上の道を辿るが途中、2本のナラ(川)が出合い、水量が多く渡渉に苦労させられる。

河岸段丘から一旦、トロンポティ・ナラの河原に降り、暫く河原を歩いてから再び河岸段丘に上がった所が、2日目の泊り場であった。ジンモチェから馬の足でも4時間弱と言う短かい行程である。

ここ迄来ると谷の前方には、マモストン氷河のモレーンの押し出しが眺められるようになり、双眼鏡で我々のB・C予定地も確認できる。

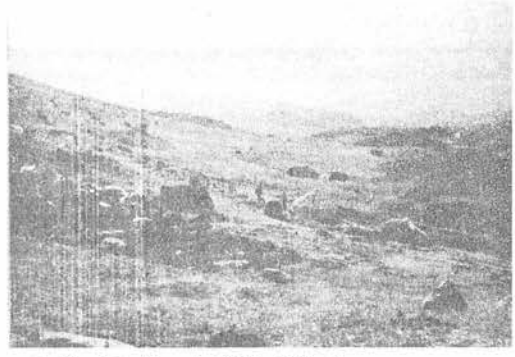
3日目は、前日の宿泊地から40分ほどでスキャンポチェに到着する。このスキャンポチェの手前で我々は初めてマモストン・カンリの雄姿を目にすることができた。此の地からの眺望は前山にはばまれて頂上付近しか見ることはできないが、それでも初めて目にする自分達の山に皆、食入るように双眼鏡を覗きこんだ。

スキャンポチェにも、アーミー・シェルターがあってインド軍が駐屯しており、我々の登山活動期間中のメールのお世話をして戴く。また、ここには羊飼いも上がってきており、この荒涼とした地で500頭にも及ぶ羊が放牧されていた。

このスキャンポチェからは、一旦、サセル・ラの方へ辿り、マモストン氷河出合のさらに上流でトロンポティ川を渡渉して、対岸のモレーン台地に上がると我々のB・Cは直ぐである。

我々のB・Cは、丁度、マモストン氷河がトロンポティ川に合流する所の左岸のモレーン台地上で、高度4,600 mの地点。

こうして我々の往路アプローチは、サソマから3日間と言う短い日数でB・C入りができ、8月18日には全ての隊荷をB・Cに集結することができた。



▲ベース・キャンプ(4,600m)
Base Camp (4, 600m)

登山活動概要

8月16日、一足先にB・C入りした先発隊に依ってA・BCの予定地が決められた。

A・BCの位置は、B・Cからマモストン氷河左岸のサイド・モレーン上を進み、左岸側から最初にマモストン氷河に注入する支氷河を横切ったところのモレーン台地の上で近くにはコバルト・ブルーに輝く美しいモレーン湖が在り、気持の良いキャンプ地である。高度は4,900m地点。

8月18日、全隊荷がB・Cに集結したこの日B・Cで、安全祈願の"ハタケ"の儀式をヒンディー・スタイルで行い登山活動の無事を祈る。

翌19日より登山活動開始。この日A・BCへ荷上げに上がった尾形ら8名の隊員は、A・BC到着後、次のキャンプ・サイト偵察の為、マモストン氷河を遡り、約5,300m地点迄達する。

この日の偵察に依って初めてマモストン・カンリ南面の全容が明らかとなった。その南面の偉容たるや物凄く、一見して例のコル経由のルートを取るしか無いように思われた。この日はこの満足すべき偵察結果を持ち帰って全員B・Cに引き返す。

8月20日、この日からA・BC滞在者を送り込む。まず、第一キャンプ建設要員として山田、吉田、マハビール、ラジブ、ラッタムの5隊員とハイ・ポーター2名がA・BC入りする。

C・1建設

8月21日、C・1建設。前日A・BC入りした7名に依ってC・1が建設され、山田、吉田、マハビール、ラジブの4名はそのままC・1入りする。

A・BCからC・1へのルートは、A・BCのあるサイド・モレーンからマモストン氷河上に走るモレーン稜に移り、そのモレーン稜づたいにマモストン氷河をつめていく。途中、左岸から出合う支氷河を見送ると間も無くマモストン氷河が急勾配になっている個所が有り、これを登ると、その上で氷河は緩く右にカーブしてそのまま南面に立ちはだかる大岩壁へと続く。

この広大な氷河の中をさらに小一時間ほど登ると我々のC・1である。高度は5,600m。マモストン氷河の源頭部で南壁の基部迄15分ほどの所である。

8月22日、C・1入りした山田、吉田、マハビール、ラジブの4名は、C・2のルート工作に向かう。

南壁から南東に派生する稜線は、マモストン氷河とタンマン氷河の分水嶺をなしており、南壁直下の稜線上にはタンマン氷河への通用門の様なコルがある。果してこのコルが「希望のコル」になるのか「絶望のコル」になるのかは、B・Cでも懸念されていた。

▲マモストン氷河右岸の山々　a view of unnamed peaks at the head of Mamostong Glacier

マモストン・カンリ概念図

▲C・1 (5,600m)
Camp 1 (5,600m) at the head of Mamostong Glacier

C・1から10分程行くとコルへ突き上げる雪面が見上げられる。丁度、富士山の八合目辺りのような斜面がコルへと続いており、コル直下に2ピッチのフィックスを施す。雪面を登り終え、コル直下のガラ場を越えてコル(5,885m)に立つと、コルの反対側は懸垂氷河ですっぱりと切れ落ちており、大きなクレバスが口を開けている。

コルから右へ40m水平にトラバースした後、クレバスの一番口の開きが小さい所を目指して3ピッチ下り、ガラスの様なスノー・ブリッジを渡ってタンマン氷河の源頭に降り立つ。

この源頭部から俯瞰するタンマン氷河は一面なだらかな雪原となっており、クレバスもそう心配ないように思われた。

この日は、さらにこのタンマン氷河に足を踏み入れ、気の遠くなるような氷河横断に汗を流す。

8月23日、山田ら4名は、前日に引き続いてC・2のルート工作に向かう。

前日の最高到達点からさらに雪原をトラバースしていくと北東稜側からアイスフォールが幾状か落ちてきており、これの右寄りにルートを取る。数個所のクレバスと氷壁に3ピッチのフィックスを施し、さらに右上のアイス・プラトーに1ピッチ延ばして、此の地をC・2とする。前後が大きなクレバスに囲まれた6,100mの雪原上である。

C・2建設

8月25日、山田隊に替って、C・1入りした尾形、新郷、岩崎、チョーハン、ラッタンの5名は、この日C・2への荷上げとルート整備を行う。氷壁に打込んだアイス・ピトン類は一日で浮いてしまい、毎日、打ちなおすと言ったアルバイトを以後も強いられた。

8月26日、前日のアルバイトで体調悪い2人をC・1に残し、尾形、新郷、ラッタンの3名は、この日C・2を建設してそのままC・2入りする。

8月27日、C・2入りした尾形ら3名はC・3へのルート工作に向かう。

C・2からC・3間は大きなクレバスが錯綜しており、そのルート・ファインディングに時間を費やされる。

C・2から30分程登ると先ず最初の大きなクレバスが現われ行くてを塞ぐ。この最初の関門を越えるのに右へ左へと小1時間程タイム・ロスしてしまう。結局、ここは右側に走る岩稜寄りに大きくトラバースしてクレバスの右端から突破する。

このクレバスを越えるとその上は広大な雪原となっており、デブリが累々と残る雪原の横断を強いられる。

次いで急な雪壁を登るとまたもや断層帯が現われる。中ほどの雪の詰ってる所を越えてから雪壁を直登し、この個所に2本のフィックスを施す。

この上の少し傾斜の緩くなった雪面をさらに登っていくと今度は前にも増して大きな断層帯が現われる。ヒドン・クレバスに気を遣いながら急峻な雪壁を60m程直登し、この個所にも2本のフィックスを施す。此々を越えると間も無くその上で最後の大きなクレバスに阻まれる。この巨大なクレバスの下を左へ左へとトラバースして、左端のクレバスが雪で埋っているところから越え、その上の広大な雪原に入る。この間4ピッチのフィックスを張る。

▲C・2 (6,100m) Camp 2 (6,100m)

C・3から見おろすチョング・クムダン氷河
a view of Chong Kumdan Glacier from the Col

この雪原に出ると目前に目指す北東稜のコルが現われるが、この雪原の横断は長く、小1時間程費される。

北東稜に飛び出した所は、高度6,700mのコル状の地点で、そこからマモストン・カンリの北東稜は男性的なスカイ・ラインを描いて頂上へ急峻に迫上がっている。また、此々迄上がると目の前にはマモストン・カンリⅡ（別名チョング・クムダン・ピーク、7,071m）の素晴らしい峻峰が現われ、眼下にはチョング・クムダン氷河の縞模様が美しく続き、またその向こうにはデブサン高原に続く赤褐色の山脈が眺められる。

このコルをC・3予定地としてこの日はC・2へ戻る。

C・3建設

8月28日、前日C・3予定地迄ルート工作した尾形ら3名と前日C・2入りした岩崎、ナンドウの2名は、この日C・3の荷上げに向かいC・3を建設する。テント設営後、尾形、新郷、ラッタンの3名はC・1迄下る。

8月29日、C・3から上部のルート工作要員として岩崎、マハビール、ナンドウの3名がこの日C・2からC・3入りする。

8月30日、前日C・3入りした3名は北東稜上部のルート工作に向かう。3名が3ピッチ(150m)フィックスを延ばしている間、この日C・2から高度順化を兼ねて上がっていった山田、吉田が彼らに追いつきトップを交替する。

この日は氷塊が折り重さなるように連らなる急峻な北東稜上をうまく縫って13ピッチのフィックスを施し、約7,100m地点迄到達する。

一応、この日でアタック態勢は確立したとし、さらに必要と思われる残り5～6ピッチのフィックスは、アタック時に張りながら登ることにし、この日、C・3に上がってた隊員全員がC・2に下る。

8月31日、C・2の7名もアタック前の休養にA・BCへと下り、全隊員A・BCに集結する。

A・BCでは1パーティ6名から成る2つのアタック隊で全員登頂を狙うアタック・プランが練られ、隊員は最後の休養に入った。

ところが、休養に入った翌日から山は悪天候の周期を迎え、A・BCでも雨、雪、あられと惨々な天気に見舞われ肌寒い休養日となる。そしてこの悪天候は4日間続き、当初9月3日に一次隊を送り出す予定だったアタック・プランも遅延せざるを得なくなった。

9月5日、天候が回復したので第1次隊として山田、吉田、岩崎、チョーハン、ダス、ラジブの6名をアタックに向けて送り出す。

1次、2次隊のメンバー選考についてはインド側の隊長と意見が分かれた。処女峰の初登頂を狙うのであるから1次隊は強力なメンバーを揃えて

兎に角、頂上を陥落させる事に全力を上げるべきだと主張する我々の意見は取り上げられず、結局1次、2次両方の力のバランスを計って全員が登れるようにしたいと言う隊長の意見に押し切られてしまった。確かに全員登頂をする為にメンバーのバランスを計るのだと言えば良く聞えるが、実際問題として登高速度が全然違う者と一緒に組まされたのでは待たされる者がたまったものではない。強い者に弱い者を登らせて貰おうと言った他力本願的な甘い考えで見す見す初登頂を逃がすことにでもなったらと危惧しても聞き入れては貰えなかった。

9月6日、好天期間が到来したと思ったのも束の間、この日は朝から空一面暗雲におおわれ、午後4時頃から本格的な降雪となる。

前日C・1入りした1次隊はそれでも予定通り、C・2へ移動し、2次隊もA・BCからC・1へ移動した。

9月7日、前日の降雪は朝には止んでいたが、空は今にも降りそうな雪空で視界が悪く、キャンプ移動をどうしたものかと迷ってしまう。然し、C・1～C・2間の連絡はトランシーバーの調子が悪くて連絡が取れず、2次隊は予定通り悪天の中をC・2へと移動する。然し、前日C・2入りした1次隊はC・2から動けず停滞しており、この日はC・2に12名が泊ることになった。

結局、翌日も同じ様な悪天でバロメーターの針も下がったままの状態であった為、一旦、全員A・BCへ引き返す事にし、一気にA・BCへと下る。

今回、我々の遠征隊は「NISHIAN」と言うコール・サインを貰ってラジオ・インディアから毎日午後6時40分に高層気象を放送して貰った。3,100m、4,500m、5,800m、7,600mの各地点に於ける風向、風力、気温について通報して貰ったものであるが、これらのデーターを整理してみると8月中は、風向が南寄りに変わると2～3日天気が崩れるようになり、この大きな崩れは約2週間周期と言うパターンであった。

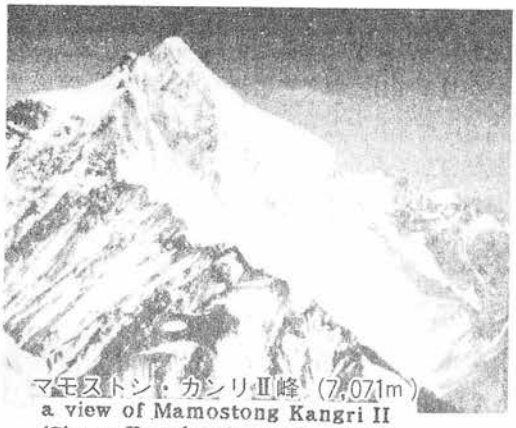
ところが9月に入ると風向に関係なく悪天候が続くようになり、折角の気象通報もうまく活用できなくなった。この9月上旬の悪天期間中はバロメーターの針が10ミリバール近く下がったままとなり、毎日バロメーターとにらめっこする日が続いた。

アタック

そして9月11日、バロメーターの針はぐんぐん上りだし漸く待望の好天が到来した。今度こそこの好天をものにしょうと、この日1次隊として前回と同じメンバーをA・BCから一気にC・2に送り込む。只、岩崎だけは今回が初めての高峰登山なので大事を取ってC・1泊りとする。

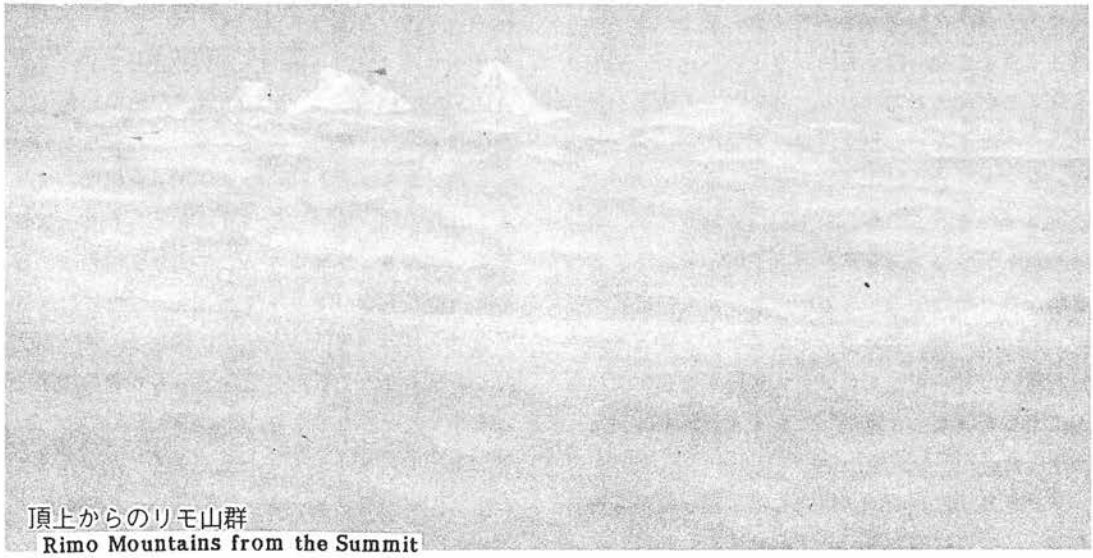
A・BCからC・2迄はかなりの長丁場となるが、それでも5時間程でC・2に到達した。

9月12日、1次隊の5名は、すっかり消えてしまったトレールにラッセルを強いられ、フィックスを掘起しながらC・3に移動する。C・3到着後山田、ラジブの2名は上部フィックスの掘起しに出かけ、他の3名はC・3の除雪に当る。雪で押し潰されたテントを掘起し、さらにもう1張のテントを設営して翌日のアタックに備える。



マモストン・カンリII峰（7,071m）
a view of Mamostong Kangri II
(Chong Kumdan Peak 7,071m)

マモストン・カンリIII峰（7,016m）
a view of the North Face of Mamostong Kangri III



頂上からのリモ山群
Rimo Mountains from the Summit

一方、2次隊の尾形、新郷、サンドウ、ナンドゥ、ラッタン、マハビールの6名も、この日A・BCを出発し、C・1で岩崎と合流した後、一気にC・2迄足を延ばす。

9月13日、マモストン・カンリ初登頂成功。

1次隊の5名は、午前4時半にC・3を出発して頂上に向かった。前日掘起しておいたフィックスを伝って登高を続け、午前8時少し過ぎにはフィックスの終了点に到達する。ここから山田トップでさらに5ピッチ、フィックスを施して7,200mの肩に出る。この肩まで上がると北東稜は若干傾斜が緩くなり、ピラミダルな山頂へと続く。

雪原状に広がる稜線はだんだんと細まり、急峻になってくる。チョング・クムダン側はすっぱりと切れ落ちており、少しのミスも許されない。細く切れ立った氷稜を慎重なアイゼン・ワークで登り詰めるとそこは頂上ではなかった。真の頂上はその奥に連らなる頂上稜線の先にあった。切れ落ちたチョング・クムダン側を避け、マモストン氷河側を捲きながら痩せ細った頂稜を辿る。2つ目のスノー・ピークを越え、3つ目のピークに登るとそこがマモストン・カンリの頂上であった。山田、ラジブ、吉田の順で頂上に立ったのは10時20分であり、C・3から約6時間のアルバイトであった。

頂上からの眺望は360度の素晴しいものであったが、生憎と西側の方には雲海がかかり、長大なシアチェン氷河を眺めることはできなかった。それでも雲海の上には、K12、サルトロ・カンリ・リモ山群と言った白い頂が顔を出しており、面白いアングルのパノラマが楽しめた。

其の後、チョーハン、ダスも登頂に成功し、正午少し前に下山の途についた。1次隊の5名はC・3で休憩後、C・2迄下る。

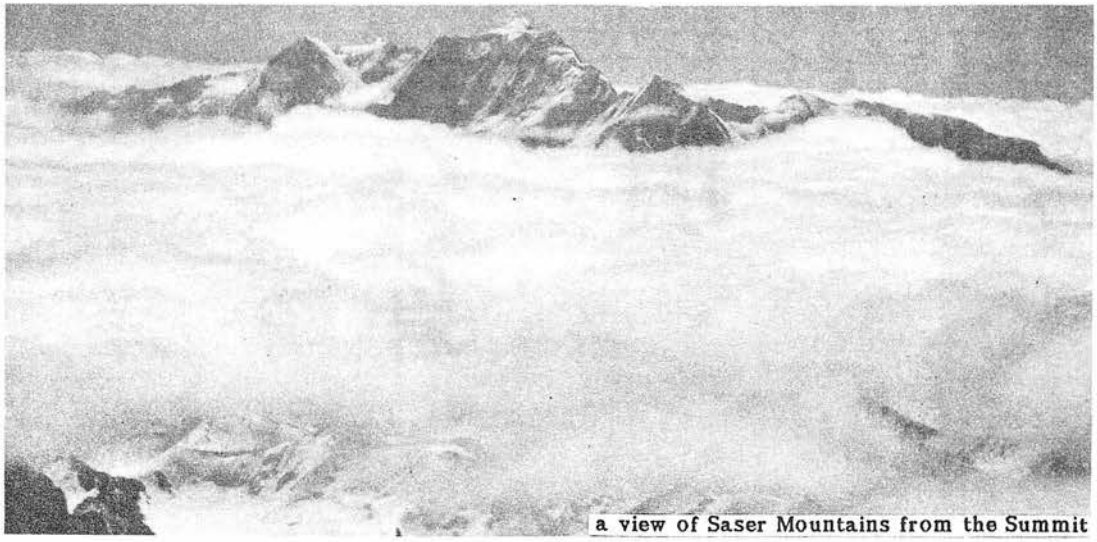
9月14日、前日迄の好天は一変して風雪が荒れ狂い、C・3入りした2次隊はテントに閉じこめられる。

夜半、天候の崩れが感じられた為、早目に出発しようと午前1時に起床し、2時半には出発準備をしてアイゼンを装着する。然し、すでにこの頃にはもう目も開けておれないほどの風雪となっており出発どころではなかった。暫く様子をみようとテントの中で待機するも吹雪の吃哮は一向に治らず、到頭この日のアタックは断念となった。

C・3はコルに設営した為に一旦、風雪が荒れ狂うとテントは瞬く間に埋ってしまい頻繁に除雪を強いられる辛い一日となった。

9月15日、相変らずテントを打つ風雪の吃哮に半ば諦めながら外へ出て見るとC・3付近の暗雲は激しく去来していたが、時折、頂上付近が眺められ、視界が除々に利いてきた。相変らず風は強く、地吹雪が舞っていたが、好天の兆しが見え出したので2次隊のアタックを敢行することにした。

紅茶だけの朝食を済ませ、7時にC・3を出発した2次隊は、マモストン氷河側から吹きすさぶ



a view of Saser Mountains from the Summit

◀頂上からのサセル・カンリ山群

強風にあおられながら、ラッセルとフィックスの堀起しと言う辛い登高のアタックとなった。それでも午後1時少し前には第2登に成功し、尾形、新郷、マハビール、ラッタン、岩崎の5名は頂上に立った。サンドゥ、ナンドゥの2名は途中で断念してC・3に戻る。

9月16日、前日のアタックが惜しまれるような好天に恵ぐまれたこの日、前日途中から引き返した年寄りコンビが再度アタックを敢行し、午前4時40分にC・3を出発した。そして8時間に及ぶ登高の末、この2人も第3登に成功し、ここに登攀隊員12名の全員登頂が成った。

9月17日、3次隊とサポートのメンバー4名がA・BCに下山し、全隊員が無事にA・BCに顔を揃える。

9月19日、前日迄に上部キャンプの荷下げが凡て終了したので、この日はA・BCを撤収する。約1ケ月にわたるA・BCでの生活に別れを告げ、各自脹れ上がったザックを担いでB・Cへと下る。

9月21日、B・Cの撤収開始。この日B・Cに上がってきた7頭の馬で第一陣を送り出す。

9月22日、朝から我々の下山を惜しむかのように名残り雪が降り積もる中、B・Cを撤収する。下りはサソマ迄2日行程と言うことで初日は、ウムロン迄下る。ウムロンではテントを張るような広場もない為、この日はアーミー・シェルターの一室に泊めて貰う。

9月23日、ウムロンよりトロンポティ・ラを越えてサソマへと下る。9月も下旬になるとトロンポティ・ナラやヌブラ谷の水は、入山時の濁水が虚のように澄み、清流となって流れていた。

この夜はサソマからバナミック迄温泉に入りに行って入山以来の垢を流す。

9月24日、朝まだ暗いうちからトラックに隊荷を積み込み、ヌブラ谷を後にレーへと向かう。

この1ケ月半の間にヌブラ谷の緑は黄金色の収穫期を迎え、カルドン・ラの関嶺は雪におおわれていた。間も無く此の地も厳しい冬の到来を迎えるのであろう。

おわりに

こうして我々は、合同隊と言う形ながらも久しく外国人の立入りが許されてなかったヌブラ、シャイヨークへの入域を許され、地球上に残り少なくなった最後の輝きとも言える7,500m峰の未踏峰に初登頂することができた。合同隊と言う事で、仲々思うようにいかない面も多かったが、逆に合同隊がゆえのメリットも大きかった。特に軍からのバック・アップは多大なものがあった。

東部カラコラムをめぐる印・パ両国の緊張は、まだまだ厳しいものがあり、このコントロール・エリアが外国人に一般オープンされるにはもう暫く時間がかかる事であろう。然しながら今回の我々の遠征隊のようなものが今後、1つ1つの積み重ねとなって、この山群の門戸解放へとつながってくれれば喜ばしいことである。（文責：尾形好雄）

（ヒマラヤ Vol.157）

マモストン・カンリ初登頂記

頂へ

岩崎　洋

一つの山を登る為に集まった仲間たちも、一人また一人、故郷へ職場へと去って行き、マモストン・カンリは終った。

角田氏に「マモストン・カンリへ行かないか。と誘われた時、場所も何も名前さえ初めて聞く山だったのに、酔っていた私は、名前を聞いたばかりのこの山へ行く事をその場で約束してしまった。その後、メンバーを知らされて、「しまった！」と思った。隊長の尾形氏をはじめ、錚錚たるメンバーがそこにならんでいたのである。とてもついて行けそうになく、「ど、どうしましょう。」と私。

「大丈夫だよ。」と角田氏。

そう、唯一の救いはクラブの先輩である角田氏が一緒に行くということで、何も知らない私にとっては心強い限りだったのだが、……。その角田氏も我々の出発直前にナンガ・パルバットで逝ってしまい、クラブで捜索を一つ抱えていた私には二重のショックだった。7月28日、色々な思いを後に残して、成田を出発した。悲惨な旅立ちであった。

別れがあり、出会いがある。それが旅なのだろうか。日本で悲しい別れをして来た私を、デリーでは、陽気で楽しい仲間たちが迎えてくれた。

慌しい東京とうって変わって、ゆっくりとしたインドの時が過ぎてゆく中で、この頼もしい先輩たちと、山登りに来たことを忘れてしまうくらいのんびりとしながら、マモストン・カンリを目差す。頂きに引き寄せられるように、我々は一つの点に向かってゆっくりだが確実に進んで行った。

BC建設、A・BC、C1…とさしたる問題もなくキャンプを出してゆき、アタックに出かける日が来た。いい天気である。美しい氷河湖のほとりにあるA・BCを後に、我々6名はC1へ向かった。途中、振り返ると、雪壁のそそり立ったサセールの山々が望まれる。1ピッチほどマモストン氷河を溯ると、目差すマモストン・カンリが目前にその姿を現わした。2,000m近く切れ落ちた南壁が印象的だ。そこからさらに1ピッチ行った所にC1がある。A・BCから約2時間半くらいの所である。昼前に着いてしまい、靴を干したりEPIのガス・カートリッジを包んだ新聞をはがしては読みあさって過ごす。翌日はうって変わり小雪がちらついている。風雪の中C2に入るが、天気は好転せず、C2で敗退する。

A・BCで休養しながらひたすら好天を待つが、カラコルムの山々はこのまま冬になってしまうかのように雪が降り続く。いままでの天気のパターンが完全に崩れてしまい、いつ天気になるかまったく見当もつかない。晴れたと思うと雪が降り、また陽が差すというような不安定な天気が続く。

いいかげんトランプ占いにもあきた頃、9月11日、待ちに待った好天が訪ずれ、C1へ向かう。6人で出発するが、調子の悪い私一人をC1へ残して、あとの5人はC2へ直接入った。1次アタックからはずれたのは残念だったが、そのまま行って登れないよりは2次でもいいから登りたかったので、C2に残って尾形氏ら2次隊を待つ。のんびりと、午後の日差しの中、手紙を読み返したり日向ぼっこをしたりして過ごす。A・BCとC2の間には私と2羽のカラスだけしかいない様で、時おり氷河のピシッという音と、それに合わせたようにカラスが騒ぐくらいである。何十日振りかで1人の時間を満喫した。

▲頂上で旗を振る筆者
H. Iwasaki on the summit.

翌１２日も晴天である。朝食をとり、出発の準備をしていると、氷河の方に人影が見える。まさかと思ったが、やがて近ずいて来ると、それはＡ・ＢＣから朝食もとらずにやって来たインドメンバーの１人だった。尾形氏からＣ２まで行くと聞いて朝一番で急いで来たそうだ。彼が靴をはきかえたり装備を出したりしているうちに尾形氏や新郷氏も到着。そのままＣ２へ向かう。タンマン氷河へのコルは高差３５０ｍくらいあり、朝一の仕事としては少々きつい。雪の斜面を一歩一歩登って行く。向かいの山がだんだん低くなり、同じ高さになった頃コルへ着く。タンマン氷河の雪原には一筋のトレースがＣ２へと続いている。３ピッチのフィックスを下降し、長い長いＣ２への道をたどる。途中の水場から辺りを眺めると、氷河をとり囲むように６千、７千の山々が聳えている。懸垂氷河を懸けた難しそうな山が多いが、暫し時を忘れてどこか登れそうなルートはないかと捜してみたりする。しかし今からＣ２へのかったるいアイスフォールを登らなければならないかと思うと他の山どころではない。我々は辺りで一番高い所を目差しているのだから……。早々に水場をあとにする。荷物が重いと非常に時間のかかる登りも思いのほか早く登れた。登り終えるとすぐＣ２である。前回風雪の中を敗退したのが嘘のようにいい天気だ。明日１３日は１次アタック隊のアタック日なので晴天を祈りながらシュラフに入る。

朝４時にはアタック隊が出発するというので最初のコンタクトをとるが、あまりトランシーバーの調子が良くなく入りが悪い。外を見ると天気はそんなに悪くない様なので安心する。アタック隊との交信では順調に進んでいるとのこと。我々も早々に朝食を済ませＣ３へ向けて出発。進むにつれて徐々に高度が上がり、休む回数が多くなってくる。景色が良くなってくるのを口実にカメラを出して写真を撮ったり、ビスケットを食べたり、なんだかんだと理由をつけては休む。尾形氏ら４人はずっと先に行ってしまい、隊長とインドメンバーの１人がすぐ先にいるだけで一番後になってしまった。Ｃ３にたどりつくと尾形氏からアタック成功の交信が入ったと聞かされ一安心。あとは無事に降りてくることを祈る。１１日に一緒に行っていれば今日登れたんだと思うと多少残念ではあったが、明日一日に角田氏と約束した日から今日までの凡てが報われるかどうかを賭けてがんばるしかないと諦める。

１５時前にアタック隊は全員無事Ｃ３に帰着。そのままＣ２へと下って行った。初登頂に成功という事で今回の遠征も一段落し、我々も余裕をもってアタック出来そうだ。（といっても体力的にはずいぶんきつそうだが……。）明日は２時起床という事で早く寝る。

１２時頃目が醒めてしまい、外を見ると、真黒な雲が空一杯に広がっている。２時、３時と天候は悪化して行き、やがて風雪となる。アイゼンまで着けて出発の準備をしていたが、アタックは中止。明日だめなら下山、ということで不安と焦りの中一日を過ごす。Ｃ３はちょうど吹き溜まりになっており、除雪が追いつかないくらい雪が積もる。３分の２くらいになってしまったテントの中で、お茶やスープ類ばかり大量に作って飲む。C3滞在が長くなるにつれてだんだん食欲が無くなっ

▲頂上稜線を行く一次隊
climbing to the Summit

てくるようだ。

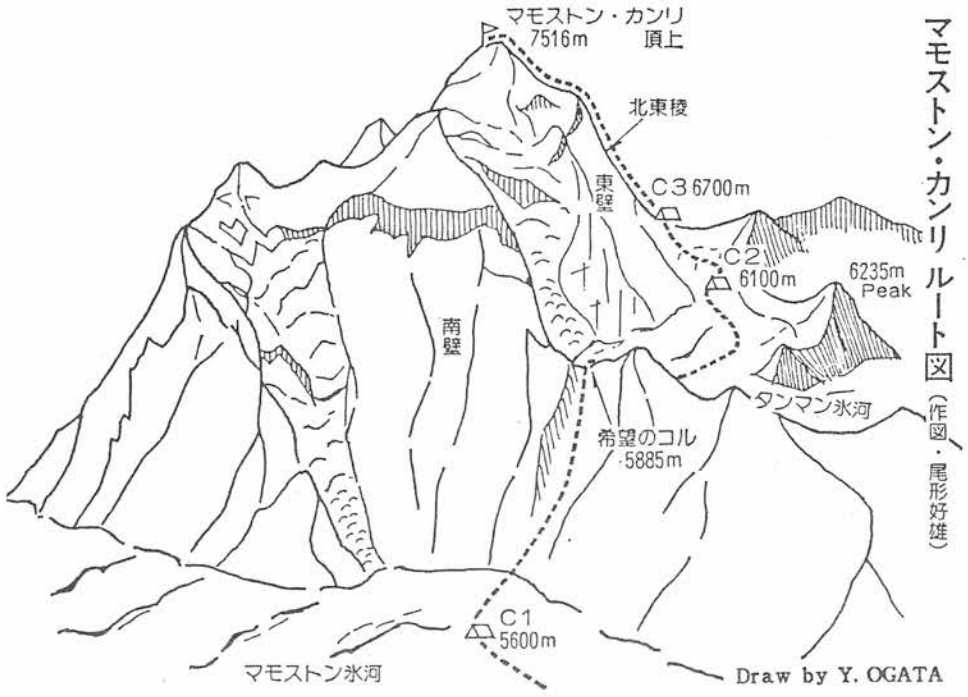
翌１５日もあまり天気は良くなく、しばらく様子をみる。５時過ぎからいくらか回復の兆しが見えて来たので出発。あとは無いんだと自分に言い聞かせ、一番にＣ３を後にする。昨日一日でけっこう雪が積もっており、思ったように進まない。最初のフィックスのところで尾形氏に追い着かれ、トップを変わってもらう。フィックスロープはほとんど埋まっており、堀りおこすのは大変そうだ。なんとか追いついて交替しなければと思うが、後のメンバーに追い越されるばかりで距離は少しも縮まらない。冬山で初心者がラッセルしているトップに追いつけないのと同じで、気ばかりあせっても足が前に出ない。仕方なくマイペースで１本、２本とフィックスを数えながら高度を上げて行く。視界が悪く、少し離れるとすぐトップの姿が見えなくなってしまう。おまけに風が強く吹くたびに立止まる。

ガスの切れ間に見える近くの7,000ｍ峰が少しずつ低くなってゆく。あと半分……でもここが折り返し点ではない。「頂上まで行って半分だ!!」と登る前からさんざん言われて来たので、「４分の１、４分の１……」と自分に言い聞かせながら歩を進める。１８本目のフィックスを登り終えると、そこから先はトレースだけが続いていた。尾形氏がスノーバーにくくりつけて置いていってくれたテルモスの紅茶を飲み、日も差すようになってきたのでサングラスをしてまた歩き始める。頭がボケてきたのか、フィックスロープに慣れてしまったのか、風が吹くとたいした斜面でもないのに非常に恐い。慎重に一歩一歩進む。天気は回復してきたが風が強く、吹き溜まりのトレースはすぐに消えてしまい、トップからさらに遅れてしまう。２０歩ごとに休んでいたのが１８歩になり、１５歩になり、そして１０歩に……。

どのくらい歩いたのだろう。吹きつける風と薄い空気で時間の感覚が無くなった頃、尾形氏の「頂上だぞー」と言う声が聞こえた。トップから３５分遅れて、マモストン・カンリの頂上に立った。うれしかったのだろうか、感動していたのだろうか、今は覚えていない。ただ、終った、それが実感として残っている。たぶんうれしかったのだろう、ただ寒さで顔がひきつってそれどころではなかっただけだ。

マモストン・カンリは終った。尾形氏をはじめ諸先輩、応援してくださった多くの方々、仲間たち、すばらしい時をありがとう。

（１０月１０日　クルにて）



マモストン・カンリルート図（作図・尾形好雄）

関嶺を越えて

新郷信廣

我々の登山基地であるレーの町。
まるで月世界を思わせる荒涼とした景観の中に、砂漠のオアシスのようにレーの町がある。
背後に昔の王宮があり、今は廃虚となっているが、レーのシンボル的建物である。
レーは、昔より東西文化の合流地点であったと云われ、最近の外国人旅行者への開放に対するラダック人の適応性に、嘗て養われた外交文化の名残を見ることができる。
また、この町は過去の顔と現在の顔を合わせ持っている。
訪れた人々は、荒涼とした土地の変化に驚き、赤茶けた土の色あいの新しい世界に感動し、仏教とイスラム教の混成文化を見ることができる。
町は、丁度8月5日より1週間、夏のフェスティバルが始まった。
賑わいの中、笛や太鼓の鳴り物が鳴り響き、会場に集まって来る住民達、顔立ちはモンゴル系からアーリア系まで多種多様で、まさに、トランス・ヒマラヤ地帯にいるといった気分になる。
自分の信仰の深さを示す表現としての踊りを踊ることや、修練はラダックを含むチベットとその周辺特有のもので、酒宴の時の踊りはかかせないものであり、年齢と性別を問わず、全ての人がその純潔な礼儀正しさで、好みによって参加するのである。
力強いリズムにのって、戦いの踊りなのだろうか、刀と弓を持ち勇壮に踊る。
日本の烏帽子に似たかぶり物を着けている姿は親しみを覚える。
このフェスティバルはラダックでは一番大きい祭りで、外国人の観光客が非常に多く、日頃静かなこの町もこの期間は泊まるホテルさえないほどの賑わいを見せている。

これから弓の競技が始まる。
出番を待つ若者達の顔に緊張感が漂う。
自分の矢に目印を付けて、他の矢と間違わないようにする。
いよいよ出番がまわってきた。
的は遠く、当てるのは至難の技のように思われる。
矢が鈍く的に当たる。
太鼓や笛のリズムは一段と強烈になり、フェスティバルは盛り上がっていく。

雑踏を逃がれるように路地に入ると、静けさが戻ってくる。
家並みは遠い昔、中央アジア交易ルートの重要な接点で、ヤルカンド、チベット、カシミールそしてクルから隊商達が集まり、彼らの宿泊場だった所である。
今は、その面影はなく、崩れ落ちた壁が昔を悲しく語りかけてくる。
然し、この過酷な土地に何世紀もの間生活している人々には驚かされる。
『真の友達か、野心のある征服者以外には訪れる者がないほど土地は痩せ、峠は険しい。』とラダックの諺は言っている。

レー王宮、チベットのラサにある宮殿はこの王宮をモデルにしたと言われる。
岩山にへばりつくように建てられているこの王宮は、崩壊が激しく一般の人々の立入は禁止されている。
レンガ造りとはいえ材料は土をこねて型に入れ天日で乾かし、それを積み重ねて建ててあるだけのもので風化が激しいのは当然かも知れない。
然し、これだけの建造物を壊れるがままにしてあるのは惜しいような気がする。
町を見下ろしている王宮はまだまだ威厳と風格を持って建っている。
王宮より一段上の方にあるセモゴンパは王宮に比べてよく手入れされ、土地の人達の信仰心の深さを物語っている。
人々はこのゴンパで何を願い、何を希望して祈っているのだろうか、絶望とも思えるこの環境の中でゴンパは長い歴史を刻みこんで建っている。
ゴンパから見るレーの町も王宮もまさに足下にあると云った感じである。
我々隊員が泊まっていたホテルの近くにチョカンゴンパがあった。
通りに面した門は狭く、気をつけて通らないと見過してしまいそうな所である。
中に入ると外見からは伺いきれないほどの広さに驚く。
ゴンパは宗教的な学校ラマの養成所と云うだけではなく、この乾燥した荒れた地域の住民が寄贈した崇高な証拠を示す芸術のギャラリーでもある。
その他の芸術や建築もラダックで発達していて、巨大な様式と大きなゴンパは見逃がすことはできない。
土地は貧しいが人々の芸術的才能は高い。
この土地の人々に依って、ゴンパの壁やキャンバスに自由に描かれている。
マニ車を回す婦人達。
このマニ車を回すことに依って、自分の犯した諸々の罪が浄化できると土地の人は云う。

けたたましい鳴り物に誘われて行って手みと、ラダックの結婚式が始まる。
新郎新婦がそれぞれ馬に乗り、大勢の見物人と一緒に町を練り歩く。
会場に着くと儀式が始まり、盛装した人達がお祝いの踊りを舞う。
広場ではポロ競技が始まっていて、男達の勇壮な姿を見ることができる。
巧みな手網捌きで馬を操り、小さな玉を追う。
馬はたてがみを振り乱し、砂塵をあげて走り抜ける。
見る者を強く惹き付けるものがこの競技にはある。
馬のいななきと人々の歓声はいつまでも続いていた。

日本側隊員５名、インド側隊員８名による日印合同カラコルム登山隊は、８月10日レーでの長い滞在を終えて、いよいよ東部カラコルムの未踏峰マモストン・カンリ、7,516mに向けて出発することになった。
フランス人の美しい女性から花輪を贈られ喜ぶ隊員。
彼女は英語、ネパール語そして日本語も堪能で驚く。
インド陸軍のトラック３台に荷物を積み、隊員達もそれぞれ荷台に乗りこみ、レーを後にする。
我々を乗せたトラックは草木一本見あたらない赤茶けた山腹を砂塵を撒き上げエンジンをうならせて進む。
ほこりと上下左右に激しく揺れるトラックに隊員達は少々疲れ気味である。

レーから喘ぎ登ること2,000m。
自動車で越えることの出来る峠としては、世界で最も高いカルドン・ラ、5,486mに着く。

峠にはヒンズー教のお堂が建てられており、この峠を通る旅人は、ここまで無事でこられたことを感謝し、これから先の旅の安全を祈る。
このカルドン・ラに立つと初めて正面にサセル・ムズターグ山群の雪嶺が眺められる。
峠からの下り道もひどいもので、峠の直ぐ下で懸垂氷河を横切り、でこぼこ道のつづら折りを車はゆっくりと高度を下げる。
やがて眼下にシャイヨーク河が見えてくる。
その河幅の広さは地図から想像する以上の広さである。
真黒な濁流となって流れるシャイヨーク河、まさに悠久なる流れそのものである。
トラックはシャイヨーク河の広漠とした河原を横切り、対岸に渡る。
緑が多く目に付き始めると、ヌブラ谷である。
ラダックの人達はこの谷を緑の多い、この世で最も美しい所だと誇らしげに語る。
ヌブラ谷の入り口にあるスムレに泊る。
翌日、スムレにある大きなゴンパを見学する。
このゴンパはサンタンリンゴンパと云い、今から３５０年程前に建立されたと云う。
ここには子供のラマ僧が多い。
この無邪気な顔を見ていると厳しい修業をしているとはとても思えない。

中へ入ると素晴しいお堂があり、我々を驚かせる。
子供達も好奇の目で我々を見ている。
お堂の入り口には大きなマニ車が置いてある。
扉の上部には極彩色の絵が描かれている。
お堂の中は暗く、開けた扉から差し込む日の光で、かろうじて部屋の中を見ることが出来る。
薄明かりの中に素晴しい仏像、教典、タンカ、仏画の数々が沢山あり、目を見張らされる。
この仏画は天井に設けられた明かり取りの所に描かれているもので、その色合いといい、ふくよかな流れるような線は見る人に称賛せざるをえないような表現力がある。
このゴンパの僧長である、テンジン・ギャルツォーと云うラマの説明を受ける。
この仏像は全部金で作られていると云う。

サソマに着く。
レーからこのサソマまで２日間の山岳ドライブで、約160Kmの距離を走り、2,000m登り2,200m下った。
サソマからベースキャンプまでは、ポニーによって隊荷を運ぶことになる。
手際良く荷物を載せる馬方、一頭に約60Kgから70Kgの荷を付ける。
サソマからの道は昔のレーからサセル峠、カラコルム峠を経てヤルカンドに至る。
あの中央アジア交易ルートをたどるのであるが、登り口は大岩壁帯にとられており、その道は石を積み上げて作ったものである。
昔の人の根気と情熱が伝わってくる。
ジグザグターンを繰り返し、一気に600mもの高度を稼いでしまう。

この果てしない石の道を登り詰めた所が、トロンポティ・ラである。
この峠に立つと眼下にはヌブラ谷の白い河床が俯瞰できる。
行く手にはトロンポティ・ナラの激流が眺められる。

道の端々に石積みの道標が多く見られる。
石積みの上にアイベックスの角が積み重ねられていて、マニ石が置いてある。
荷物を運ぶ唯一の手段である馬。
この土地では馬は貴重な財産でもある。
谷の前方にマモストン氷河のモレーンの押し出しが眺められる。
枯れ草を集めてお湯を沸かす。
樹木が少ない所だけに、この土地の人々はいろいろなものを燃やす術を知っている。
今日はいよいよベースキャンプまでのキャラバンである。
途中何度か河に出会い、渡渉に苦労させられる。
墓標の如く乱立するケルンに異様な雰囲気が漂う。
サソマから３日目、ベースキャンプ4,600mに到着。
悪路と重い荷物のため、馬ていが傷み、取り換えている馬方達。
ベースキャンプ地は気持ちの良い所で、振り返って見ると通ってきた道が遙か遠くになっている。
キャンプ近くでは、なきうさぎを多く見かける。

８月17日、我々はサセル・ラまで足をのばしてみる。
トロンポティ・ナラはゆるやかな勾配をもって峠へと続く。

その両岸は丘陵地帯となっており、餌を食むヤクの群れに出合う。
エメラルドグリーンのモレーン湖があり、気持ちが和む。
この道は約７５年もの間、日本人の立入りがなかった所である。
記録としては1907年に軍事的使命を帯びて聖域に入った日野強少佐がいる。
彼はカシュガルからカラコルム峠を経て、サセル・ラを通過し、レーにたどり着いてる。
また、1909年、第二次大谷探検隊の橘瑞超と野村栄三郎もマモストン氷河舌端近くを通っている。
２０世紀初頭にはやくも日本人がこの地に足を踏み入れたと云うのは、なんと素晴しいことではないか。
こうした先人達の歩いた道に、我々が今立っているかと思うと身の奮える思いがする。
それらの厳しい自然を物語るように、いたる所に白骨が散乱している。
まるやかな膨らみを持った氷河が、日の光を照り返し、幾条もの氷厚の影を作りながら巨大な生物のごとく峠へと向かっている。
サセル・ラは両岸の山より押し出された氷河が合わさり、シャイヨーク河とヌブラ河とに落ち、分水嶺となっている。

眼前に広がる赤茶けた山脈に夢を抱かせ、ベースキャンプに戻る。
８月18日、我々の荷物が全てベースキャンプに上がってきた。
この日、安全祈願の「ハタケ」の儀式をヒンディ・スタイルで行い、登山活動の無事を祈る。
バルワント・サンドゥー隊長を囲むミーティングは熱の入ったものとなり、日本とインドの合同隊での役割分担を決める。
隊員達の顔にも緊張感が漂う。

ミーティングが終わり山田隊員による器具取扱いの説明がある。

荷上げのための荷作り作業が始まる。
手際よく荷作りする隊員の顔は、非常に明るい。
夕方は、隊員とポーターそれに馬方達とベースキャンプ開きのお祝いをする。
キャンプ・ファイアーの燃料はヤクの糞を燃やす。
酒を飲み、陽気に踊り、歌を唄い楽しい一時は過ぎていく。

８月19日、いよいよ登山活動開始の日である。
朝飯の用意をするコック、手慣れたものである。

食欲旺盛な隊員達にコックは大変だろう。
Ａ・ＢＣに向けて出発する。
ベースキャンプからマモストン氷河左岸のサイドモレーン上を進む。
左岸から最初にマモストン氷河に注入する支氷河を横切った所のモレーン台地の上に、Ａ・ＢＣ標高4,900mを設営する。
近くにはコバルトブルーに輝く、美しいモレーン湖があり、とても気持ちの良いキャンプ地である。
Ａ・ＢＣからＣ１へのルートは、Ａ・ＢＣのあるサイドモレーンからマモストン氷河上に走るモレーン稜に移り、そのモレーン稜伝いにマモストン氷河を詰めていくと、右に緩くカーブしていてそのまま南面に質はだかる大岩壁へと続く。
激しい融雪のため、氷河上に川が出来ていてテーブルストーンが奇妙なバランスで立っている。
長い間、憧憬の山であったマモストン・カンリ、いま、その南面の全容が現れる。
この広大な氷河をさらに、１時間程登るとＣ１である。
Ｃ１は高度5,600m、マモストン氷河の源頭部で南壁の基部まで15分程の所である。
目的の山が見え、皆、興奮気味になる。
南壁から南東に伸びる稜線は、マモストン氷河とタンマン氷河の分水嶺を成しており、南壁直下の稜線上にはタンマン氷河への通用門のようなコルがある。
果たして、このコルが希望のコルになるか、絶望のコルになるのか。
不安と期待を持ってコルへの斜面を登る。

イースター島の巨石を思わせる源頭を過ぎるとコルである。
高度5,885m。
コルに立つと眼下にタンマン氷河が広がり、まぶし過ぎるほどに輝いている。
我々にとって、まさに、このコルは希望のコルとなった。
コルの反対側は、懸垂氷河ですっぱりと切れ落ちており、大きなクレバスが口を開けている。気の遠くなるようなタンマン氷河の横断に汗を流し、マモストン・カンリの北東稜側からアイスフォールが落ちてきており、これの右寄りにルートをとる。

Ｃ２は、前後が大きなクレバスに囲まれた6,100m雪原上である。
食事を作りながら、談笑するマハビール隊員と尾形隊長。

Ｃ３へ出発する。
マイペースで登るラッタン・シン隊員。

彼の片方のロングスパッツは壊れ、ビニール袋を巻いている。
北東稜に飛び出した所は、高度6,700mのコル上の地点で、眼下にはチョング・クムダン氷河の縞模様が美しく続き、また、その向こうにはデプサン高原に続く赤褐色の山脈が眺められる。
8月28日、コル状の所にC3を建設する。
然し、9月に入り悪天候に見舞われ、登山活動は停滞する。
9月13日、いよいよ頂上へのアタックが開始された。
マモストン・カンリの北東稜は、男性的なスカイラインを描いて、頂上へ急しゅんにせり上がっている。
一歩一歩、慎重に登る。
マモストン氷河から吹きすさぶ強風にあおられ、辛い登りとなる。

7,200mの地点より、北東稜は傾斜が緩くなり、ピラミダルな山頂へと続く。
1984年9月13日、地球上に残り少なくなった最後の輝きとも言える7,516mの未踏峰に我々は初登頂することができた。
未知への憧れだったマモストン・カンリ。
初登頂の感激とは裏腹に、一抹の感傷が胸をよぎる。

（※ これは、新郷隊員が撮った「関嶺を越えて」のビデオ（57分）のナレーションである。）

カルドン・ラ(5,486m)　Khardung La.

シアチェン氷河をめぐる印・パ国境

東部カラコルムの山々を目指す場合、最も気になるのが国境問題である。

大カラコルム山脈の殆どを包含していた旧ジャム＆カシミール藩王国は、1947年８月のインドとパキスタンの分離独立にあたり、インド、パキスタンのいずれへも帰属を表明しなかった。そのため両国間でこの地の領有を争う戦争に発展し、今日までこの不穏な火種はくすぶり続けている。

第一次印・パ戦争は、1949年に停戦が実現し、停戦境界線に関する協定(カラチ協定)が結ばれ、旧ジャム＆カシミール藩王国は、ほぼ２対３の割合でパキスタンとインドに分割される停戦ラインが引れて２分されることになった。

この停戦ラインは、カラコルム峠からセントラル・リモ氷河とサウス・リモ氷河の合流点の上流約４kmの地点を通り、さらにサウス・テロン、ノース・テロン、シェールカル・チョルテンの三氷河の合流点付近からシアチェン氷河の舌端付近を通ってシャイヨーク河中部のマラクチャ村の西へと伸びるラインである。

このカラチ協定で引かれた停戦ラインから見るとマモストン・カンリやサセル・カンリ山群はインド領となり、北西部のシアチェン氷河周辺の峰々はほぼパキスタン領の山となった。

ところが、1971年にバングラディッシュの独立にからむインド、パキスタンの戦争が勃発し、この第三次印・パ戦争の停戦協定後から両国の領有主張の食い違いが表面化してきた。

第三次印・パ戦争では、この東部カラコルムを有する西部戦線が主戦場となって争われたが、直ちに停戦が実現してシラム協定が結ばれた。

このシラム協定は、「ジャム＆カシミールにおいて1971年12月17日の停戦から生じた支配線は、双方の承認された立場を損なうことなく双方によって尊重されるものとする。」として締結された。このシラム協定締結後、インド政府の見解は1949年のカラチ協定によって樹立された停戦ラインは、1971年12月の第三次印・パ戦争によって破壊されて、もはや存在せず、従来の停戦ラインとは全く違った新しい支配線が出来たと主張。これに対しパキスタン政府の見解は、1949年の停戦ラインも1971年の支配線も同一のもので変わるものではないと主張している。

その結果、最近になってシアチェン氷河周辺を巡る領有主張の対立が表面化して外国登山隊への対応が大きく変化してきた。

このへんの両国の対応についてこのシアチェン・エリアへの登山隊の入域経緯を少しひもといてみることにしよう。

1947年の印・パ分離独立以降、この地域は両国側から固く閉ざされ、登山・探検史の上では暫く空白時代となった。

1950年代から60年代にかけてパキスタン側からシア・カンリ、サルトロ・カンリ、Ｋ１２、ゲントなどシアチェン氷河周辺峰への登山隊を迎えたが、これも第二次、第三次の印・パ戦争によって閉鎖されてしまった。その後、1973年秋よりパキスタンではカラコルムへの外国登山隊の受け入れを再開した。しかし、この時点ではまだシアチェン氷河への入域は許可されなかった。シアチェン氷河の周辺地域に登山隊を受け入れるようになったのは、1975年になってからである。この年、日本からは静岡大学隊がテラム・カンリＩ峰(7,463m)、II峰(7,402m)に初登頂したのを始めに、岡山大学隊はビラフォンド・ラを越えてシアチェン氷河を探査した。翌76年には大阪大学隊がアプサラサス(7,254m)、東北大学隊がシンギ・カンリ(7,202m)にそれぞれ初登頂するなど日本隊が活躍した。その後も1978年には鶴城山岳会隊がリモを目指しシアチェン氷河に入り、関西学生山岳連盟ＯＢ隊はゲントII峰(7,343m)に登頂。1979年には弘前大学隊がテラム・カンリIII峰(7,382m)に初登頂し、京都カラコルム・クラブの五大氷河隊がバルトロ氷河からシアチェン氷河に入ってシア・カンリ(

7,422m) に登頂した。1980年は、アメリカの四大氷河遠征隊がビラフォンド・ラからシアチェン氷河に入り、コンウェイ・サドルを越えてゴドウィン・オースチン氷河へと抜け、神戸大学隊はリモの偵察にシアチェン氷河に入った。また、西ドイツ隊はゲントⅠ峰(7,401m)に登頂するなどの記録が記された。然しながらこの地域へのパキスタン側からの入域もこの年までで、以後、登山・踏査隊の活動は跡絶えた。

一方、インド側は1947年の印・パ分離独立後、この西部国境付近に厳重な外国人立入り禁止区域を設けて外国人をシャット・アウトしてしてきた。1949年の第一次印・パ停戦後、インド側からの登山隊は、1956年のインド隊によるサセル・カンリ遠征から再開された。その後、このエリアはインド隊の独壇場として、1969年、1970年、1972年とサセル・カンリへ向かい、1973年にサセル・カンリⅠ峰(7,672m)の初登頂に成功した。このサセル・カンリまでは、カラチ協定の停戦ラインから云っても当然インド領に属する訳だから何等問題は無かったのであるが、問題は1980年から始まりだした。即ち、この年の秋にK・N・タダニ准将の率いるインド陸軍隊が、ヌブラ谷からシアチェン氷河を遡ってアプサラサスに登頂したのである。

（このインド隊のスライドは、1982年秋にカトマンズで開催されたＵＩＡＡ総会で各国からの参会者の前で披露され話題をまいた。）

さらに、1982年にはN・クマール大佐を隊長とするインド陸軍隊の総勢54名がシアチェン氷河に入り、シア・カンリ、サルトロ・カンリなどに登頂した。こうしてパキスタン側からの登山隊が跡絶えたのと時同じくして、今度はインド側からシアチェン氷河源頭部への登山隊が入山しだしたのである。

こうしたシアチェン氷河への入域経緯を経て、事態は1984年になって大きく変化した。

1984年春、弘前大学隊はパキスタン政府よりリモⅠ峰(7,385m)の登山許可を得てパキスタン入りしたところ、現地でパキスタン観光省よりリモ峰の登山許可を取り消され、シアチェン氷河以外の地域へ転進を求められた。やむなく同隊はユクシンガルダンサールへ転進することになった。同隊の話では、許可取り消しの理由は明示されなかったと云われる。一部の現地情報によるとスカルドの東、カパール付近で印・パの戦闘が激化した為とも伝えられた。

同様にオーストリアのＫ１２隊も登山許可が取り消され他の山への転進を余儀無くされた。

一方、この日本のリモ隊に対してインド政府は外交ルートを通じて日本側へ遺憾の意を表明してきた。1984年５月のゴールデン・ウィークにかけて日本政府の中曽根総理大臣がパキスタンとインドを歴訪された折り、インド政府より安倍外相に対して、今後、リモ山群に対するアプリケーションはインド側へ提出して貰いたい旨の要請があったと云われる。この件に関しては在印日本大使館からも外務省の情報文化局に公電が入り、早速、日本山岳協会へ指導要請の依頼があった。

また、我々日・印合同カラコルム隊が、スリナガールでインド陸軍主催による歓迎レセプションに招待を受けた席上で、当地の印・パ停戦ライン駐屯軍司令官のＰ・Ｎ・フーン中将から「カラコルムの山々はインド領なので日本の弘前大学隊のようにパキスタン政府にリモ峰の登山申請をするようなことは絶対に認められない。」ときつく念を押された。この「カラコルムの山はインド領」と云われた時は少なからず驚かされた。

こうして両国の対応の差がはっきりと現れた1984年、東部カラコルムへはインド側から３隊が入山した。

まず、外国人としては実に38年振りにカルドン・ラを越えてヌブラ谷へ入ることになった、我々の日・印合同カラコルム隊はマモストン・カンリに挑み初登頂に成功した。

このマモストン・カンリ隊よりも２ヶ月程早くＫ・Ｓ・ソーチ大尉の率いるインド陸軍エンジニア隊は、リモ山群に向かった。一行は６月25日、ヌブラ谷最奥の部落サソマを出発。且つての中央アジア交易路をたどって、アッパー・シャイヨーク河から南リモ氷河に入り、それぞれ数人の小パーティに分散して８月11日から13日にかけて7,159mのリモ峰の初登頂をはじめに6,000m峰６座にも

初登頂した。

そして、もう一隊はプリム・チャンド大佐の率いるインド陸軍隊が50人の大部隊で、9月末から10月にかけてギョン氷河の7,282m峰と7,125m峰の登頂を目指して入山した。この隊は1985年春のカンチェンジュンガ仏・印合同隊と秋のエベレスト南西壁隊の隊員選考を兼ねて行われたもので、恐らくK12を目指したのではないかと思われる。

こうした1984年の動静の後、インド登山財団(IMF)は、1985年2月6日付で東部カラコルムのオープンを世界各国に表明した。オープン・ピークは別添「インドヒマラヤ解禁峰一覧」に掲げた通りでサセル・カンリ、マモストン・カンリ、リモ、アプサラサス、テラム・カンリ、シンギ・カンリ、ゲント、シア・カンリなどの15峰とインディラ・コルである。

1984年6月には、シアチェン氷河上で印・パ両軍がハチ合わせして戦闘となり、両軍に死傷者が出るなど、まだまだ東部カラコルムをめぐる印・パの緊張は厳しいものがあるように思われるが、そうした中で敢えてインドが開放に踏み切った裏には、それなりの高度な政治判断があったのであろう。

マモストン・カンリの遠征を終えて帰国してから、インドではインディラ・ガンジー首相の暗殺、総選挙とラジブ新内閣の誕生など国内事情が揺れ動き、東部カラコルムのような問題のある地域は当分、外国人の入域は凍結されてしまうのではないかと懸念されたが、これほど早く一般にオープンされるとは夢にも思わなかった。

日・印合同隊によるマモストン・カンリ登山が一つの契機になったことは確かなようである。

(文責: 尾形好雄)

—開放されたインド領カラコルム—

隊荷の輸送及び通関

今回の日印合同隊によるマモストン・カンリ登山の輸送については、大別すると次のように分けられる。

第一段階～日本→デリー迄の輸送(飛行機)
第二段階～デリー→レー迄の輸送(トラック)
第三段階～レー→サソマ迄の輸送(　〃　)
第四段階～サソマ→ＢＣ迄の輸送(ポニー)

1．日本からデリーへの輸送

先ず、日本からインドへの隊荷輸送は空路アナカン(Unaccompanied Baggage，旅行者手荷物別送品)にて910Kgを送った。

13名のメンバーにコック、ハイ・ポーター、無線技師等の現地要員を加えると20名近い大世帯の登山隊で、ＢＣから上部の装備・食糧及びインド側メンバーの若干の個装は、日本側で準備してほしい。と云った合同隊の条件の中で、この程度のアナカン輸送で済んだのは、共同装備などかなりの装備がＨＡＪのデリー・デポ品で賄うことができたからである。

アナカン輸送の場合は、東京～デリー間で１Kg約1000円とかなり高い輸送費となるため、日本からの隊荷持ちだしは極力切り詰めたかったのであるが、何せインド人は日本の物が何でも良く見えるようで、インド側からのオーダーが多くて閉口した。彼等がもう少し自国の国産品を愛用してくれれば、我々の日本からの持ちだし隊荷もかなり抑えることができたと思われる。

ここで、アナカン輸送について少し触れてみよう。

先ず、隊荷の発送に当っては、自分達の出発日に合わせて隊荷の発送日を決めなければならない。隊荷の発送予定日が決ったら、その約１ヶ月半前位に航空貨物輸送業者へ連絡をして、目的地迄(我々の場合は、デリー迄)のキャリア(飛行機)をブッキングして貰う。この時に必要なことは、

1）隊荷の現地到着希望日(隊荷受取人が現地に到着する２日前辺りに到着するように設定するのがベターである）。2）隊荷の概算重量と個数。3）隊荷の形状・寸法。などを連絡しなければならない。尚、この場合、なるべく目的地迄は直行便で行けるキャリアを指定するのが望ましい。

こうして隊荷輸送のキャリアを予約した後、登山隊は隊荷の集荷・梱包と出発前の一番慌ただしい時期を迎えることになる。

次にアナカン輸送に必要な書類について述べてみよう。

1·）パッキング・リスト(Packing List)

持ちだし隊荷の全てについて各カートン毎にパッキング・リストを作成する。リストには、品名、数量、重量、価格(※１)等の項目を記載する。

(※１：価格表示には２通りある。１つは、Ｃ．Ｉ．Ｆ．(Cost,Insurance & Freight)で、保険料運賃込み価格。もう１つは、Ｆ．Ｏ．Ｂ．(Free on Board)で、積み込み渡し価格。どちらの価格表示なのかを明記しなければならない)

パッキング・リストを作成したら、それらの物品を消費・非消費物品に分けてリストを作る。

2）送り状(Invoice)

送り状には、カートン総個数、マーキング名、品名、総価格、荷送り人の住所・氏名、荷受け人の住所・氏名等を記載する。

この場合の注意点としては、荷送り人と荷受け人の氏名は、同じとする事。それと、荷受け人の名前は、必ず隊荷を通関する人の名前にする事。先発隊が先に行って通関するのであれば、先発隊の責任者の名前にしておくこと。良くあるのが、何でもかんでも隊長の名前にしておくために、先発隊が通関できないと行ったトラブ

ルが多い。それから当然の事ながら、アナカンとしての取扱い上、既に出発してしまった者の名前で送ることは出来ない。

3）東京税関成田支署長宛ての「航空手荷物別送品の許可願い書」

航空手荷物別送品としての輸出を承認して頂く願い書。帰国時に別送品の持ち帰りがある場合は、輸入時の通関も併せてお願いしておくこと。

4）別送品の外国製品の申告書

別送品の中にある外国製品を申告しなければならない。パッキング・リストの中に※1はフランス製、※2は西ドイツ製、※3はイギリス製、※4はイタリア製・・・・と云ったマーキングでシュラフや登山靴などの外国製品を申告すれば良い。

5）国外持ち出す米の量の申告書

別送品中のお米の量を申告しなければならない。隊員数と登山期間から国外持ち出しするお米の量が適当かどうかチェックされる。

6）全隊員のパスポートのコピー

パスポートの2頁から5頁のコピーをメンバー・リストの順に重ねてとじる。

7） 全隊員の航空券のコピー

東京から搭乗する飛行機のフライトナンバーの書かれた航空券のコピー。

8）登山計画書（和文）

以上の書類が揃ったら航空貨物輸送業者へ隊荷を引き渡す。ファクシミリやジェネレーターのような機械類は、通関時に別送品としては認め難いと云ったクレームをつけられることがある。そのような場合は、それらの品の登山活動における必要性を記した願い書を提出しなければならない。

通関が切れたら、輸送業者からエアーウェイ・ビル(Air WayBill)を受けとる。

― インドでの通関 ―

インドでの通関を我々外国人が独自で行おうとする場合は、かなりの困難さと時間が必要となるあろう。そのため、殆どの登山隊は現地のエージェントを使って通関しているのが現状である。今回はインドとの合同と云うこともあってエージェントには頼まず日本側の先発隊員とインド側のメンバーとで通関を行った。然し、如何にインド人と云えども素人が通関業務を行うのであるからなかなか大変だったらしい。通常、隊荷通関をエージェントに依頼する場合でも依頼されたエージェントの方では、また別の通関専門業者を使って通関しているぐらいだから当然であろう。

次に、通関に際しての一般的な手順を述べてみよう。

― 通関の必要書類 ―

1）ＩＭＦ(インド登山財団)からのUnderTaking。

隊荷発送時のパッキング・リストをＩＭＦに持参し、輸入物品の全てが登山隊の登山用品であることのUnderTaking(保証書）を空港税関宛てに書いて貰う。(正式には、The Assistant Collector of Customs,Central Ware Housing Corporation,New-Delhi.宛て)これによって隊荷の無税通関措置がとられる。

2）ウォーキー・トーキー(Walki-Talkie)の輸入許可証(Licence to Import Wireless Transmitting and/or Transreceiving Apparatus Into INDIA.)と開局使用許可証(Licence to Establish,Maintain and Work Wireless Stations in INDIA Under The Indian Telegraph Act,1885 by Mountaineering Expeditions.)

これらの許可証を取得するには、ＩＭＦからUnderTakingを添付したアプリケーションを持ってＹＭＣＡホテルの近くにあるサダル・パテル・バーワンの通信省(Ministry of Communication)へ出掛けて申請し、交付して貰う。

3）Disembarkation Cardの下半券。

入国時に隊荷の荷受け人(Consignee）になっている人は、必ずアナカンによる別送品があることを申告しておかなければならない。

4）ファイナル・パッキング・リスト

隊荷発送時のパッキング・リストを少なくとも6部は用意したい。

5）エアーウェイ・ビル(Air Way Bill)のオリジナルとコピー。

6）荷受け人のパスポートと航空券。

以上の書類が揃ったら、隊荷の到着を確認して隊荷の引き出しに行く。アナカンで送った別送品は、デリー・エアーポートから少し離れた場所にあるCentral Ware Houseing Corporation,Import Aircago で通関することになる。

通関に際しては、フル・オープンを命じられることもあれば、2～3個のオープンだけで済むこともある。何れにしろPPバンドなどは切られてしまうこともあるので、若干の梱包用具は持参したほうが良い。

2．デリーからレーへの輸送

デリーからレーへは、民間トラックをチャーターして陸路搬送した。

デリーからレーへ行くまでには、ハリヤーナー州、パンジャブ州、ジャム&カシミール州と云った各州を通るのでチャーター・トラックも「オール・インディア・パーミット」のライセンスを持ったトラックをチャーターしなければならない。

ロード・パーミッションやＩＭＦのUnder Taking 等の必要書類は全てインド側メンバーが準備してくれ、我々は8月1日に約4ｔの隊荷をトラックに積み込んで送り出した。昨年は、パンジャブ州のトラブルがあって外国人の陸路通行が許されなかったため、トラックにはインド側メンバー2名とコック、ハイ・ポーター5名が同乗して出発した。

隊荷は4日かかって8月5日にレーへ到着した。同乗したナンドゥとラジブの話しでは、各州を出入りする度に厳しいチェックをされ、各州毎に貨物のローカル・タックスを支払えと云われるなど難儀した模様である。ＩＭＦからのUnder Takingなどは何の効用もなかったと嘆いていた。コーチの屋根に荷物を積んで行くぐらいなら問題は無いのであろうが、トラック1台に荷物を満載するような隊荷となると問題のようである。

また、スリナガールからレーへの道路は軍用道路のためゾジ・ラなどの通過に際しては、民間のバス・トラックなどは長時間の待機を余儀無くされるとのことである。

帰路は、インド・アーミーの協力によりレーからスリナガールまでは軍用トラックで隊荷を搬送することが出来た。御陰で往路のような待機はなく、スリナガールまで1日半で到着することが出来た。

スリナガールで民間トラックに積みかえてデリーへ搬送したのであるが、我々がスリナガールへ帰着した9月下旬は、丁度りんごの出荷時期にあたり、デリーまでのトラックをチャーターするのは困難であった。やむなく、スリナガールからジャムまでのトラックをチャーターし、ジャムで再度デリーまでのトラックをチャーターして隊荷を積みかえて搬送した。尚、帰路の隊荷輸送にはパンジャブ州の警察官であるメンバーのP.M.ダスとラッタン・シンの2名を同乗させた。ダスは仕事柄旨く裁いたようで、往路のようなトラブルは無かったようである。

何れにせよ、このデリー～レー間の輸送は合同隊の御陰で、我々日本側隊員は何の苦労もせずに済んだ。

－ 民間トラックのチャーター料金 －

1）デリー～レー間	6,000 R.s
2）スリナガール～ジャム間	1,765 R.s
3）ジャム～デリー間	2,923 R.s

－ アーミー・トラック・デポ －

1）レー～スリナガール間 (480Km×5Rs/Km×2台)	4,800 R.s

アーミー・トラックの使用料は、後の請求になるとの事であったので、上記の計算でデポしてきた。然し、帰国後の連絡でアーミー・トラックの使用料は不要となった。

3．レーからサソマへの輸送

レーから先の輸送は、コントロール・エリアの輸送となるため、完全にアーミー・トラックの世界となる。我らが隊長が大佐であったこともあって、インド陸軍のラダック分隊には絶大な支援をして頂いた。往路には、トラック3台とジープ1台、復路には、トラック2台とジープ1台（但し途中で故障する。）と云った贅沢過ぎるほどの配車であった。これは、途中、カルドン・ラ(5,486m)の高い関嶺を越えるため、1台当たりの積載量

をそれほど多く出来ないからである。

カルドン・ラの前後はトラックが１台通れるだけの道幅ですれ違うことはできない。そのためか、峠のレー側には、「サウス・プルー」、反対のシャィヨーク河側には、「ノース・プルー」と云う軍補給隊の中継キャンプがあり、ここで峠を行きかう車の交通整理をしているようである。

このカルドン・ラを越える軍用道路は現在、ヌブラ谷の奥、シアチェン氷河の舌端付近まで伸びており、補給部隊のトラックが１日に何十台も行ききしている。道は、懸垂氷河を横切るかと思えば、累々とした岩礫の中や砂漠のような河岸を砂塵を巻き上げて走る。決して快適な山岳道路とは云えないが、この軍用道路の御陰で、先蹤者達が苦労した高い関嶺越えも車で出来るようになり、レーからサソマまでの160 Kmの道程も僅か１日で一気に行けるのであるから便利なものである。我々の場合、往路は１日目スムレで泊り、翌日サソマへ到着した。スムレからサソマまでは約45Km程である。復路は、サソマから１日でレーに戻った。途中、カルサル、パナミック、サソマ等何個所かにチェック・ポストが在るが、合同隊の場合はパスポートのチェックもなく問題は無い。

－　アーミー・トラック・デポ　－

１）レー～サソマ間　　2,400 R.s
　(160Km×5Rs/Km×3台)

２）サソマ～レー間　　1,600 R.s
　(160Km×5Rs/Km×2台)

これも帰国後の連絡で不要と云われた。

４．サソマからＢＣへの輸送

ヌブラ谷で他のヒマラヤ地域のようにポーターを集めることは難しい。ヌブラ谷に住む人達は、殆どが農耕牧畜で生計を立てており、自分達の仕事で手一杯なのである。長く厳しい冬の後の短い夏こそ一番忙しい時であり、その忙しい時期に外部からやって来た闖入者のために荷担ぎをして呉れるような奇特な人は居ない。

我々は、このヌブラ谷のポーター事情を既にレーで聞いていたので、レーから何人かのポーターを連れて行く事にした。

然し、レーでもポーターを集めることは難しくなかなか思うようには集まらなかった。結局、レーからは、ネパールから出稼ぎに来ていたポーターを１４名連れて行くことにした。これらネパーのポーターでもカルドン・ラを越えてヌブラ谷へ入るのには、ラダック地区ディプティー・コミッショナーの入域許可が必要と云われ、２日程許可取得に手間取った。

残りは、ヌブラ谷でポニーを雇用すべく出発したのだが、ポニーの方の集まりも余り芳しいものでは無かった。パナミックなどの近在からポニーを集め回ったが、結局、一度に運び上げるだけのポニーを集めることが出来ず、キャラバンは４隊に分散することになった。サソマのロード・ヘッドからＢＣまで３日間と云う短いアプローチだから良かったもののこれが、サセル・ラを越えて北面からアプローチするような場合は大きな問題点である。因に、我々より２ケ月程早く此の地に入ったインド陸軍のリモ登山隊は、サソマで25日間もポニー集めに滞在を余儀なくされたと云われる。

我々のキャラバンは、８月であったがそれでも途中、３箇所程渡渉を強いられた。ポニーに積んだ荷物が時として水に浸るほど河の水位は有り、隊荷梱包の防水には充分な配慮が必要である。梱包資材としては、プラパール・ボックスなどよりは、よく欧米人などが使っているビヤ樽型のプラスチック・ボックスの方が良いように思われる。

－　ヌブラ谷のポーター、ポニー料金　－

１）ポニー代
　１頭の担荷量は50Kgで、35R.s/日
　但し、帰路も同じ料金を取られる。
　今回は、往路３日、復路２日の計５日分を
　１頭につき支払った。(175R.s/頭)

２）ポーター賃
　１人の担荷量は25Kgで、35R.s/日

最後に、この東部カラコルムへの輸送・アプローチに関しては、合同隊のメリットが多分に有ると言える。プライベートな隊では、今回の様にスムーズには運ばなかったであろう。

(文責: 尾形好雄)

合同隊について

ヒマラヤ登山に限らず、山登りなどは単独で気儘に登ったり、気心の知れ合った仲間と一緒に出掛けたりするのが一番楽しいであろう。現に昨今のヒマラヤ登山では、この登山行為本来の姿を取り戻すかのようにヒマラヤの高峰を舞台にソロ・クライムや2～3人による少人数登山を実践する人達が台頭してきている。欧米の一部の先鋭的な登山家達によって実践されてきたこうした傾向の登山も、最近では日本でも取入れられ一部の人達によって実践されている。

然しながら、こうしたヒマラヤ登山が実践されるようになったとは云え、まだまだ大方の登山隊は従来のような隊の構成で出掛けているのが現状である。合同隊などもその一つであろうが、合同隊の場合は、登山隊が好むと好まざるとにかかわらず、どうしてもジョイントしなければならないケースもある。では、どう云う場合に合同隊の形を取るようになるのであろうか。合同隊の場合、大体次のようなケースが考えられる。

1．許可取得の為の合同隊

合同隊が登山許可条件の一つになっている場合は、合同隊を組まなければ許可されない。例えば、ネパールでは合同隊だけに許可される解禁峰があるし、このほどＩＭＦから発表された東部カラコルム山域なども合同隊でないと許可されないエリアである。

2．双方のメリットを考えての合同隊

キブ ＆ ティクで合同することによって双方にメリットがあると考えてジョイントする場合がある。合同隊を組む上では、理想的な発想であるが、実際には相互にメリットを得ることは難しい。

3．外国との友好親善を考えての合同隊

合同隊の意義としてはもっともらしいことであるが、これを第一義に考えて合同登山隊を組織することは稀であろう。大体は、まず前述した1．2．の要因があってジョイントするのが本音であろう。

今回の我々のマモストン・カンリ登山隊も1の部類に入る合同隊であった。最初から許可条件が合同隊ならと云う条件付きであった為、合同隊のメリット、デメリットを考えて選択する余地はなかった。

これまでの僅かな経験から浮かびあがるインド人のイメージと云うと、通関のオフィサー、エージェント・マン、リエゾン・オフィサーなどどちらかと云うと鼻っぱしの強いインド人しか浮かんでこない。そして、それらは何れも余り良い想い出はないのである。この余り知り合えたことのなかったインド人との合同隊と云うことで当初は、正直なところ気も重かった。然し、憧れのヌブラ、シャイヨーク河、そして人跡未踏の処女峰への見参と云う魅力は何事にも換えがたく、合同隊そのものは、それほどこだわりも無く受け入れることができた。

マモストン・カンリ登山に対してインド側からから提示された合同条件は、次のようなものであった。

－ 合 同 条 件 －

1）リーダーは、インド側とする。

2）日印双方の全メンバーは、全て同一の標準装備を用いる。

3）大部分のキッチン用具は日本から持参する。但し、若干の用具に関してはインドでも入手できる。

4）高所食と高所燃料(ＥＰＩガス)は日本から持参する。但し、インドで購入できる食糧はインドで補給できる。

5）ＢＣ食とキャラバン食はインドで購入する。但し、若干の食糧は日本から持参。

6）インドと日本の全ての購入コストと山中での

紛失分についての割り当ては、案分して双方が負担する。

7）デリーを離れた後、デリーに戻ってくるまでの全コストについては合計して分担する。

8）デリーを出てからデリーに戻るまでの食事、宿泊、交通機関等は全メンバーとも同じものとする。

まず、1）については、今回の入域エリアが厳しい制限地域であったことと、初めてのケースであった為に、国防省や内務省など政府関係機関の許可を取り易くするのに、飽くまでもＩＭＦの登山隊に日本人を同行させると云う形にしたようである。今回の隊長はウッタルカシのネルー登山学校の校長であったが、陸軍大学校の戦略部の教官も兼務すると云う大佐であった為、現地において彼の恩恵に預かることは大であった。

2）については、もっともなことであり、合同隊ではよくトラブルの要因となりうる。今回はそれを無くす為に、インド側メンバーの個装については、日本から事前に登山用品店の総合カタログを送付し、そのカタログの品番でオーダーして貰って、日本から持参した。勿論、個装に関する代金はインド側が負担。

日本側メンバーの個装は、殆ど国内で使用している装備で出掛けた。これに対してインド側は、日本から持参した個装に加えて、84年春のエベレストでインド隊が使用した装備を持参した為、個装関係でははるかにインド側の方が優れていた。

3）、4）に関しては、大半を日本側で用意して持参した。燃料は、Ｃ１以上ではＥＰＩガスを用い、ＢＣ及びＡ・ＢＣではプロパンガスを使った。プロパンボンベはＩＭＦに中国工業社製のアルミボンベ(日印合同ナンダデビィ隊の時の物)があり、レギュレーター、ホース、コンロを持参することによってこれら使用することができた。プレッシャー・クッカー、メス・テント等は、ＩＭＦやネルー登山学校の備品を借用した。これらの借用品については、一日いくらの借料が取られた。

食糧に関しては、ＢＣから上部の高所食は殆ど日本から持参し、砂糖、果物缶詰など若干の食糧をデリーのスパー・バザールで用意した。我々が用意した高所食は、インド側メンバーには大変好評であった。インド人と云うといつも悩まされるのがベジタリアンであるが、今回のメンバーは殆どが登山学校のインストラクターと云った山ヤばかりだったので、その点の心配は無く、何でも食べてくれたので助かった。

次に、登山隊の経費についてであるが、インドの場合、ネパールなどの名ばかり合同隊とは違い、お金の面では意外ときちんとしている。今回は、日本国内費用及びインド国内費用をトータルしてそれをドクターを除く隊員数で割り、双方の費用負担を決めた。即ち、日本側は総費用の12分の5の費用負担であった。日本国内での購入費がかなりの金額になった為、インド国内での支払いは殆どインド側にして貰い、こちらの支出は極力控えた。ただ、インド側は政府のスポーツ省のスポンサーを得たＩＭＦがまるがかえで隊を組織した為、インド側メンバーの都市滞在における金使いの荒らさが目立った。それでも、トータルで見ると我々は合同隊の御陰で、かなり安く上げることができた。特に、輸送費の軽減は大きかった。また、嗜好品の酒、ビールなども軍から免税品を分けて貰うことができＡ・ＢＣでもふんだんに喉を潤すことができた。これも合同隊がゆえのメリットであろう。

次に、インド側のメンバーについて述べてみよう。ＩＭＦは、今回の合同隊々長として前述したB.S.サンドゥー大佐を選び、メンバーの選考は隊長がリスト・アップした後、ＩＭＦで審議して決定したとの事。今回のメンバーを見るとドクターとP.M.ダスを除く、他の６名はいずれも83年にエベレストのプレ合宿として実施したマナ遠征（隊長はサンドゥ大佐）に参加しており、春のエベレストへ行けなかった者をマモストンに選考したようである。ラッタン・シンは春のエベレストにも参加したが、隊長と同じネルー登山学校と云うことと、日本側が５名になったこともあって急遽、参加するようになったらしい。いずれも楽しい山仲間であった。

（文責：尾形好雄）

東部カラコルムの気象

東部カラコルムの登山時期を何時にするのが一番ベターなのかは、気象は勿論の事ながらアプローチにおける河の増水問題も考慮する必要がある。

今回のマモストン・カンリ遠征では、これまでのカラコルム登山隊の気象報告を参考にしながらも、当初の計画が北面のチョングクムダン氷河から攻略するプランであった為、アプローチにおけるアッパー・シャイヨーク河の増水問題を考慮して8月から9月の時期を選んで入山した。

結果的には、計画を変更して南面のマモストン氷河側から登ることになった為、我々の入山時期のアッパーシャイヨーク河の増水がどれほどのものなのか直接体験することは出来なかった。

然し、下流のシャイヨーク河等から推測するに、我々が8月10日に最初にシャイヨーク河を見たときは、真黒な濁流が渦巻いており、この時点ではまだまだ氷河の融水が多いことを物語っていた。やがてこの濁流も我々が再びヌブラ谷に戻ってきた9月24日頃になると河の流れはコバルトブルーの清流となって穏やかな悠久なる流れと化していた。この氷河の融水は、マモストン氷河やトロンポティ・ナラなどでもほぼ同様で、9月を境にして急激に氷河の融解は減少するのが認められた。

以上のことより我々の乏しい経験から推測すると、ヌブラ、シャイヨーク河周辺の増水問題は、9月に入れば殆ど問題は無くなると思われる。大体、8月中旬を過ぎれば河水はかなり減水し、アプローチに支障は無くなるであろう。勿論、これ以前の時期においても通行不可能と云う程のことでもないようである。因に、昨年リモ山群で7座の未踏峰に初登頂したインド陸軍隊は、我々より約2ヶ月も早い6月25日にサソマを出発してサセル・ラを越えてアッパー・シャイヨーク河へ出てリモ氷河周辺に入り登山活動を行っている。そしてこの隊は8月31日にサソマへ戻った。

次に天候の方であるが、今回のマモストン・カンリでは8月一杯はまずまずの好天に恵まれ順調に活動ができた。悪天の周期は、大体2週間周期で2日間位崩れるようなパターンで、それもそれ程酷い崩れではなかった。然し、9月に入ったとたんこの気象パターンも周期的なものでなくなり目まぐるしい変化を見せ、気温も日に日に下がりだした。この9月に入ってからの天候パターンの崩れによって、我々のアタック・プランも遅延しA・BCでの長い待機を余儀なくされてしまった。

今回の遠征では、インド気象台より「NISHIAN」と云うコール・サインを貰ってラジオ・インディアから毎日午後6時40分に、3,100m、4,500m、5,800m、7,600mの各高層における風向、風力、気温のデーターを放送して貰った。

これらのデーターを整理してみると8月中のは、高層(BCが4,600mほどなので5,800m以上のデーター)の風向が南寄りに変わると2～3日天気が崩れるようになる。8月中はこのパターンが前述したように大体2週間の周期であった。

9月に入ってこのパターンも崩れ悪天候が続いたが、この9月上旬の悪天期間中はバロメーターの針が10ミリバール近くも下がったままとなった。

これらは、大カラコルム山脈に影響を及ぼすと云われるアラビア湾上の熱帯高気圧の勢力が9月に入って弱まり、大気の状態が不安定になるためなのであろうか。確かに、1984年においては8月までの天候は抜群であった。因に、1947年にサセル・カンリの西面に入ったJ.O.M.ロバーツは、このエリアの登山時期としては6月～7月がベターであるとしている。

マモストン氷河からの観天望気は、トロンポティ・ナラの対岸に連なるサセル・カンリ山群が目安になる。悪天の兆しはまずこの高峰に現れる。

（　文責；尾形好雄　）

「ＮＩＳＨＩＡＮ」気象放送

Date	3,100m			4,500m			5,800m			7,600m			天　気
	風　向	風力	気　温	風　向	風力	気温	風　向	風力	気温	風　向	風力	気温	
8/14	S　W	20ノット	16℃	S　W	20ノット	4℃	S　W	30ノット	−4℃	W	20ノット	−12℃	⦶→◎◒
15	E	15	15	N　E	15	4	N　E	10	−5	S　W	20	−13	⦶
16	—	—	(No	Contact)	—	—	—	—	—	—	—	—	◎→●⦶
17	N　E	15	15	N　W	20	5	WSW	25	−2	WSW	30	−13	⦶
18	—	—	(No	Contact)	—	—	—	—	—	—	—	—	⦶
19	E	20	16	N　E	20	7	E	20	−1	ESE	20	−14	⦶
20	W	15	13	N　W	20	5	W	20	−3	ESE	20	−12	⦶
21	N　W	25	16	W	30	10	W	30	−1	WNW	30	−11	⦶→◎
22	N　W	20	16	NNW	20	7	SSE	20	−2	S　E	20	−13	◎→●
23	N　E	15	15	N　E	15	8	N	15	−1	N　E	20	−13	⦶
24	N　E	15	13	N　E	15	7	N	15	−1	N	15	−11	⦶
25	ESE	—	14	NSE	25	5	—	—	—	N　W	20	−3	⦶
26	S　E	20	15	W	—	6	NNE	20	−3	WNW	30	−12	○
27	S　E	20	14	ESE	30	6	W	30	−3	N　W	25	−12	◎
28	N　W	15	12	N　W	15	4	E	20	−7	S　W	30	−12	◎→⊗
29	S　W	15	13	N　W	15	4	S　W	15	−2	S　W	15	−10	⦶
30	—	—	(No	Contact)	—	—	—	—	—	—	—	—	⦶
31	—	—	16	S　E	20	5	WNW	20	0	W	20	−14	⦶
9/1	—	—	(No	Contact)	—	—	—	—	—	—	—	—	⦶→⦶
2	S	20	14	S	20	5	S	25	−6	S	20	−14	◎→●
3	—	—	—	S　E	15	—	S　W	20	−4	E	20	−14	◎→⦶

※放送時間は毎日18時40分。9月4日以降のデーターはインド側隊員より書き取ることが出来なかった為、掲載出来ず。

インドの食料品価格の一例

(単位: ルピー)

品　　名	重　量	価　格	備　考
米	1 Kg	7.35～9.05	袋入り
〃	5 Kg	19.75	〃
塩	1 Kg	1.35	〃
砂　糖	1 Kg	5.55	〃
コーンフレーク	400 g	7.95	〃
〃	200 g	4.15	〃
ジュース(各種)	850 ml	11.50	缶入り
〃	1 瓶	11.85	瓶入り
ハチミツ	1 Kg	56.70	〃
〃	500 g	29.65	〃
フルーツ缶詰(パイン)	850 g	13.30	缶入り
〃　(チェリー他)	850 g	17.00	〃
チーズ	400 g	21.40	〃
ビネガー	500～700g	5.00～6.00	瓶入り
コヒー(ネスカフェ)	100 g	15.80	袋入り
〃	200 g	30.50	〃
〃	500 g	66.80	〃
〃	500 g	72.56	缶入り
コンデンス・ミルク	400 g	9.50	缶入り
粉ミルク	500 g	24.00	〃
紅　茶	500 g	18.00～35.00	箱入り
サラダ・オイル	500 ml	21.00	瓶入り
ソース	200 ml	8.00	〃
チリ・ソース	200 ml	8.75	〃
ジャム(オレンジ、パイン他)	1050 g	23.30	缶入り
〃	500 g	12.50	瓶入り
ア　タ	10 kg	30.00	袋入り
ケチャップ	700 ml	11.50～13.40	瓶入り
〃	500 ml	9.70～10.40	〃
ボンビタ	200 g	10.00	缶入り
〃	500 g	21.50	〃
〃	1000 g	41.00	〃
カスタード・パウダー	400 g	12.00	箱入り
〃	200 g	6.55	〃
ビスケット	60～400 g	2.00～7.00	

(1984.10.27　デリー、スーパーバザール調べ: 岩崎　洋)

隊務日誌及び行動概要

— 1983年 —

6月10日　カシミール・トラベル社のS.G.Rigzin氏より、「インド政府がヌブラ谷のオープンを真剣に検討しているので、若し、オープンされた際は当社がヌブラ谷のトレッキングやサセル・カンリ登山のアレンジを致しましょう。」との手紙を頂く。

6月13日　カシミール・トラベル社へ電報を打ち、ヌブラ谷への入域許可の見通しについて問い合す。

7月7日　ＩＭＦ幹事のジョギンダール・シン氏へ、ヌブラ谷オープンの情報についての確認と、1983年9月又は1984年にヌブラ谷のトレッキングとサセル・カンリの偵察を行いたい旨の手紙を送付。

7月8日　ＩＭＦ総裁のH.C.サリーン氏へ、ＩＭＦ25周年記念式典の御祝いと出席の返事に併せてサセル・カンリ登山の許可見通しについて再打診をした。

7月8日　カシミール・トラベル社へ、「ヌブラ谷までのトレッキングでも許可の可能性があるなら今秋トレッキング隊を派遣する用意がある。」との手紙を送付。

8月4日　ＩＭＦより、サセル・カンリは未解禁峰なので登山許可は出せない。又、ヌブラ谷のトレッキングもインナー・ラインのエリアにつき入域することは出来ない。との連絡有り。

8月26日～27日　ＩＭＦ２５周年記念式典に稲田専務理事、角田常務理事、沖会員が出席してインドの関係者と懇親。サセル・カンリ及びヌブラ谷のオープン見通しについて情報収集を行う。

12月2日　来日されたＩＭＦ副総裁のM.S.コーリー氏と東京で稲田、尾形が会談。サセル・カンリの登山許可の見通しについて打診したところ、「ＩＭＦとの合同なら可能性があるので、至急アプリケーションを送付して呉れ。」との思わぬ快諾を得た。

12月8日　M.S.コーリー氏宛てに、マモストン・カンリとサセル・カンリのアプリケーションを送付。

12月14日　M.S.コーリー氏宛てに、アプリケーション送付の電報を発信。

12月19日　H.C.サリーン氏宛てに、マモストン・カンリとサセル・カンリのアプリケーションを提出した旨の手紙を送る。

12月20日　M.S.コーリー氏宛てに、マモストン・カンリとサセル・カンリへのこれまでの経緯を連絡。

12月21日　ジョギンダール・シン氏宛てに、アプリケーション提出の件を連絡。

— 1984年 —

1月7日～8日　第5回インド・ヒマラヤ会議が東京で開催。席上、ゲスト・スピーカーとして来日されたM.S.コーリー氏より、「今年、ＩＭＦはＨＡＪと合同でマモストン・カンリに登山隊を派遣する。」と発表された。

1月13日　M.S.コーリー氏より、合同隊の日本側のメンバー・リスト、アプローチ・ルートを明示した地図、装備リスト等を至急送れとのテレックス有り。

1月28日～2月5日　稲田専務理事、インド、ネパールを訪問。インドにてＩＭＦ関係者らと合同隊についてネゴシェーションを行う。

2月13日　M.S.コーリー氏宛てに、稲田訪印時の打ち合せ事項に関する手紙を出す。一応、この時点でメイン・ターゲットをマモストン・カンリに絞り、サセル・カンリIV峰の方はペンディングとする。(当初は、２山の登山申請をしていた。)

2月27日　ＩＭＦ宛てに、マモストン・カンリのファイナル・アプリケーションを送付。

3月5日　ＩＭＦから、カラコルム合同隊は１隊１山にしてほしい旨の連絡が有り、サセル・カンリ

IV峰の方は諦めざるを得なくなる。

3月31日　M.S.コーリー氏とＩＭＦのM.C.モトワニ氏宛てに、インド側リーダー及びメンバーの件とビザの件についてプッシュする。
シカール・トラベル社のS.クマール氏宛てに、合同隊のアレンジメントについて連絡。

4月3日　S.クマール氏より、合同隊のアレンジメントは全てインド側リーダーのB.S.サンドゥーが行う。との連絡有り。

4月13日　合同隊のインド側隊長のB.S.サンドゥーより、合同隊の条件及びインド側の要望事項についての連絡有り。

4月27日　ＩＭＦへ電話でビザの件について問い合す。
マウンテン・トラベル社に航空便をブッキングする。

5月5日　ＩＭＦから、弘前大学のリモ登山隊についての問い合わせ有り「リモの山域はインドの支配権下にあるエリアであり、その地域へパキスタン政府の許可で入山することは甚だ遺憾である」と云ったクレームであった。

5月7日　上記問い合わせに対して、弘前大学のリモ隊は、パキスタン政府から不許可になった旨を返信する。

5月10日　ＩＭＦとB.S.サンドゥー宛てに、4/13付手紙の返信を送る。
B.S.サンドゥー宛てに、ICI石井のカタログを送付。

5月14日　マモストン・カンリ隊打ち合せ。

5月18日　角田不二隊員、ナンガパルバットへ向けて出発。

6月10日　近喰司氏の御協力を得てＫ２隊と一緒にスノー・バー作製(尾形、吉田)

6月18日　シカール・トラベル社宛てに、隊員出発と隊荷の発送についてのテレックスを打つ。

6月20日　M.S.コーリー氏宛てに、インド側隊員の個人装備の問い合わせと日本側隊員の出発と隊荷の発送についてのテレックスを打つ。

6月21日　鈴木雄一氏宅の倉庫より集荷した隊荷をＨＡＪルームへ搬送。

6月27日　外務省情報文化局及び在印日本大使館へ便宜供与関係書類を送付。
シカール・トラベル社のS.クマール氏へ、インド側の準備状況を問い合すテレックスを打ったところ「マモストン・カンリの許可絶望」の返電が来る。

6月28日　M.S.コーリー氏より、「隊員の出発及び隊荷の発送を待て」のテレックスが入る。

7月4日　M.S.コーリー氏より、「マモストン・カンリ合同隊の許可Ｏ．Ｋ」のテレックスが入り、再びゴー・サインが出された。

7月8日　M.S.コーリー氏来日。合同隊の細目について打ち合わせを行う。

7月9日　前日に引き続きM.S.コーリー氏と打ち合わせ。(帝国ホテル、午前9時～11時)

7月10日　在日インド大使館へビザ申請。

7月11日　M.S.コーリー氏離日。尾形成田へ見送り。

7月13日　在日インド大使館よりビザをピック・アップ。
マモストン・カンリ登山隊の壮行会を高田馬場の居酒屋で開催。

7月14日　AI-315便にて山田昇隊員出発。山田隊員はカトマンズ経由で現地入りする。

7月15日　AI-301便にて吉田憲司隊員出発。

7月16日　日通航空貨物へ隊荷を引き渡す。

7月18日　日通航空貨物より隊荷アナカン輸送のB/Lを受けとり、この日「ヒマラヤ登山観光会議」へ出席のためインドへ出発する阿部淳理事にこのB/Lを託す。

7月20日	国内の関係先へ出発の挨拶状発送。
7月21日～22日	スリナガールで開催された「第2回ヒマラヤ登山観光会議」へ阿部、吉田の2名出席。参会者にＩＭＦとＨＡＪの合同隊がマモストン・カンリへ挑むことが発表される。
7月23日	隊員として参加の予定であった角田君らのナンガパルバット遭難事故の第一報が入る。
7月28日	AI-315便にて本隊の尾形、新郷、岩崎の3名出発。
7月30日	ＩＭＦ関係者との打ち合わせ。インド側隊員との顔合わせ及びミーティング。
7月31日	日本大使館、シカール・トラベル社への挨拶。
8月1日	隊荷をトラックでレーに向けて送り出す。(ナンドゥ、ラジブが同乗) ＩＭＦで日印合同隊の記者会見及びティー・パーティ開催。
8月2日	本隊(サンドゥ隊長ら9名)、IC-423便にてデリーからスリナガールに向かう。 スリナガールでは、アーミー・キャンプで日印合同隊のレセプションが開催される。
8月3日	本隊の9名、IC-429便にてスリナガールからレーに向かう。
8月4日	レー王宮、ツェモ・ゴンパ見学。
8月5日	レーの夏のフェステバル開催される。 後発のラッタン・シン、空路レーに到着。陸路トラックで搬送した隊荷、レー到着。
8月6日	スピトック・ゴンパ、ポロ競技の見物。
8月7日	I.T.B.Pのソナム・パルジョール氏より、「チャン・パーティ」の招待を受ける。
8月8日	ヘミス・ゴンパ見学。Mejor.リンチン氏より、ディナー・パーティの招待を受ける。
8月10日	レーを出発。カルドン・ラ(5,486m)を越えてヌブラ谷のスムレへ。
8月11日	スムレのサンタンリン・ゴンパを見学した後、サソマへ。
8月12日	サソマよりB.S.サンドゥー家と吉田、ラジブの第一陣がキャラバン開始。
8月13日	サソマより山田、新郷、マハビール、ラッタンの第二陣がキャラバン開始。
8月14日	B.S.サンドウ・ファミリー、サソマへ戻る。第一陣はBC着。
8月15日	サソマより尾形、岩崎、ドクター、ナンドゥ、ダスの第三陣がキャラバン開始。 吉田、ラジブはA・BCの偵察。第二陣はBC着。
8月16日	サソマより最後の隊荷と一緒にチョーハンがキャラバン開始。 A・BC(4,900m)への荷上げ開始。
8月17日	B.S.サンドゥ、吉田、新郷、ラジブの4名、サセル・ラを往復。第三陣はBC着。
8月18日	全隊荷BCに集結。BCでは安全登山を祈願する儀式を開催。
8月19日	A・BCへの荷上げとマモストン氷河の偵察。
8月20日	A・BCを建設し、山田、吉田、マハビール、ラジブ、ラッタンの5名が入る。
8月21日	Ｃ1(5,600m)建設。山田、吉田、マハビール、ラジブの4名が入る。
8月22日	Ｃ1のルート工作隊は、「希望のコル」を越えタンマン氷河へ入る。
8月23日	Ｃ1のルート工作隊は、6,100mのＣ2予定地までのルート工作を完了。
8月25日	前日Ｃ1入りした尾形、新郷、岩崎、チョーハン、ラッタンはＣ2(6,100m)を建設。
8月26日	尾形、新郷、ラッタンの3名、Ｃ2入り。
8月27日	Ｃ2のルート工作隊は、北東稜上6,750mのＣ3予定地までのルート工作を完了。
8月28日	Ｃ2のルート工作隊と岩崎、ナンドゥの5名でＣ3(6,750m)を建設。
8月29日	岩崎、ナンドゥ、マハビールは、Ｃ3入り。
8月30日	Ｃ3のルート工作隊と、この日Ｃ2からＣ3への荷上げに登った山田、吉田はＣ3上部の北東稜上に500mのフィックス・ロープを施してＣ2へ下る。

8月31日　全員アタック前の休養のためにA・BCへ下る。
この日、ポニーのアレンジやメール・ランナー役をやってくれてたセンチンがBCの下の急流で事故死したとの連絡を受ける。

9月1日　B.S.サンドゥよりアタック・メンバーが発表される。

9月5日　第一次隊(山田、吉田、岩崎、チョーハン、ダス、ラジブ)アタックに向けてC1へ入る。

9月6日　第一次隊、C2へ移動。
第二次隊(尾形、新郷、サンドゥ、ナンドゥ、ラッタン、マハビール)アタックに向けてC1に入る。

9月7日　第一次隊、C2で気象停滞。第二次隊、C2へ移動。

9月8日　第一次、二次隊共全員A・BCへ下る。

9月11日　第一次隊、再度アタックに向けて一気にC2へ入る。但し、岩崎はC1泊り。

9月12日　第一次隊、C3へ移動。
第二次隊も再度アタックに向けて一気にC2へ入る。岩崎もC2へ移動。

9月13日　第一次隊は午前4時30分にC3を出発し、10時20分にマモストン・カンリの初登頂に成功した。登頂後はC3へ無事帰幕し、そのままC2まで下る。第二次隊はC3へ移動。

9月14日　悪天のため第二次隊は、C3で停滞。

9月15日　天候回復を待って第二次隊は、午前7時にC3を出発し、12時57分にマモストン・カンリの登頂に成功した。尚、二次隊のサンドゥとナンドゥの2名は途中で断念してC3に戻る。

9月16日　前日登頂を断念したサンドゥとナンドゥは、午前4時40分にC3を出発し、12時40分にマモストン・カンリの登頂に成功した。

9月17日　全員A・BCへ下山。

9月19日　A・BCを撤収してBCへ下山。

9月21日　帰路キャラバンの第一陣、下山開始。

9月22日　BC撤収。帰路キャラバン開始。この日はウムロンのアーミー・シェルター泊り。

9月23日　全隊員及び全隊荷、サソマ帰着。

9月24日　サソマからトラックでレーに戻る。

9月25日　レー滞在。ラダーク地区のゼネラル、S.K.シャルマ氏より、ティー・パーティの招待を受ける。

9月26日　隊荷を積んだアーミー・トラックがレーを出発。ナンドゥ、マハビール、ラジブが同乗。

9月27日　山田、ダス、ラッタンの3名、バスでスリナガールへ向かう。ドクターのランジットは空路ダイレクトにデリーへ戻る。

9月28日　尾形、新郷、吉田、岩崎、サンドゥ、チョーハンの6名は空路スリナガールへ向かう。
隊荷を積んだアーミー・トラック、スリナガール着。スリナガールで民間のトラックに積み変え、夜デリーに向けて出発。ダスとラッタンが同乗。

9月29日　スリナガール地区のゼネラル、P.N.フーン氏より、ティー・パーティに招待を受ける。
ティー・パーティの後、IC-428便でデリーへ向かう。

9月30日　隊荷、デリー到着。隊荷の整理及びデポ品の整理。

10月1日　日本大使館、シカール・トラベル社への挨拶。日印合同隊の記者会見(国防省会見室)

10月2日　マハマト・ガンジー生誕記念日。日本側主催のディナー・パーティ開催。(ジャンパス・ホテル)

10月3日　HAJデポ品をシカール社の倉庫へ搬送。ヒマラヤン・クラブでのマモストン・カンリ報告会

夜、ＩＭＦ主催のディナー・パーティ開催(ＩＭＦ)。

10月４日　ダッサラ祭の休日。I.T.B.Pのフカム・シン氏より、ランチ・パーティの招待を受ける。
ダッサラ祭の見物の後、夜はマーキュリー・トラベル社よりディナー・パーティーの招待
(オベロイ・コンチネンタル・ホテル)

10月５日　日本側登山隊、現地解散。
AI-306便にて尾形、新郷の２名帰国の途に。

10月６日　尾形、新郷帰国。

10月13日　AI-308便にて吉田、帰国の途に。

10月14日　吉田、帰国。

※　山田昇隊員は、遠征終了後、カトマンズに戻り群馬県山岳連盟の冬期アンナプルナＩ峰登山隊に参加し、1985年２月中旬に帰国。

※　岩崎洋隊員は、遠征終了後、インド、ネパール放浪の旅へ出かけ各地を転々とする。1985年６月現在、未だ帰国せず。

MOUNTAIN OF THOUSAND DEVILS

-INDO-JAPANESE JOINT KARAKORUM EXP. - 1984

MAMOSTONG KANGRI (7, 516m)

(By YOSHIO OGATA)

PROLOG

Many mountains stands rising in the Karakorum Range in district of Ladakh of Jammu & Kashmir State in INDIA, and are the higher of group such Rimo Muztagh and Saser Muztagh as group of almost equally high peaks which form the south-eastern extension of Karakorum between the Shyok and the Nubra rivers, and these area are a treasure-house of virgin peaks.

Rimo Muztagh and Saser Muztagh had classified into small groups by reports of Karakorum Conference 1930, Rimo Muztagh is include of South Teron Group, Sherkar Group and Kumdan Group. Saser Muztagh is include of Saser Group, Chhushkun Group, Shuupa Kanchang Group, Arganglas Group, Kunzang Group and Shyok Group.

Mamostong Kangri is situated in the Kumdan Group and is a highest peak of the Group in this area and stands alone rising in a single mass to 7,516m at longitude 77 degrees 35' and 35 degrees 08' latitude. Mountain is situated about 20km off the Leh-Yarkand Central Asian Trade Route.

The name of the mountain is derived from a Yarkandi legend. The legend says that a party of traders once perished there looking for an alternative route to the nearby difficult Saser La. Since then the mountain has been known at the mountain of " Thousand Devils ".

Mamostong Kangri (7,516m) has three long glaciers lead off the mountain. To the south is the Mamostong Glacier (16km) draining into Tulum Putti Topko and later into the Nubra River. To the east is the Thangman Glacier (20km). And to the North-West is the long Chong Kumdan Glacier. These glaciers drain into the Shyok River. In fact, it was the Chong Kumdan Glacier that had dammed the Shyok River and had caused the devastating dam burst of 1926 and 1929. (*1) Now the Shyok has cut itself a tunnel under the glacier.

Mamostong Kangri had surveyed in about 1860 and initially labelled K-32 by the survey of India.

The earlier approach to the Mamostong were made in 1907 by Arther Neve and D. A. Oliver. They had explored to Mamostong Glacier. M. L. A. Gomperz also explored to Mamostong Glacier in 1928.

After that, The mountain kept silence in a long time and Indian Army team led by Lt-Col. Prem Chand attempt on the mountain in 1969.

Over ten years earlier we had expressed deep interest in some peaks in the Eastern Karakorums to the I. M. F. After years of fruite-less attempts to get permission, we finally approached Captain M. S. Kohli, vice-president of the Indian Mountaineering Foundation and asked for his assistance. He told us that if it was a joint climb with the I. M. F. there was a chance of permission being secured. So, after a decade of waiting, the news that there would be a joint Indian-Japan expedition to Mamostong Kangri was announced by Mr. Kholi at the annual H. A. J. " Indian Himalaya Meeting ". Although we had strongly considered climbing Saser Kangri, when permission for Mamostong Kangri materialized we decided to go for it as it was higher and as yet unclimbed. Our departure was delayed however, by the unfortunate political unrest in India at the time.

We had been interested in Saser Kangri for a long time and had compiled a considerable amount of information about the area. As to Mamostong Kangri however, we were almost totally in the dark as maps and pictures virtually non-existent. The only photograph available showed Mamostong Kangri as a small white bump in a huge range. The only maps available were those of the U. S. Army Corps of Engineers. At first we had planed on climbing the N. E. ridge by way of Chong Kumdan Glacier. The reason for this was it's close proximity the ancient " Central Asia Trade Route, or Skeleton Trail ". The day we arrived in Delhi, we were able to look at the more detailed maps of the Indian Army and found that our chosen route was too dangerous. We changed plans that very day and decided to go from Mamostong Glacier on the south side with a 13 members team.

APPROACH

On 14&15th July, Yamada and Yoshida left for Delhi early to make preparations. The Japanese main party of 3 members, having left Tokyo on 28th July, arrived in Delhi on next afternoon.

We send all our luggagees from Delhi to Leh in the Ladakh by autotruck on 1st August. Next day, The climbing team left for Srinagar by air.

We had received a warm reception by Lt. General P. N. Hoon, who was a commanding officer of the Indian Army Stationary troops in Srinagar.

On 3rd Aug. we left Srinagar for Leh by air. We had enjoyed a mountain flight or the very short flight.

Leh had for ages been a meeting place of caravans from Yarkand, Tibet, Kashmir and Kulu. In the modern context, the phenomenon has been extended to a meeting of cultures from the West and the East. It remains to be seen how the Ladakhis absorb this recent exposure.

Leh itself bears signs of the past and scars of the present. One is struck by the barren-ness, brown yet colorful. One can see the mixture of cultures - Buddhist and Muslim.

We stayed the Leh just at the time held a Summer Festival that we had enjoyed a wonderful festival. We stayed in Leh for one week, hire-ling porters and waiting for arriving equipments. At the Leh was difficult to hired of porters in comparison with other place of Himalaya, but we could hire 14 Nepali porters. We had received very assistance by Major Rinchen of the Ladakh Scouts in preparation for our departure at Leh.

On 10th Aug. We left for the Nubra Valley in 3 Army trucks and 1 jeep. After riding about 2,000m on a precarious, winding road we arrived at Khardung La. At 5,486m, it is the highest pass that crossed by autotruck in the world. We still couldn't see Mamostong Kangri. The northern side was covered with ice and at one point the road cut through a hanging glacier. Then we drove along a river to the Shyok river. We met the Shyok river at Khalsar and ahead crossed the bridge to land up at Sumur. We stayed at Sumur village at the entrance of Nubra valley. Nubra valley means " Green valley " in Ladakh. Ladakhis declare that the Nubra valley is the most beautiful area with thick " forests ", but we looked for these forests till someone pointed out a growth of shrubs, about a foot high, a quarter of a mile away.

On 11th Aug. We went to the Gompa at Sumur in the morning. These Gompa was worth a visit. Then we traveled along the Nubra valley. We went through Panamik village on to Sasoma.

From Sasoma to the north lay the Siachen glacier drained by the Nubra river. To the east wound up that famous Central Asia Trade Route, or the " Skeleton Trail ", to Saser La and Karakorum Pass.

We camped riverside of the Nubra river.

ALONG THE SKELETON TRAIL

From August 12th to 14th we road in a caravan from Sasoma to Base Camp. The Trumputi river is a deep and narrow gorge at the entrance. Therefore the Leh-Yarkand Central Asia Trade Route passed the extremely steep on the wall. The first day involved the steep ascent to Trumputi La, after which we went along the Trumputi river and as we arrived at the Jhingmoche. The next day we marched along the Trumputi river with crossed two small river, and as we camped at a just this side of the Skyampoche. Here too, at a moderate distance, we had our first sight of the Mamostong Kangri.

We set up a Base Camp at the entrance of the Mamostong Glacier at the heigh of 4, 600m. situated on a moraine opposite of the Skyampoche.

From Skyampoche to the east wound up that Central Asia Trade Route, to Saser La and Karakorum Pass via Upper Shyok River.

On 17th August, Col. Sandhu, Yoshida, Shingo and Rajiv went to the Saser Pass (5, 395m). The 4mans could stand on the Pass at 15:15, they took about seven hours from our Base Camp.

On 18th August, We and all of our luggage arrived at Base Camp.

CLIMBING SUMMARY

The scouting team decided on the place for the Advance Base Camp (A. BC). It was at 4, 900m by a beautiful moraine lake. In order to reach it from B. C., we would have to go on the side moraine beside Mamostong Glacier, across a smaller glacier.

On 19th Aug. We began climbing. 8 team members including Ogata went to A. BC to bring up equipment. Then they climbed Mamostong Glacier to scout for the next camp site. There they were able to see the magnificent views of the South face of Mamostong Kangri greeted them.

On 20th Aug. 5 team members Yamada, Yoshida, Mahavir, Rajiv, Rattan and two high porters went to A. BC to make camp.

On 21th Aug. Camp 1 was made by 7 members who came to A. BC since the day before. Yamada, Yoshida, Mahavir and Rajiv stayed the night there. The route A. BC to Camp 1 lay on the moraine of Mamostong Glacier. After a while Mamostong Glacier became steep then curved to the right, Camp 1 5, 600m high was at the end of Mamostong Glacier, 15 minutes from the south face of Mamostong Kangri.

On 22nd Aug. 4 team members, Yamada, Yoshida, Mahavir and Rajiv left

Camp 1 to make Camp 2. Although we had worried about crossing the ridge dividing Mamostong and Thamgman Glacier through the col (5, 885m). We named the col " Hope Col ". From there we walked out on to the glacier to look for a suitable site for Camp 2 before returning home.

On 23rd Aug. 4 members team led by Yamada went to fix the site for Camp 2 and improve the route. Camp 2 was at the heigh of 6, 100m.

On 25th Aug. 5 team members Ogata, Shingo, Iwasaki, Chauhan and Rattan came to Camp 1 to replace the Yamada team. They went to bring luggagees and improve the route.

On 26th Aug. Ogata, Shingo and Rattan made Camp 2 and remained there.

On 27th Aug. The same team left Camp 2 early in the morning, and finished the route-making work on the Camp 3. The route up to Camp 3 went on lengthy snow field, with no technical difficulty. They reached the North-East ridge and decided it would be a good place for Camp 3.

On the other hand, we met accident sad to say on the day. During approach the team had to cross Swollen Glacier streams and the expedition mail-runner, Synchen was unfortunately drowned on 27th Aug. while crossing one of the streams. He did assistance for our approach march at Sumur and Sasoma.

On 28th Aug. Iwasaki and Nandlal joined the Ogata team to help make Camp 3. After making Camp 3, Ogata, Shingo and Rattan went down to Camp 1.

On 29th Aug. Iwasaki, Nandlal and Mahavir left Camp 2 for Camp 3.

On 30th Aug. Yamada and Yoshida joined the three members to make a route on the North-East ridge, and rope were fixed about 500m. At the end of the day all of them went down to Camp 2.

ATTACK

On 31st Aug. Everyone gathered at A. BC to rest before attacking the summit. But because of bad weather conditions, the attack had to be postponed. After the bad weather of next day, The summit assult team started out from A. BC on 5th September. The first attack team, Yamada, Yoshida, Iwasaki, Chauhan, Das and Rajiv left for Camp 1.

On 6th Sep. The first team moved to Camp 2, as the second attack team left for Camp 1 from A. BC.

On 7th Sep. Because of bad weather, the first and second team both stayed at Camp 2. The following day's weather was also unfavorable and both team returned to A. BC.

After three day's rest, The weather had improved somewhat and we felt we

had to take the opportunity to climb before it vanished. The first attack team went directly from A. BC to Camp 2 with the same members except Iwasaki It took about 5 hours.

On 12th Sep. With great effort the first team waded through chest-high snow while pulling up the fixed ropes on the say to Camp 3. After arriving at Camp 3, Yamada and Rajiv went to improve the route above Camp 3. The others set up another tent in preparation for the next days summit attempt. The second team comprised of Col. Sandhu, Ogata, Shingo, Nandlal, Rattan and Mahavir joined Iwasaki at Camp 1 and proceed to Camp 2.

On 13th Sep. The first team left Camp 3 at 4:30 A. M. At 8:00 A. M they reached at the last of the fixed ropes. They then climbed while fixing ropes until they reached the 7, 200m shoulder of Mamostong Kangri. From there the ridge like snowfield became narrow and steep. The Chong Kumdan Gl. side of the ridge is a sheer vertical drop and allows no mistake. We reached what we had thought was the summit. The actual summit, however, was farther ahead across an extremely narrow ridge. Because of it's steep-ness, we avoided the Chong Kumdan side. The third snow peak along the ridge was the real summit. It was achieved by Yamada, Rajiv and Yoshida after 6 hours of work from Camp 3. They had an excellent 360 view of the area. Soon after, Chauhan and Das reached the summit. Then all 5 members descended to Camp 2.

On 14th Sep. At midnight, the second team sensed that the day's weather would be unfavorable. Preparations were finished by 2:30 A. M. but by then it was obvious that weather conditions had deteriorated even further and the second team was forced to give up for the today.

On 15th Sep. The weather had improved so the second team set out for the summit at 7:00 A. M in a strong wind. Ogata, Shingo, Mahavir, Rattan and Iwasaki achieved the summit at 1:00 P. M in spite of the bad weather conditions and strong wind. Col. Sandhu and Nandlal gave up en route.

On 16th Sep. The senior members who had given up yesterday made a successful ascent today. They left Camp 3 at 4:40 A. M and arrived at the summit 8 hours later. All members of the climbers team had reached the summit of Thousand Devils.

On 17th Sep. All members gathered safely at A. BC.

On 19th Sep. Everyone helped take down A. BC and left for B. C with full packs.

The party returned to Sasoma on 22th Sep.

CONCLUSION

The virgin peak more than 7,500m were very few nowadays of the earth, Now is the time for the higher virgin peak so to speak "The Shining Mountains of the last" for that reason. We were able to first ascent a 7,500m virgin peak at such a time, and we were very happy to climb with mountaineers of Indian.

We would like to extend our thanks to the Indian Army that we were fortunate enough to receive a lot of support.

We left a precious footprints in the one page of the history of Eastern Karakorum. It may be said in this connection that we entered to Nubra and Shyok River area from Indian side for Japanese, after 75 years absence indeed.

We had hoped that this climb will contribute to the gradual loosening of restrictions to this area for a long time. But, The IMF announced a happy news which have recently been opened 16 peaks in the Karakorum area by the Government of Indian for mountaineering expedition on 6th Feb. 1985.

(*1: Himalayan Journal Vol 1 p4 by F. Ludlow, Vol 2 p35 by J. P. Gunn)

SUMMARY AND OUTLINE

Name of the team: Indo-Japanese Joint Karakorum Expedition 1984.

Sponsor: Indian Mountaineering Foundation (IMF)
The Himalayan Association of Japan (HAJ)

Period of the expedition: From August to September, 1984.

Expedition members:

- Japanese Members -

Leader: Yoshio Ogata (36). Members: Noboru Yamada (34), Nobuhiro Shingo (41), Kenji Yoshida (31), Hiroshi Iwasaki (24).

- Indian Members -

Leader: Col. Balwant S. Sandhu (48). Doctor: Ranjit Kumar (38). Members: Nandlal Purohit (42), H. C. Chauhan (33), Parash Moni Das (33), Rattan Singh (31), Mahavir Thakur (27), Rajeev Sharma (29).

Ⅲ　資　　料

登攀行動表

隊員別行動表

インド・ヒマラヤ解禁峰一覧

新聞スクラップ

登 攀 行 動 表
DIAGRAM OF ACTION

	B・C 4,600m	A・BC 4,900m	Camp 1 5,600m	Camp 2 6,100m	Camp 3 6,750m	Summit 7,516m
8/15	←	K.S				
16	←	C.Y.N.R.M Hp3				
17	↙ ←	Saser Pass : O.Y.M.R.Hp3	C.N.K.S			
18	• Rest : All Members					
19	←	O	Y.K.P.R.D.M.S			
	←	N.I				
20	←	O.N.I.H.D.	Hp1			
	→	Y.K.R.M.S				
21	→	O.N.I.H.D.	Hp1			
		→	Y.K.M.S			
		←	R. Hp1			
22			←	Y.K.M.S		
		←	O.N.I.H.R.D.	Hp3		
	→	C.P.Dr				
23		←	C.P.D.Hp3			
			←	Y.K.M.S		
24		→	O.N.I.H.R	Hp2		
		←	Y.K.M.S			
	→	D.				

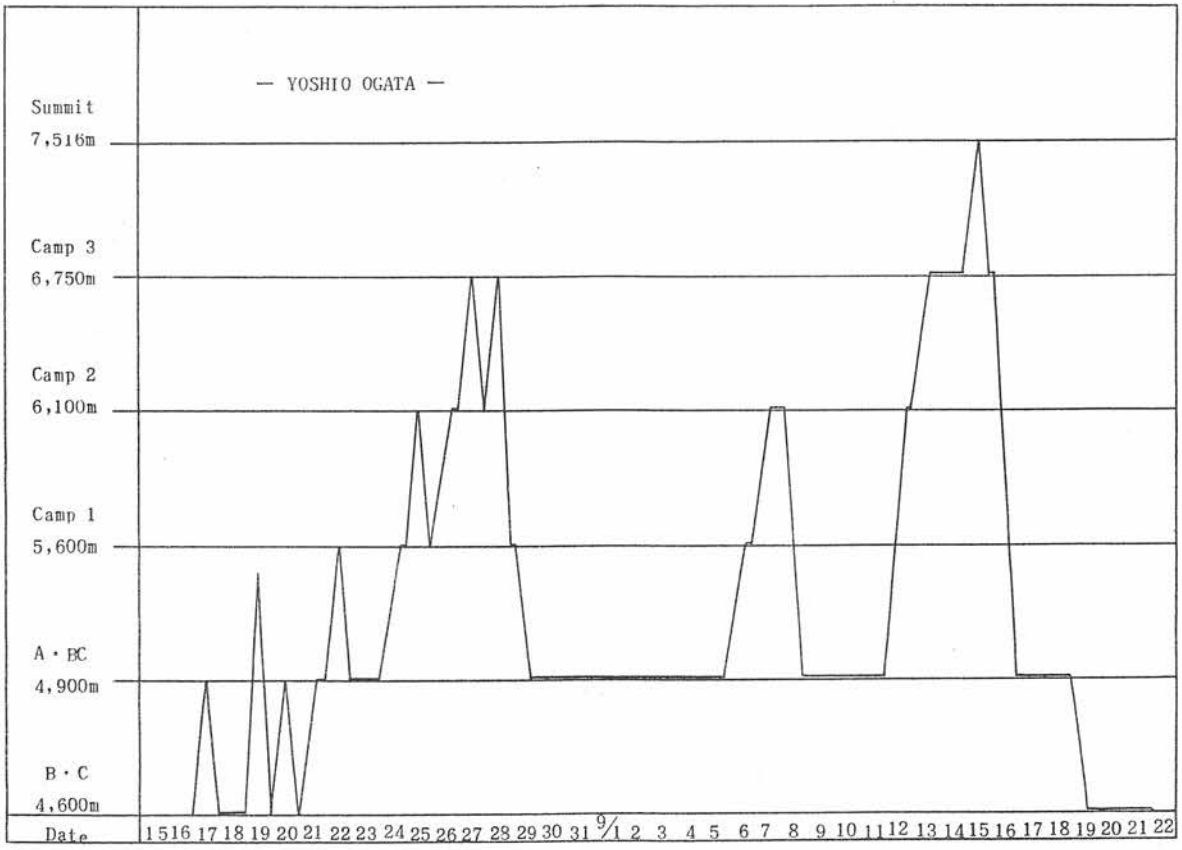
	B・C 4,600m	A・BC 4,900m	Camp 1 5,600m	Camp 2 6,100m	Camp 3 6,750m	Summit 7,516m
25			P. Hp1	O.N.I.H.R.	Hp2	
26			C.D H	O.N.R Hp3		
27			M	I.P C.D. Hp3	O.N.R	
28		Y.K.H.S		C.D.M Hp3	O.N.R I.P	
29			O.N.R. Hp2	Y.K.H.S	I.P.M C.D	
30				C.D	I.P.M Y.K.H.	S
31		Dr.R		Y.K.I.P.H.M	S	
9/1		C				
2		R				
3		• Rest : All Members				

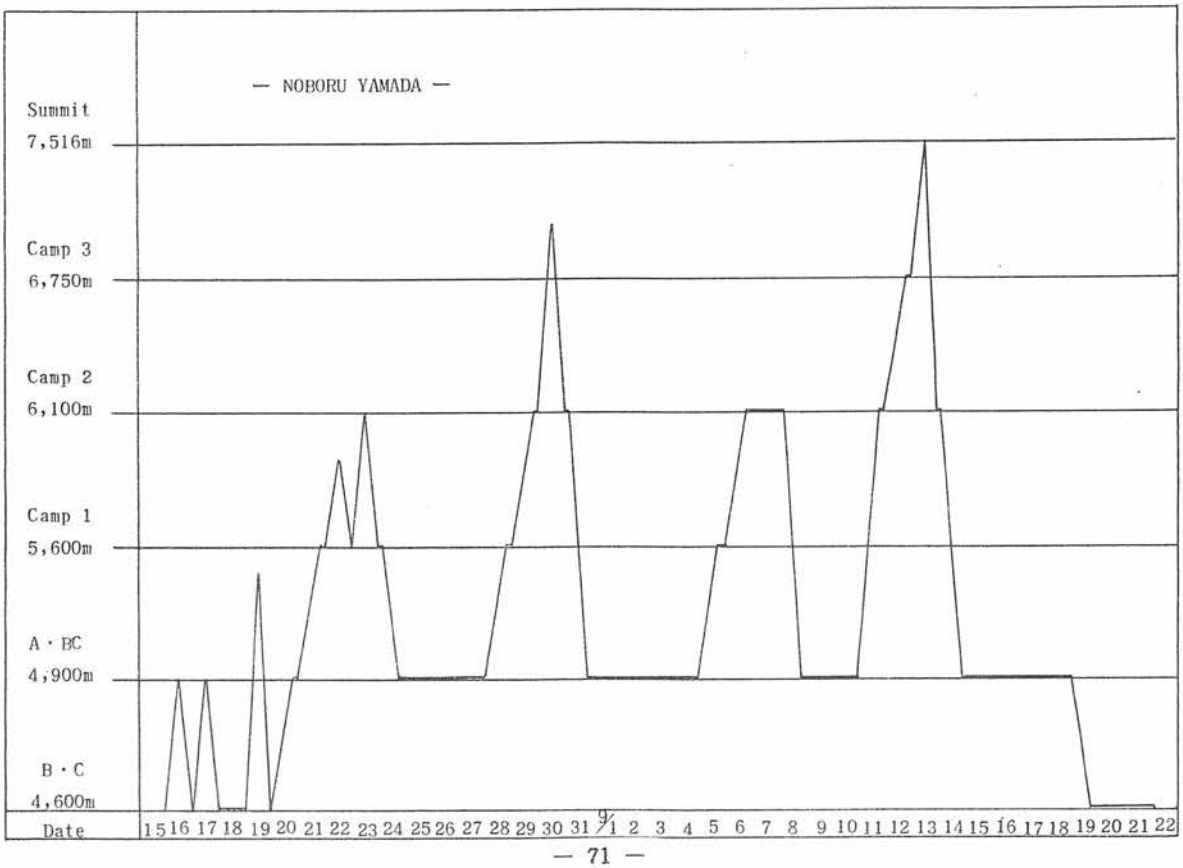
	B・C 4,600m	A・BC 4,900m	Camp 1 5,600m	Camp 2 6,100m	Camp 3 6,750m	Summit 7,516m
4		• Rest : All Members				
5		→	Y・K・I・H・D・S			
6		→	→ O・N・C・P・R・M	Y・K・I・H・D・S		
7			→	• Stay : Y・K・I・H・D・S O・N・C・P・R・M		
8		←	←	Y・K・I・H・D・S O・N・C・P・R・M		
9	←	C・ Dr・H・Hp3				
10	→	H				
11	→	→ → C・Dr	→ I	→ Y・K・H・D・S		
12		←	→	→ I → O・N・C・P・R・M	→ Y・K・H・D・S	
13				←	→ O・N・I・C・P・R・	Y・K・H・D・S M

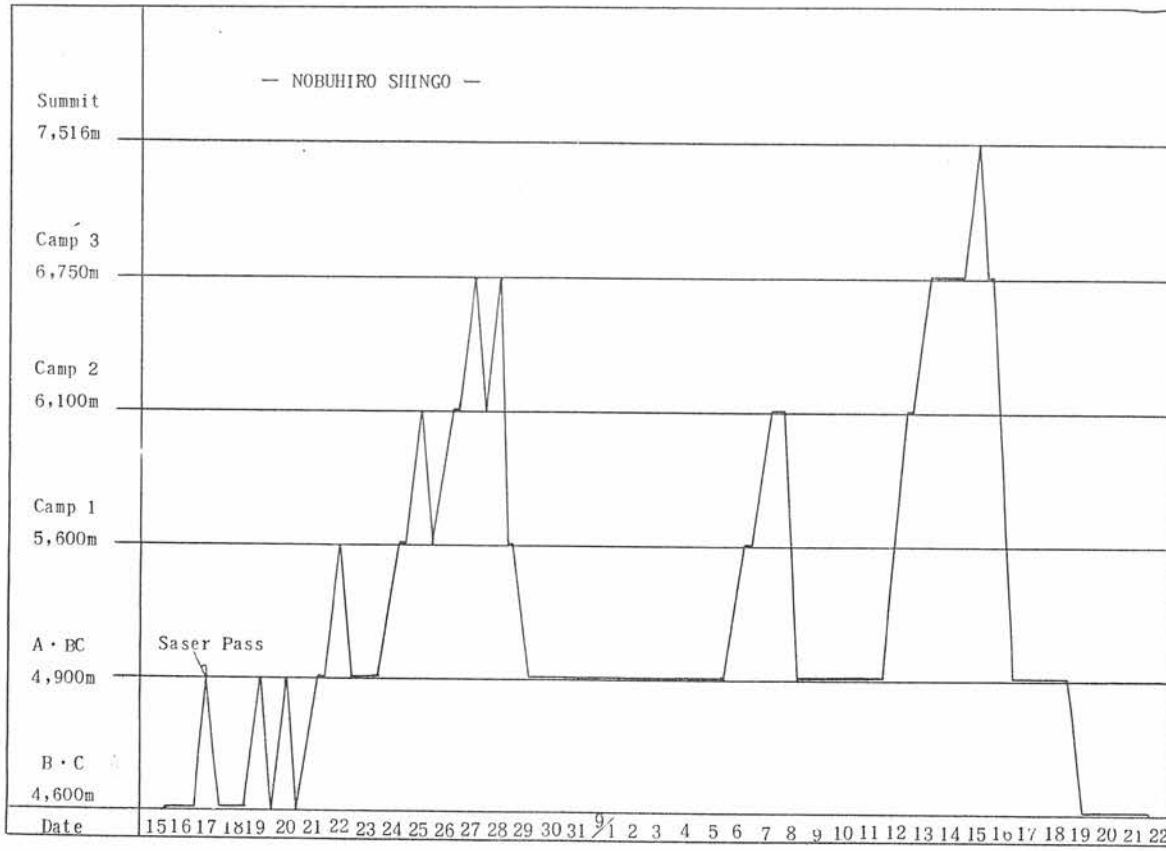
	B・C 4,600m	A・BC 4,900m	Camp 1 5,600m	Camp 2 6,100m	Camp 3 6,750m	Summit 7,516m
14				H.S Y.K.D	Stay : O.N.I.C.P.R.M	
15				S H	O.N.I.R.M C.P	
16				S	R.M O.N.I	C.P
17				C.P.R.M		
18		Rest : All Members				
19		All Members				
20	Rest : All Members					
21	Rest : All Members					

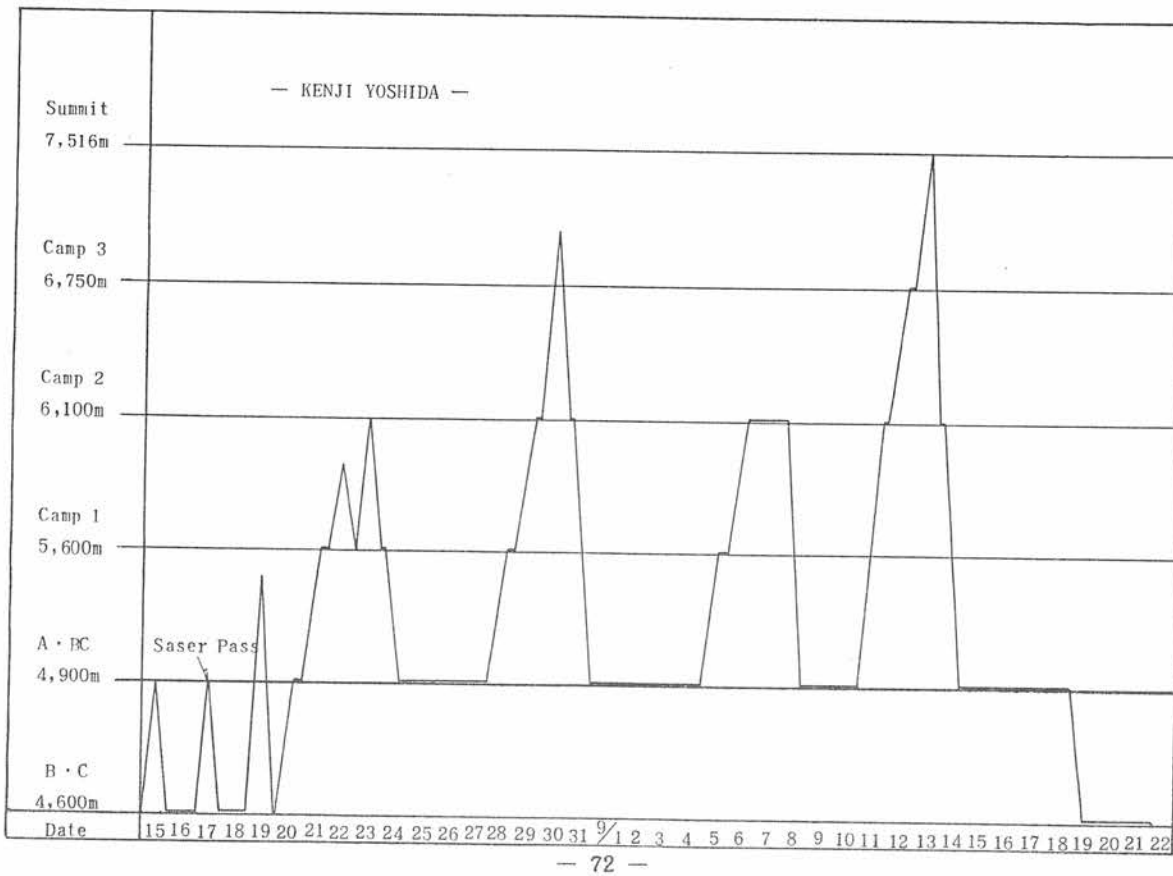
O : Yoshio Ogata
Y : Noboru Yamada
N : Nobuhiro Shingo
K : Kenji Yoshida
I : Hiroshi Iwasaki
C : Col. Balwant S.Sandhu
Dr : Ranjit Kumar
P : Nandlal Purohit

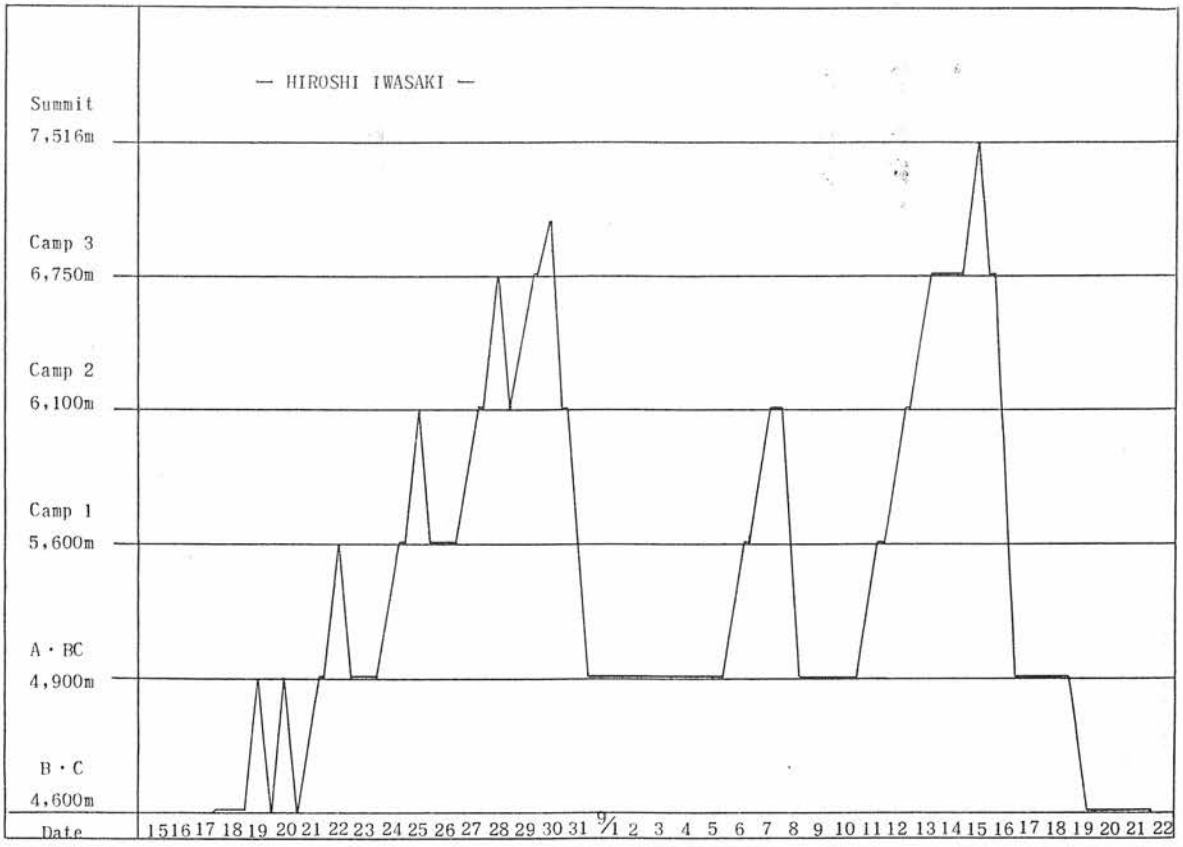
H : H・C Chouhan
D : P・M Das
R : Rattan Singh
M : Mahavir Thakur
S : Rajeev Sharma
Hp : Hight Porter
Hp③—Number of Hight Porter

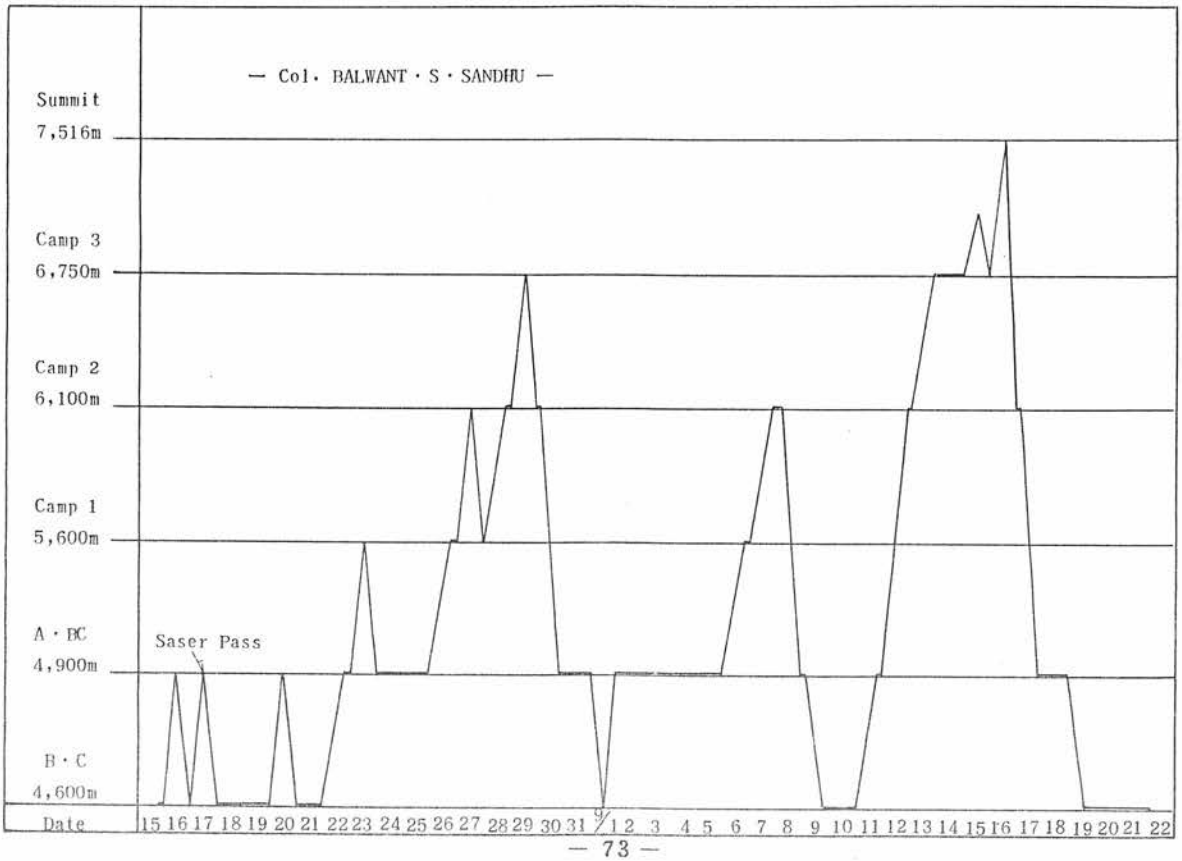

— YOSHIO OGATA —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
A・BC
4,900m
B・C
4,600m
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

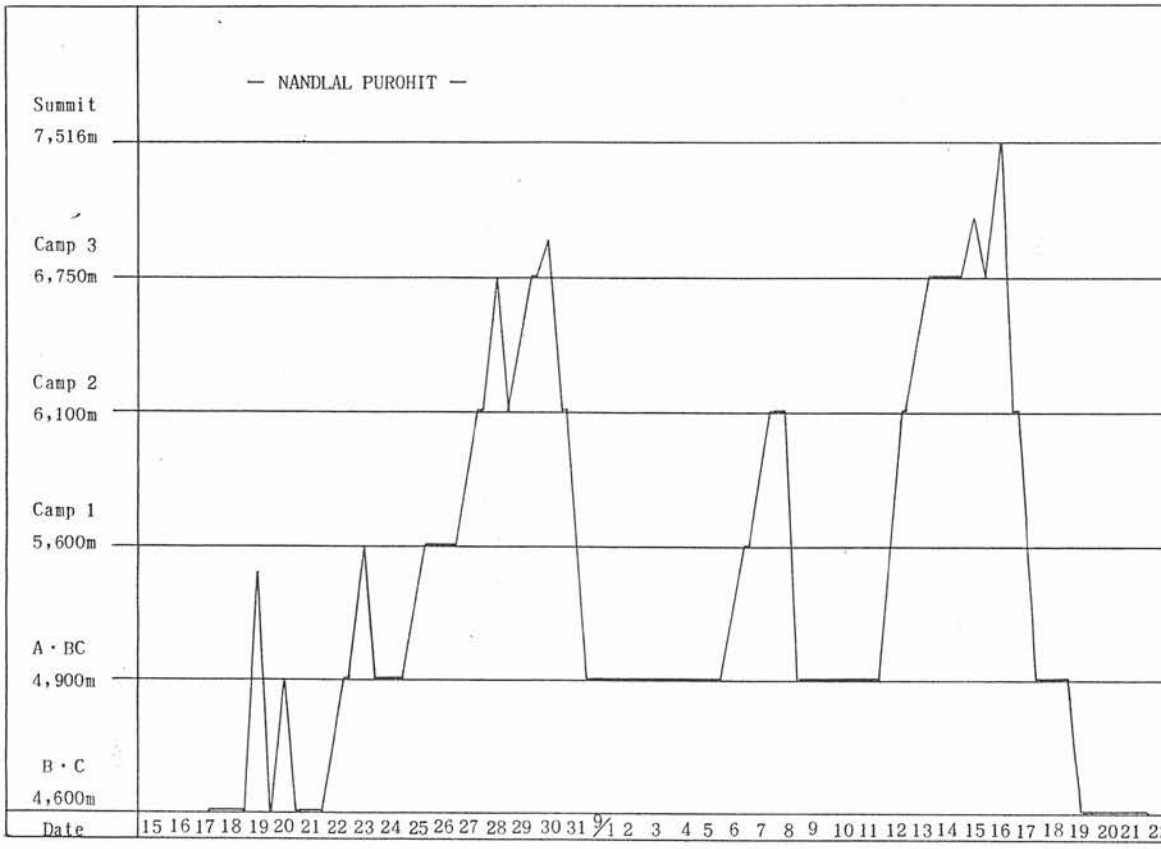

— NOBORU YAMADA —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
A・BC
4,900m
B・C
4,600m
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

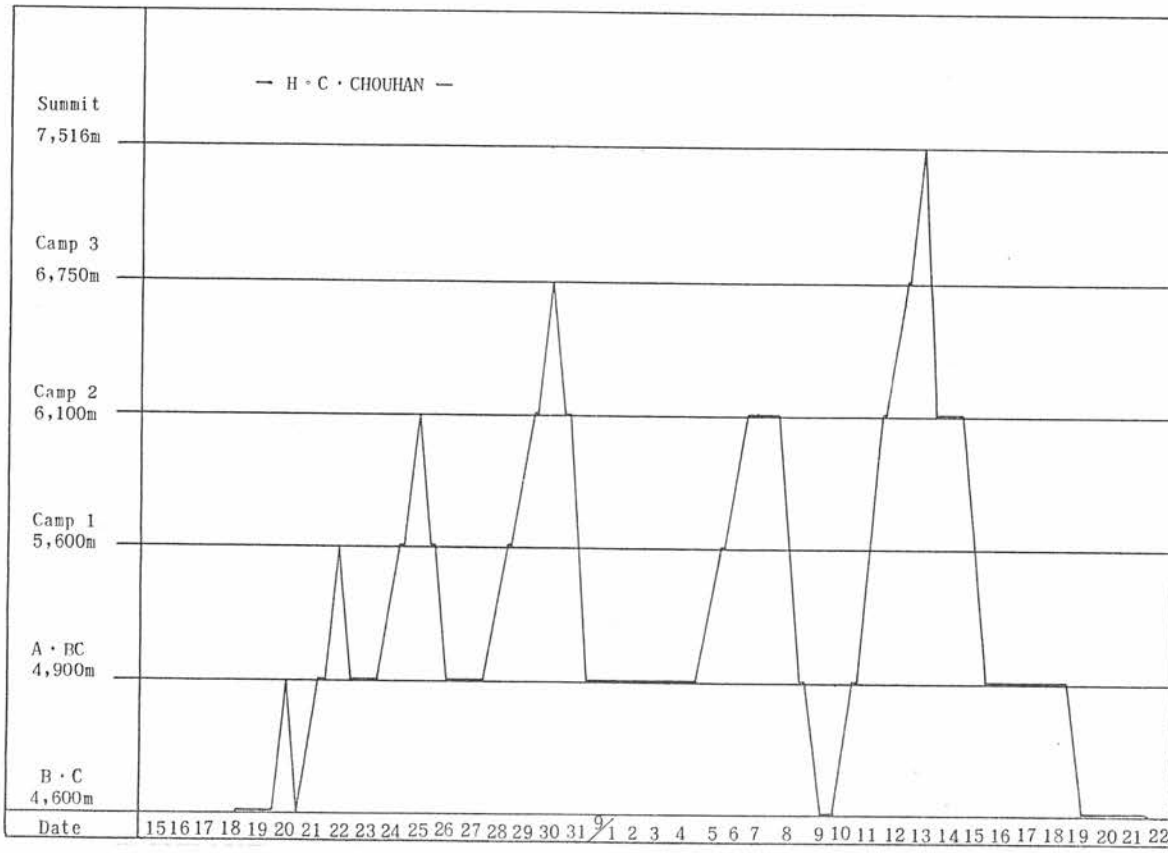

— NOBUHIRO SHINGO —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
A・BC
4,900m
B・C
4,600m
Saser Pass
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

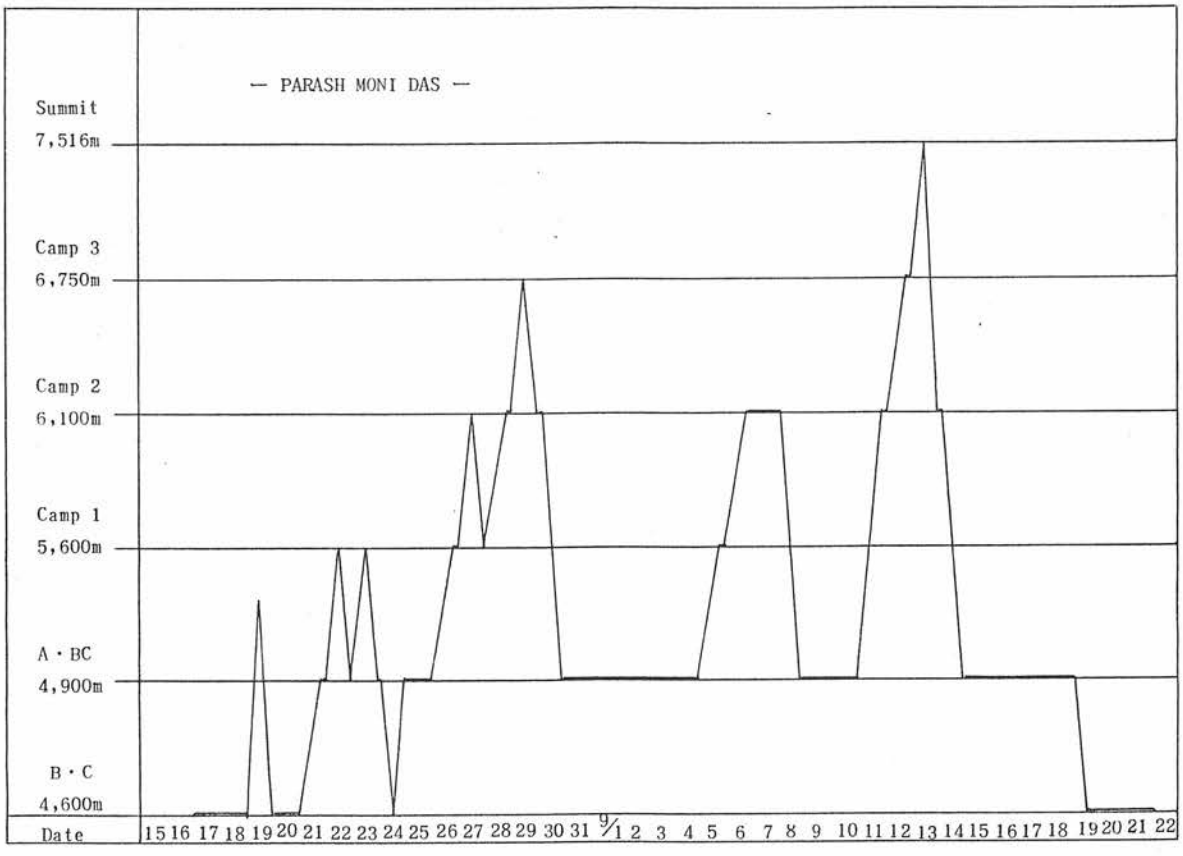

— KENJI YOSHIDA —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
A・BC
4,900m
B・C
4,600m
Saser Pass
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

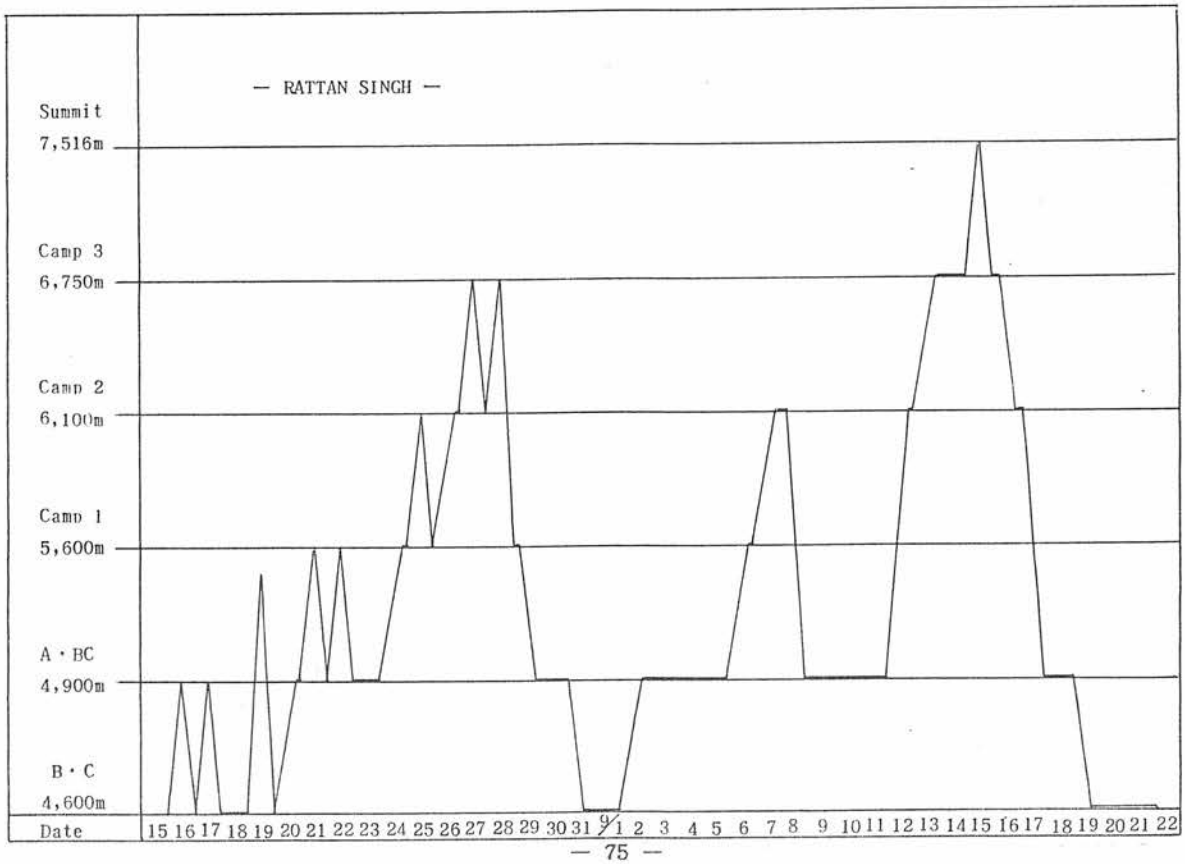

— HIROSHI IWASAKI —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
A・BC
4,900m
B・C
4,600m
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

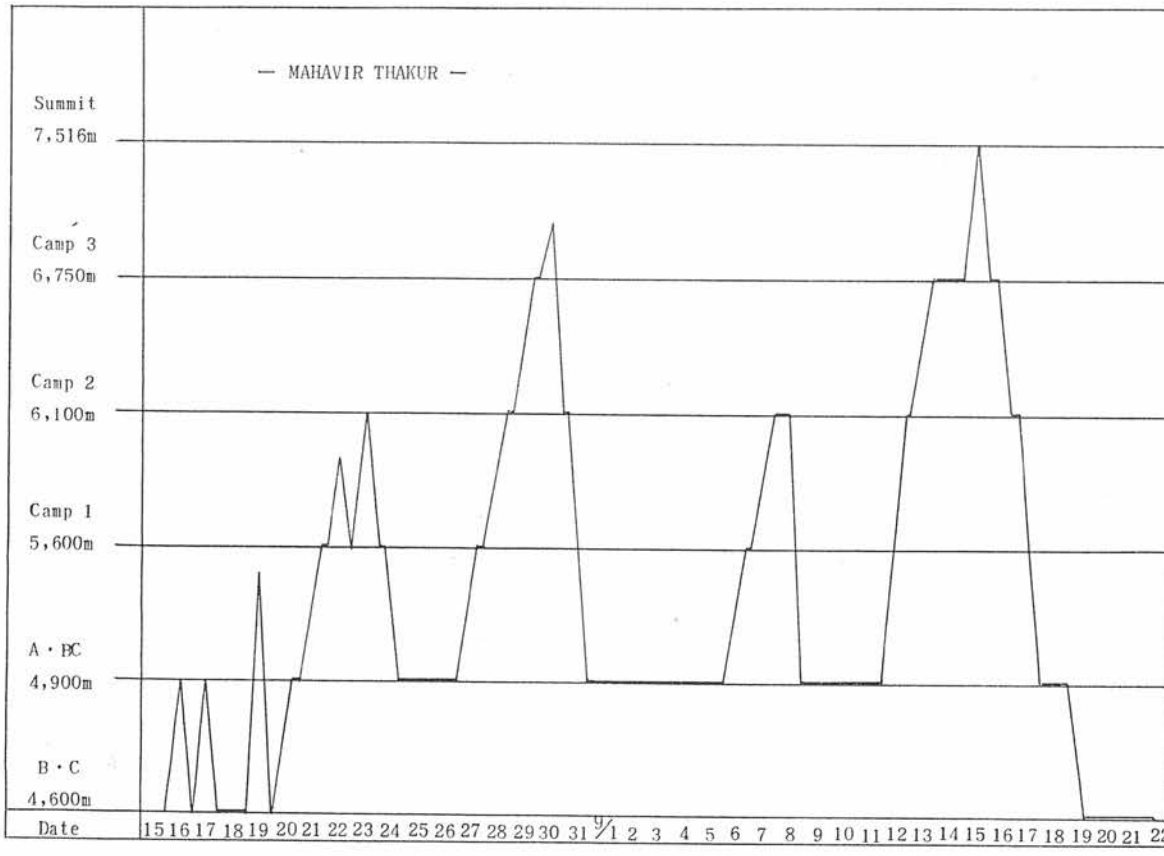

— Col. BALWANT・S・SANDHU —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
A・BC
4,900m
Saser Pass
B・C
4,600m
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

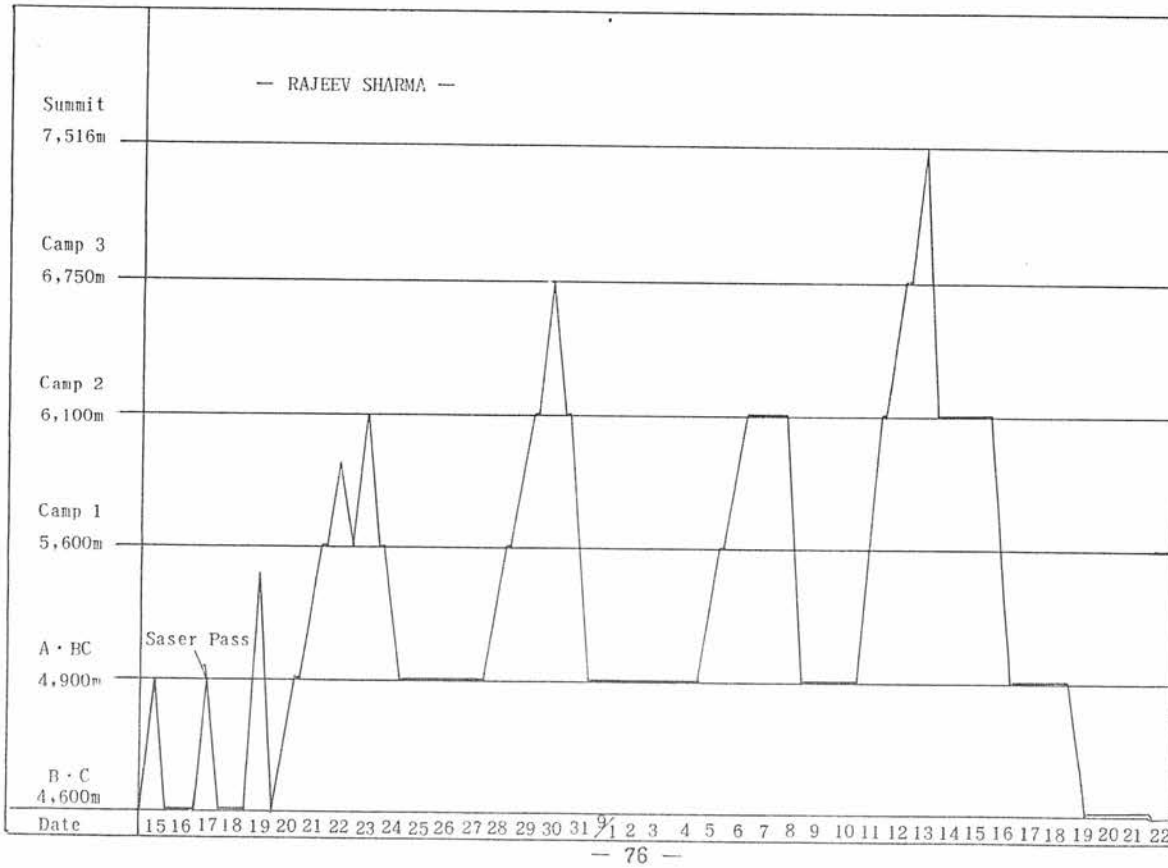

— NANDLAL PUROHIT —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
A・BC
4,900m
B・C
4,600m
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22


— H・C・CHOUHAN —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
A・BC
4,900m
B・C
4,600m
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22


— PARASH MONI DAS —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
A・BC
4,900m
B・C
4,600m
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22


— RATTAN SINGH —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
A・BC
4,900m
B・C
4,600m
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22


— MAHAVIR THAKUR —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
A・BC
4,900m
B・C
4,600m
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22


— RAJEEV SHARMA —
Summit
7,516m
Camp 3
6,750m
Camp 2
6,100m
Camp 1
5,600m
Saser Pass
A・BC
4,900m
B・C
4,600m
Date
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

インド・ヒマラヤ解禁峰一覧

インド登山財団（IMF）は、2月6日付で外国登山隊に対して待望久しいインド領カラコルムのオープンを発表した。オープンされたのは16峰（インディラ・コルを含む）で、これらの新解禁峰は次の3つのグループに分けられている。

—Aグループ—

1. サセル・カンリⅠ（7,672 m）
2. 〃 Ⅱ（7,513 m）
3. 〃 Ⅲ（7,495 m）

—Bグループ—

4. マモストン・カンリ（7,526 m）
5. リモ・ピーク（7,385 m）

—Cグループ—

6. アプサラサスⅠ（7,245 m）
7. 〃 Ⅱ（7,239 m）
8. 〃 Ⅲ（7,230 m）
9. テラム・カンリⅠ（7,465 m）
10. 〃 Ⅱ（7,406 m）
11. 〃 Ⅲ（7,381 m）
12. シンギ・カンリ（7,202 m）
13. ゲントⅠ（7,401 m）
14. 〃 Ⅱ（7,343 m）
15. インディラ・コル（5,760 m）
16. シア・カンリ（7,422 m）

（高度はIMF発表による）

これら発表された新解禁峰をみると1949年の印パ停戦ラインを越えた北西地域の山々が含まれており、而も、シアチェン氷河源頭域の山々がインド領カラコルムとしてオープンされたのである。

'75年の静岡大学隊によるテラム・カンリ登頂や'76年の大阪大学隊によるアプサラサス、東北大学隊のシンギ・カンリ、'78年の関西学生山岳連盟OB会によるゲントⅡ、'79年の弘前大学隊によるテラム・カンリⅢなど日本隊が輝しい足跡を印したこれらの山々は、いずれもパキスタン側から登られたものであるが、それが'85年になってインド領カラコルムとしてオープンされると云うのであるからややこしくなってきた。

今回の発表は諸外国の登山団体向けにインフォメーショされたものであるが、今のところパキスタン側からの反論は届いてない。

但し、オープンされたと云ってもこのエリアが従来通り厳しいコントロール・エリアであることには変りなく、入域に際しては幾つかの条件が付与されている。

先ず、登山隊数であるがこの新解禁峰の登山許可は、A、B、C各山群とも1年に1山群1隊づつ交付されるとの事。

次いで許可条件としては、次の4項目を満す必要がある。

—— 登山許可条件 ——

1) 登山隊はインドとの合同隊でなければならない。
2) 合同隊の外国側メンバーは7名を越えない人数とする事。
3) 外国側は登山料を2,000ドル支払わなければならない。

この新たにオープンされたカラコルムを含め、現在外国登山者にオープンされているインド・ヒマラヤの全ピーク一覧を次に掲げる。

1. ガルワール・ヒマラヤ

山　　名	高　度	経　度	緯　度
(ガンゴトリ地域)			
Swargarohini I	6,252 m	78° 31′	31° 06′
Swargarohini II	6,248 m	78° 31′	31° 06′
Unnamed Peak (West of Swargarohini)	6,247 m	78° 30′	31° 06′
— do —	6,209 m	78° 30′	31° 06′
Unnamed Peak (East of Swargarohini)	5,654 m	78° 35′	31° 04′
— do —	5,873 m	78° 35′	31° 04′
— do —	5,736 m	78° 35′	31° 06′
Unnamed Peak (North of Banderpunch)	5,791 m	78° 34′	31° 04′
Banderpunch − I (Black Peak -Kalanag)	6,387 m	78° 34′	31° 02′
Banderpunch − II	6,302 m	78° 33′	31° 00′
Unnamed Peak (West of Banderpunch − II)	6,102 m	78° 31′	31° 00′
— do —	5,800 m	78° 37′	31° 00′
Srikanta	6,133 m	78° 48′	30° 57′
Unnamed Peak (West of Srikanta)	5,544 m	78° 47′	30° 57′
Unnamed Peak (East - South of Srikanta)	6,023 m	78° 49′	30° 57′
Rudugaira	5,819 m	78° 52′	30° 56′
Gangotri − I	6,672 m	78° 51′	30° 55′
Gangotri − II	6,590 m	78° 51′	30° 54′
Gangotri − III	6,577 m	78° 52′	30° 53′
Joanli	6,632 m	78° 51′	30° 51′
Unnamed Peak	5,834 m	78° 50′	30° 52′
Unnamed Peak	6,038 m	78° 50′	30° 52′
(ケダルガンガ谷周辺)			
Jogin − II	6,342 m	78° 56′	30° 54′
Jogin − I	6,465 m	78° 55′	30° 53′
Jogin − III	6,116 m	78° 56′	30° 54′
Thaley Sagar (Pathing Pithwara)	6,904 m	78° 59′	30° 52′
Bhrigupanth	6,772 m	79° 00′	30° 53′
Unnamed Peak (North of Bhrigupanth)	6,529 m	79° 01′	30° 55′
— do —	6,568 m	79° 00′	30° 57′
— do —	6,008 m	78° 90′	30° 57′
Manda	6,511 m	78° 51	30° 52′

Bhrigu Parbat	6,000 m	78° 59′	30° 57′
− do − (West)	5,944 m	78° 59′	30° 57′
Hanuman Tibba	5,366 m	78° 59′	30° 58′
Unnamed Peak (Meru Bamak)	6,044 m	79° 01′	30° 53′
Meru 〃	6,660 m	79° 02′	30° 52′
Meru North 〃	6,450 m	79° 02′	30° 53′
Meru East 〃	6,261 m	79° 01′	30° 53′
Unnamed Peak	6,602 m	79° 02′	30° 53′
(キルティ氷河周辺)			
Kirti Stambh	6,270 m	79° 01′	30° 49′
Unnamed Peak	6,123 m	79° 01′	30° 50′
(North of Kirti Stambh)			
− do −	6,108 m	〃	〃
− do −	6,304 m	〃	30° 51′
− do −	6,112 m	〃	〃
Kirti Stambh − I	6,274 m	〃	30° 49′
Kirti Stambh − II	6,259 m	〃	30° 50′
Bhartekhunta	6,578 m	79° 02′	30° 48′
(ガンゴトリ氷河周辺)			
Kedarnath	6,968 m	79° 04′	30° 48′
Kedarnath Dome	6,830 m	〃	30° 44′
Mahalaya Parbat	5,970 m		
Unnamed Peak	6,443 m	〃	30° 47′
(South East of Kedarnath)			
Burma Gupha	5,892 m	79° 05′	30° 48′
Sumeru Parbat	6,350 m	79° 08′	30° 46′
Kharcha Kund	6,632 m	〃	30° 47′
Shivling − I	6,543 m	79° 04′	30° 53′
Shivling − II	6,505 m	79° 05′	〃
Bhagirathi − I	6,856 m	79° 09′	30° 51′
Bhagirathi − II	6,512 m	79° 08′	30° 53′
Bhagirathi − III	6,454 m	〃	30° 52′
Unnamed Peak	6,193 m	79° 09′	30° 51′
(South East of Bhagirathi − II)			
− do −	6,477 m	79° 10′	30° 50′
− do −	6,504 m	79° 09′	30° 40′
Vasuki Parbat	6,792 m	79° 10′	30° 53′
Unnamed Peak	6,702 m	79° 10′	30° 52′
(South of Vasuki Parbat)			
Satopanth	7,075 m	79° 10′	30° 51′
Unnamed Peak (North of Satopanth)	6,008 m	〃	30° 52′
(スワチャンド氷河周辺)			

Unnamed Peak	6.215 m	79° 10′	30° 49′
— do —	6.465 m	79° 11′	30° 40′
— do —	6.721 m	79° 12′	30° 49′
— do —	6.684 m	79° 13′	30° 49′
— do —	6.668 m	〃	30° 50′
（チャトラギ氷河周辺）			
Chaturangi	6.304 m	79° 11′	30° 56′
Unnamed Peak (East of Chaturangi)	6.180 m	79° 09′	〃
Sudarshan Parbat	6.507 m	79° 06′	30° 59′
Unnamed Peak (SouthWest of Sudarshan)	6 002 m	79° 05′	〃
Unnamed Peak (South of Sudarshan)	6.166 m	〃	30° 58′
Thelu	6.000 m		
Koteshwar	6.035 m		
Jamunotri	5.211 m		
（下記の山は、ナンダ・デビィ内院の外側から登ることができる。）			
Nanda Khat	6.545 m	79° 58′	30° 18′
Panwali Dowar	6.663 m	79° 57′	30° 17′
Mrigthuni	6.855 m	79° 50′	〃
Maiktoli	6.803 m	79° 52′	〃
Trisul — I	7.120 m	79° 47′	30° 19′
Trisul — II	6.690 m	〃	30° 18′
Trisul — III	6.008 m	79° 46′	30° 15′
Tharkot	6.099 m	79° 49′	30° 14′
Nanda Ghunti	6.390 m	79° 43′	30° 21′
Ronti	6.063 m		
Bhanoti	5.645 m		
Baljuri	5.922 m		
2. ヒマチャル・ヒマラヤ			
（カオ・ロン山群）			
T — 1	5.669 m		
T — 2	6.035 m		
Unnamed Peak	5.615 m		
Kao Rong	6.221 m	77° 24′	32° 13′
K.R — 1	6.157 m	77° 58′	32° 37′
K.R — 2	6.187 m	77° 24′	32° 32′
K.R — 3	(6.157 m)	77° 21′	32° 40′
K.R — 4	6.340 m	77° 22′	32° 41′
K.R — 5	6.258 m	77° 23′	32° 38′
K.R — 6	6.187 m	77° 19′	32° 40′

K. R－7	6,096 m	77° 25′	32° 35′
Unnamed Peak (Near K. R－7)	6,005 m		
（ムルキラ山群）			
M－1	5,730 m	77° 05′	32° 41′
M－2	5,832 m	74° 25′	32° 15′
M－3	5,791 m	77° 40′	32° 07′
M－4 (Mulkia)	6,517 m	77° 25′	32° 33′
M－5	6,370 m	77° 46′	32° 07′
M－6 (Taragiri)	6,279 m	77° 48′	32° 10′
M－7	6,340 m	77° 43′	32° 07′
M－8	6,096 m	77° 24′	32° 37′
M－9	5,679 m	77° 22′	32° 32′
Unnamed Peak	5,730 m		
M－10	5,852 m	77° 25′	32° 25′
（シス川周辺）			
Unnamed Peak	5,560 m		
Unnamed Peak	5,852 m		
Gepang Goh－I	6,053 m		
Gepang Goh－II	5,870 m		
Unnamed Peak	5,547 m		
Unnamed Peak	6,113 m		
Unnamed Peak	5,769 m		
（チャンドラ・バーガ山群）			
C. B－9	6,108 m	77° 27′	32° 34′
C. B－10 (Tara Pahar)	6,227 m	77° 29′	32° 27′
C. B－11	6,044 m	77° 03′	32° 44′
C. B－12	6,248 m	77° 33′	32° 20′
C. B－13	6,264 m	77° 33′	32° 21′
C. B－13a	6,240 m	77° 33′	32° 20′
C. B－14	6,078 m	77° 34′	32° 23′
C. B－16	5,822 m	77° 32′	32° 19′
C. B－17	(Un Known)	77° 32′	32° 21′
C. B－18	(5,890 m)	77° 31′	32° 21′
Unnamed Peak	6,000 m		
Unnamed Peak	5,800 m		
C. B－19	(Un Known)	77° 31′	32° 22′
C. B－20	5,898 m	77° 28′	32° 13′
C. B－21	(Un Known)	77° 32′	32° 25′
C. B－22	5,700 m	77° 29′	32° 15′
C. B－23	(Un Known)	77° 31′	32° 24′
C. B－24	(Un Known)	77° 29′	32° 23′
C. B－25	(Un Known)	77° 28′	32° 23′

C. B − 26	5,805 m	77° 27′	32° 24′
C. B − 27	(Un Known)	77° 27′	32° 24′
C. B − 28	(〃)	77° 28′	32° 24′
C. B − 29	(〃)	77° 27′	32° 25′
C. B − 30	(〃)	77° 30′	32° 26′
C. B − 31	6,096 m	77° 29′	32° 26′
C. B − 32	5,639 m	77° 28′	32° 26′
C. B − 33 (Minar)	6,172 m	77° 30′	32° 29′
C. B − 34	5,913 m	77° 31′	32° 29′
C. B − 35	(Un Known)	77° 31′	32° 30′
C. B − 36	5,791 m	77° 27′	32° 29′
C. B − 37	(Un Known)	77° 27′	32° 28′
C. B − 38	(〃)	77° 26′	32° 24′
C. B − 39	(〃)	77° 25′	32° 24′
C. B − 40	(〃)	77° 25′	32 25′
C. B − 41	(〃)	77° 24′	32° 25′
C. B − 42 (Ashagiri)	(6,096 m)	77° 24′	32° 26′
C. B − 42 a	(Un Known)	77° 24′	32° 26′
C. B − 43	(〃)	77° 25′	32° 27′
C. B − 44	5,938 m	77° 25′	32° 27′
C. B − 45	(Un Known)	77° 25′	32° 28′
C. B − 46 (Akela Oila)	(5,944 m)	77° 25′	32° 28′
C. B − 47	(Un Known)	77° 25′	32° 29′
C. B − 48 (Tambu)	(5,996 m)	77° 24′	32° 29′
C. B − 49 a	(Un Known)	77° 24′	32° 30′
C. B − 49 (Tila ka Lahr)	5,964 m	77° 24′	32° 30′
C. B − 50	6,096 m	77° 25′	32° 31′
C. B − 51	(Un Known)	77° 26′	32° 31′
C. B − 52	5,944 m	77° 27′	32° 31′
C. B − 53 (Sharmili)	6,096 m	77° 28′	32° 33′
C. B − 54	6,096 m	77° 28′	32° 33′
C. B − 55	(Un Known)	77° 29′	32° 33′
C. B − 56	(〃)	77° 29′	32° 32′
C. B − 57 (Tapugiri)	5,791 m	77° 30′	32° 33′
(バラ・シグリ氷河ーチャンドラ川の南ー周辺)			
Unnamed Peak	5,645 m		
Devachan	6,200 m	77° 42′	32° 06′
Unnamed Peak	6,163 m		
Unnamed Peak	5,655 m		
Unnamed Peak	6,250 m		
Papsura	6,451 m	77° 45′	32° 04′
White Sail	6,445 m	77° 33′	32° 13′

Unnamed Peak	5,953 m		
Unnamed Peak	6,247 m		
Unnamed Peak	5,943 m		
Snow Dome	5,947 m		
Unnamed Peak	5,943 m		
Unnamed Peak	6,035 m		
Pinnacle	5,029 m		
Tiger Tooth	5,947 m		
Unnamed Peak	6,100 m		
Cathedral	6,100 m	77° 02′	32° 44′
（トス氷河ーチャンドラ川の南からビィス川の東ー周辺）			
Indra San	6,221 m	77° 48′	32° 11′
Deo Tibba	6,001 m	77° 23′	32° 12′
（ノルブ）			
Consolation Peak	5,661 m		
Aliratni Tibba	5,470 m		
Unnamed Peak	5,699 m		
Unnamed Peak	5,810 m		
Unnamed Peak	5,647 m		
（ビィス川の西域）			
Hanuman Tibba－I	5,928 m	77° 02′	32° 21′
Hanuman Tibba－II	5,516 m		
Manali	5,669 m	76° 55′	32° 34′
Unnamed Peak	6,330 m		
Ladakhi	5,342 m	77° 28′	32° 11′
Makerbeh	6,069 m	77° 05′	32° 25′
Shikarbeh	6,200 m	77° 03′	32° 26′
Shitidhar	5,250 m		
Friendship	5,152 m		
（チェナブ川の北域）			
Behali Jot	6,279 m	76° 34′	32° 50′
Behali Jot (North)	6,290 m		
Behali Jot (South)	6,295 m		
Menthosa	6,443 m	76° 43′	32° 55′
Unnamed Peak	6,300 m		
Dagoi Jot	5,933 m		
Unnamed Peak	5,956 m		
Phabrang	6,172 m	76° 48′	32° 47′
Unnamed Peak	5,800 m		
Unnamed Peak	5,600 m		
Unnamed Peak	5,840 m		
Nainghar Choti	6,094 m	77° 47′	32° 40′

North Peak	5,901 m	77° 47′	32° 40′
Gangstang	6,162 m	77° 48′	32° 42′
Unnamed Peak	6,109 m		
Unnamed Peak	5,908 m		
Unnamed Peak	5,977 m		
Unnamed Peak	6,006 m		
Sentinal Peak	5,700 m		
Unnamed Peak	6,070 m		
（チェナブ川の南域）			
Tent Peak	6,113 m	77° 44′	32° 10′
Unnamed Peak	5,730 m		
Unnamed Peak	6,020 m		
Unnamed Peak	6,113 m		
Alias Jot	5,799 m		
Sanakdenk Jot	6,045 m		
Laluni Jot	5,973 m		
Fluted Peak	6,122 m		
Unnamed Peak	5,888 m		
Unnamed Peak	6,011 m		
3. カシミール・ヒマラヤ			
（ザンスカール地域）			
Nun	7,135 m	76° 01′	33° 59′
Kun	7,077 m	76° 03′	34° 01′
Pinnacle	6,930 m	76° 05′	〃
White Needle	6,500 m	76° 02′	33° 59′
Bobang	5,971 m	76° 08′	33° 25′
Z－2	6,175 m	76° 18′	33° 41′
Z－3	6,270 m	〃	〃
Z－1	6,181 m	76° 14′	33° 46′
Z－8	6,050 m	76° 18′	33° 41′
D－41	5,813 m		
Unnamed Peak	5,934 m		
(North of Gulmatang)			
N－8	6,392 m	76° 07′	33° 44′
Bien Guapa	6,006 m		
（ラダーク地域）			
Stock Kangri	6,153 m	76° 08′	33° 26′
(Also known as Kang La Cha)			
Parcha Kangri	6,065 m	76° 12′	33° 47′
Gulup Kangri	5,900 m	76° 10′	33° 26′
Mashiro Kangri	5,367 m	77° 24′	33° 59′
Kantaka Kangri	5,275 m	77° 24′	〃

Kang Yisay	6,400 m	76° 50′	33° 23′
Cumberland	5,227 m		
Yan	6,230 m		
（キシュトワール地域）			
（ⅰ）キアール川流域			
Sickle Moon	6,574 m	76° 08′	33° 37′
Eiger	6,001 m	76° 09′	33° 27′
Cathedral	5,370 m	〃	33° 48′
Unnamed Peak	5,594 m	76° 06′	33° 50′
Unnamed Peak	5,921 m	〃	〃
Unnamed Peak	5,817 m	〃	〃
Unnamed Peak	5,340 m	〃	33° 51′
Unnamed Peak	5,605 m	76° 07′	33° 52′
Unnamed Peak	6,045 m	〃	〃
Unnamed Peak	6,200 m	76° 08′	33° 52′
Unnamed Peak	6,392 m	〃	〃
Unnamed Peak	5,560 m	〃	〃
Unnamed Peak (Drung Durung Gl.)	6,560 m	76° 09′	33° 54′
Unnamed Peak (〃)	6,550 m		
Unnamed Peak (〃)	6,000 m	76° 10′	33° 38′
Unnamed Peak (〃)	6,225 m	76° 16′	〃
Unnamed Peak	5,890 m	76° 09′	33° 48′
Unnamed Peak	5,455 m	76° 10′	〃
Unnamed Peak	5,645 m	76° 00′	〃
(South of Cathedral)			
Unnamed Peak	6,520 m	76° 08′	33° 37′
(North of Sickle Moon)			
Unnamed Peak	6,415 m	〃	〃
(South of Sickl. Moon)			
Unnamed Peak	6,013 m	76° 07′	〃
(S.W. of Sickle Moon)			
Unnamed Peak	5,600 m	76° 09′	33° 27′
Lhalung (Durung Drung Gl.)	6,500 m	76° 20′	33° 40′
（ⅱ）ナス川流域			
Brammah's wife	5,297 m	76° 07′	33° 29′
Brammah－Ⅰ	6,416 m	76° 03′	33° 30′
Crooked Finger	5,630 m	76° 10′	33° 34′
Flat Top	6,100 m	76° 08′	33° 36′
Unnamed Peak (East of Flat Top)	6,001 m	76° 11′	33° 34′
Brammah －Ⅱ	6,425 m	76° 08′	33° 36′
Unnamed Peak (North of Brammah －Ⅱ)	6,000 m	〃	33° 37′
Unnamed Peak (Brammah Gl.)	5,630 m	〃	33° 38′

Unnamed Peak (Brammah Gl.)	5,460 m	76° 08′	33° 38′
Unnamed Peak (〃)	5,950 m	〃	33° 39′
Unnamed Peak (〃)	5,830 m	〃	〃
Dreikant	5,890 m	76° 09′	33° 39′
Eckpfeiler	5,710 m	75° 59′	33° 35′
Gur	5,709 m		
Unnamed Peak	5,729 m		
（iii）バルナジ川流域			
Barnaj －I	6,100 m	76° 23′	33° 35′
Barnaj －II	6,290 m	76° 22′	〃
Unnamed Peak	6,000 m	76° 21′	33° 36′
Unnamed Peak	5,640 m	〃	33° 35′
Unnamed Peak	5,710 m	〃	33° 33′
Unnamed Peak	5,950 m	76° 22′	〃
（iv）その他の山々			
Arjuna	6,200 m	76° 09′	33° 48′
Agyasol	6,200 m	76° 06′	33° 43′
Shivling	6,000 m	〃	〃
Chapra (Bhazum Nala)	5,600 m	76° 10′	33° 36′
Tibetsi	5,600 m		
Unnamed Peak (Bhazum Nala)	5,415 m		
Unnamed Peak (〃)	5,890 m		
Unnamed Peak (Janam Peak)	6,330 m		
Unnamed Peak	6,360 m		
Gharol	6,000 m		
Unnamed Peak	5,900 m		
Chering Peak	6,187 m		
Unnamed Peak (South of Muni La)	6,220 m		
Unnamed Peak (〃)	6,040 m		
Unnamed Peak (Keije Nala)	6,250 m	76° 09′	33° 35′
Unnamed Peak (Haske Nala)	6,220 m		
Unnamed Peak (Bhut Nadi)	6,139 m		
Unnamed Peak (Pholachak Nala)	6,070 m		
Unnamed Peak (Haske Nala)	6,000 m		
Unnamed Peak (Nanth Nala)	5,950 m		
Unnamed Peak (〃)	5,830 m		
Unnamed Peak (Bhut Nadi)	5,600 m		
（カシミールの他の山々）			
Kolahai	5,425 m	76° 01′	33° 49′
Harmukh	5,148 m	〃	33° 48′
Tanak Peak	5,992 m	76° 05′	33° 43′
Barmal Peak	5,813 m	76° 20′	33° 36′

Kunirhayan	5,138 m		
Nichhang	5,444 m		
Cowabal	6,000 m		
Dudal Peak	4,992 m		
Dudhnag Peak	4,953 m		
Sun Set Peak	4,745 m		
Banbun Peak	4,671 m		
Tatakuti	4,742 m		
Sarbal Peak	5,235 m		
Adventurers Peak	5,222 m		
Challhenmala	4,915 m		
Harbaghwan Peak	4,889 m		
Greater Thajewas Peak	4,854 m		
Umbrella Peak	4,785 m		
Valshead Peak	4,732 m		
Sekiwas Peak	4,695 m		
Crystal Peak	4,693 m		
Neza Peak	4,661 m		
Mosquito Peak	4,617 m		
Sentinel Peak	4,607 m		
Hattal	6,220 m		

4. カラコルム

A 山群			
Saser Kangri －I	7,672 m	77° 45′E	34° 52′N
Saser Kangri －II	7,513 m	77° 48′E	34° 48′N
Saser Kangri －III	7,495 m	77° 47′E	34° 50′N
B 山群			
Mamostong Kangri	7,526 m	73° 34′E	35° 08′N
Rimo Peak	7,385 m	77° 22′E	35° 21′N
C 山群			
Apsarasas －I	7,245 m	77° 10′E	35° 33′N
Apsarasas －II	7,239 m	77° 11′E	35° 33′N
Apsarasas －III	7,230 m	77° 13′E	35° 31′N
Teram Kangri －I	7,465 m	77° 05′E	35° 34′N
Teram Kangri －II	7,406 m	77° 05′E	35° 34′N
Teram Kangri －III	7,381 m	77° 03′E	35° 37′N
Singhi Kangri	7,202 m	76° 59′E	35° 35′N
Ghaint －I	7,401 m	76° 48′E	35° 31′N
Ghaint －II	7,343 m	76° 47′E	35° 32′N
Indira Col.	5,760 m	76° 57′E	36° 36′N
Sia Kangri	7,422 m	76° 45′E	35° 39′N

印パ紛争に山男緊張

撮影に規制／質問も控えめに

インド、パキスタン、中国が国境を接する東カラコルムに今秋、七十五年ぶりに日本人が入った。古くはシルクロードの交路として栄え、十九世紀以後は幾多の探検隊が活躍した秘境だが、一九四七年のインド独立からずっと外国人立ち入り禁止地域で、印パ紛争の休戦ライン付近は現在も一触即発の緊張下にある。ここに日本ヒマラヤ協会（JAJ）登山隊の尾形好雄隊長（さら五人が入域。同ライン沿いのインド側にある未踏峰マモストンカンリ（七、五一六㍍）に日印合同で挑み、全員登頂に成功してこのほど帰ってきた。一九〇九年（明治四十二年）の第二次大谷探検隊以来初めて日本人の目に触れた現地の様子は―。

（竹内 瀧記者）

マモストンカンリは「千人の悪魔の山」の意味。昔、中央アジアからカシミールに侵入した略奪者が近くで雪崩に遭って全滅した故事からという。インド側八人を含む二行十三人は二次―三次の三手に分かれてアタックした。

二次隊の尾形隊長ら五人は九月十五日、頂上を目前にした。六、七〇〇㍍の最終キャンプを午前七時に出発して六時間、ひさまで進まる粉雪を相手に、尾形隊長は先頭でラッセルを続けた。あと数百㍍。一息入れようと二番手のインド隊員に「チェンジン」とどなった。長身のインド隊員は両手を広げ、「アイアム ファイト イズ ゴーン（あうダメだ）。」

頂上は、山田昇副隊長（さら）の一次隊が前々日登った時と違い、下界は雲海に閉ざされていた。一番弟い岩崎隆隊員（さら）が小部ルミ子の写真をかざす。以前から岩崎は「彼女のピンナップ二枚に頂上に立つ」と宣言していた。

■明治に探検隊

東カラコルムは、中国・新疆ウイグル自治区とカラコルム峠（五、五七〇㍍）をはさんで、インド側にあり、カラコルム峠からサセル峠（五、三三〇㍍）、カルドン峠（五、五七〇㍍）のルートは、シルクロードの交路として十九世紀終わりごろまで栄えた。隊商は馬やヤクに荷を積み、ジャム・カシミール藩王国の首都スリナガルから、チベット高原の西端ラダックの中心町レーを経て峠を越え。タクラマカン砂漠の西のヤルカンドへ約千㌔を通った。探田久弥氏によれば、一五三三年、新疆者の王侯ミルザ・ハイダールがカラコルム峠を越えて以来、日本人がこの道を通った記録はないという。

日本人では、陸軍の特命を受けた日野強少佐が一九〇六年（明治三十九年）十月、初めてこの道を中国側から四十三日間かかって越えた。その三年後、野村栄三郎が入って以来、日本人がこの道を通った記録はない。日野少佐は毎年この道を約三百年間、これ人類の到達高度記録だったという。

日本人では、陸軍の特命を受けた日野強少佐が一九〇六年（明治三十九年）十月、初めてこの道を中国側から四十三日間かかって越えた。その三年後、第二次大谷探検隊の橋瑞超、野村栄三郎が入って以来、日本人がこの道を通った記録はない。日野少佐は毎年この道を約三百年間、これが人類の到達高度記録だったという。

日本人では、陸軍の特命を受けた日野強少佐が一九〇六年（明治三十九年）十月、初めてこの道を中国側から四十三日間かかって越えた。その三年後、第二次大谷探検隊の橋瑞超、野村栄三郎が入って以来、日本人がこの道を通った記録はない。日野少佐は毎年この道を約三百年間、これが人類の到達高度記録だったという。

■初の入域許可

一行は日印合同を条件に世界で初めて入域を許可された。この地域のインド陸軍管轄、P・N・フーン国境警備軍司令官（由将）は「シアチェン氷河一帯の観光客で人口約一万人の町はにぎわっていた。

登山許可はインドが出す」と言明。K2（八、六一一㍍）は世界第二のパキスタンの高峰だけに、一行の日本人メンバーは仰天した。

三次にわたる印パ紛争後のパキスタンとパキスタンが国境線をめぐってとらみ合っており、現在は、この地域の

■登山隊に軍人

インド側のメンバーはB・S・サンドー陸長（さら）が陸軍大佐、他は陸軍軍医、陸軍登山学校教官、警察官、政府登山学校教官と、軍隊色の強い顔ぶれ。カルドン峠からは軍事施設はもちろん、トラックや飛行機も写真撮影が禁じられた。また付近の山岳地図も、見せてくれたが、写し取ることは軍事機密を理由に拒否された。

ところで事情の登山だけに印本側も緊張を使った。「余計な質問はなるべくしないようにした。インド側は日本隊を入れて偵察の実績づくりをしようとしたのかもしれないが、それは僕らにはわからない政治的な話で……」と、尾形隊長もこの話には口が重くなる。

マモストンカンリは二応、一九四九年の印パ停戦ラインの南側、つまりインド領だ。が、リモなど他の多くの山は停戦ラインの北側にある。インド側は「三次にわたる戦争で、もはや四九年の停戦ラインはなくなった」としているが、パキスタンの地図では、シアチェン氷河一帯は「係争地」としている。最近この地域での緊張が高まり、七月、ハク・パキスタン大使館が初めてこの事実を認め、十月中旬には米国も懸念を表明した。

HAJ隊の山岳ガイドの主峰も駐刀的だが、パキスタンのナンガパルバットやK2も登りたい。今後はじっくり状況を見ないと行くにも行けません」と複雑な国際情勢に戸惑いを隠せなかった。

丹部節雄日本山岳協会副会長は「インドは領有を主張してるようだが、ああそうですか、と我々が係争地域の山の登山許可申請をインドに出すわけにはいかない。かといってパキスタン側に出して受けけるかどうか……。当分あの地域はうかつに申請ができない。困ったことだ」と話している。

秘峰マモストンカンリ

日本ヒマラヤ協会隊が初登頂

頂上に写真を抱いて立つ岩崎洋隆隊員
＝9月14日、尾形好雄隊長写す

アプサラサス（七、二四五㍍）、シアカンリ（七、四二二㍍）、サルトロカンリ（七、七四一㍍）といったシアチェン氷河をとり巻く山々に相次いで登頂した。この山々は一九七五、七六年に日本の登山隊がパキスタン側の許可で登った所だ。ところが今春、パキスタン側の許可でこの地域のリモ（七、三八五㍍）やK12（七、四九六㍍）に登ろうとした日本の弘前大隊やオーストリア隊は、現地入り後、パキスタン政府に治安を理由に目的地を変更させられている。

一行はインド軍駐屯地サンマ

Indo-Japanese expedition

A joint team of the Indian Mountaineering Foundation and the Himalayan Association of Japan left New Delhi on Thursday for Leh to attempt the 7516 metres Mamostong peak in the eastern Karakorams, reports UNI.

Mamostong is coloquially known as the peak of many devils and has not been conquered. The last time an attempt was made on this peak, was by a British team before 1930, Col B. S. Sandhu, one of the leaders of the 18-member team said.

Yoshio Agata, the other leader said what prompted the five Japanese in the joint team to attempt this particular peak was that there was absolutely no information about the mountain.

The Japanese leader said it would be interesting to know more about the area which had been a part of the Central Asian trade route.

Moreover, it was after more than half a century that foreigners had been allowed to enter the area.

Indian Mountaineering Foundation vice-president, Capt M. S. Kohli, said the team expected to set the base camp by mid-August and attempt the peak some time in the second week of September.

The Statesman (3 Aug, 1984)

Indo-Japanese team climbs Mamostang

By A Staff Reporter

NEW DELHI, October 1: Scaling the virgin Mamostang, a giant of a mountain in the Karakoram, was a unique experience for the 12-member Indo-Japanese team, who scaled it in groups on September 13, 15 and 16, in more than one way.

For the first time all the 12 members of the expedition did succeed in setting their foot on the peak which fell in an area otherwise prohibited but opened to selected expeditions this year. It was not that efforts had not been made before. In fact, two expeditions, one of them in 1969, had made attempts but without success.

The leader of the team, Col. Balwant Sandhu, his deputy from Japan, Noboru Yamada, Captain M. S. Kohli, vice president of the Indian Mountaineering Foundation, narrated their experience at a press briefing today.

Captain Kohli described the success of the expedition as an outstanding achievement which would rank among the top ten achievements of the foundation.

Mamostang stands alone rising in a single mass to 7,516 metres. It is about 20 km off the Leh - Yarkand Silk route at a longitude of 77 degrees 35' and 35 degrees 08' latitude and is totally concealed. The expedition was unable to find a single photograph of the mountain from the archives of the Himalayan Club, the American Alpine Club and some other clubs of England and Japan. All this made the job of the expedition really an uphil task.

The Times of India (2 Oct, 1984)

'Mountain of devils' conquered

Hindustan Times Correspondent

NEW DELHI, Oct. 1—An Indo-Japanese expedition climbed thrice during the last month Mamostang, "the mountain of thousand devils," in one of the coldest regions of Karakoram in the Himalayas.

The mountain, which is totally concealed, earned its dreadful description as a party of traders once perished there looking for an alternative route to the nearby Saser La. Till the recent expedition the mountain had not been photographed.

The 13-member team was led by Col Balwant Sandhu, principal, Nehru Institute of Mountaineering, Uttarkashi. The expedition was sponsored by the Indian Mountaineering Foundation and the Himalayan Association of Japan. The financial support was provided by the Union Ministry of Sports.

Col. Sandhu told newsmen today that the team had to cross swollen glacier streams on the way and the expedition mail-runner, Synchen, was drowned in one of them on Aug. 27. The three summits were achieved on Sept. 13, Sept. 15 and Sept. 16.

The team leader said it was sheer hard work climbing the mountain. The team members not only returned conquerors from the mountain-top but also "winners at the human-level."

The Hindustan Times (2 Oct, 1984)

Indo-Japanese expedition climbs Karakoram peak

By A Staff Reporter

Mamostang, the 7,516-m-high mountain in Karakoram, was climbed for the first time by 12 members of the joint Indo-Japanese expedition in three attempts in the middle of September.

The earlier attempts on the mountain were made in 1930 by a British team and in 1969 by an army team led by Lt-Col Prem Chand.

In New Delhi on Monday, Colonel Balwant Sandhu, 49, leader of the expedition, related the climb of this "virgin peak". On September 13, he said, Mr Rajiv Sharma, Captain H. S. Chauhan, Mr P. M. Das, Mr Noborup Yamada and Mr Yoshida climbed the peak. On September 15 Mr Yoshio Ogata, Mr Nobuhiro Shingo, Mr Hiroshi Iwazaki, Mr Mahavir Thakur and Mr Rattan Singh made the attempt and were successful.

Colonel Balwant Sandhu said that he and Mr Nandlal Purohit made the attempt on September 16 and left the camp at 4-30 a.m. when the temperature was —22 degrees C and the windespeed was 60 kmph. Their back when climbing, he said, was towards the East and with the sunrise there was "colourburst on the setting", the like of which he had never seen. There was the deepest of blue and the deepest of purple reflected from the glacier. These colours, he said, he had seen only in pictures of space. The cold was so intense that there was a layer of ice before the camera lenses. The two however, reached the peak at 12-30 p.m. and came down to the camp at 3 p.m.

Colonel Sandhu called the expedition "a blind date" as they literally had no plans, no pictures and no known routes to go by. He said that the team went from one side of the mountain and climbed the peak from the other.

Captain M. S. Kohli, vice-president, Indian Mountaineering Federation, which sponsored the expedition, said that the area had only recently been opened to foreigners. He said that in the Karakoram region there were many other peaks available. These are Teram Shahr, Rimo, the three Apras and two unnamed peaks. These, he said, would be the targets during the next five years.

He called the success of the expedition "a very spectacular climb" and said that this was the first time in Indian mountaineering that all the members of the team had climbed the peak.

Colonel Sandhu said that they carried 4,000 kg of equipment and supplies and got Nepali porters in Leh. For the higher regions, he said they used Japanese food and had dinner ready in three minutes.

The Japanese plan to write a book on the expedition.

The Statesman (2 Oct, 1984)

ご協力者名簿

此の度の本登山隊の派遣につきましては、多くの方々より物心両面にわたる御援助・御協力を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

たいへんありがとうございました。

（ア　行）

(株)ＩＣＩ石井スポーツ

インド陸軍ラダック駐屯２６分隊

エアー・インディア

遠藤　登

（カ　行）

外務省情報文化局

(株)カモシカ・スポーツ

(株)キャラバン

(株)玉露園

コダマ樹脂工業株式会社

小西六写真工業株式会社

近喰　司

（サ　行）

三信製織株式会社

サンヨー食品株式会社

在日インド大使館

在印日本大使館

シカール・トラベル社

十條キンバリー株式会社

杉本忠男

鈴木雄一

（タ　行）

(株)ダックス

月星化成株式会社

(株)東亜計機製作所

東芝電池株式会社

飛田和夫

東レ株式会社

（ナ　行）

N・クマール

日東電気工業株式会社

日本エフディ株式会社

日本テレビ放送網株式会社

日本ポリエチレン製品工業連合会

（ハ　行）

葉隠素麺株式会社

日高照雄

富士電気化学株式会社

藤森工業株式会社

（マ　行）

マウンテン・トラベル株式会社

マーキュリー・トラベル社

ミドリ安全株式会社

明星食品株式会社

（ヤ　行）

山崎製パン株式会社

編集後記

ひと夏の想い出をマモストン・カンリで過してから、間も無く１年が過ぎようとしている。この間、一緒に出かけたカメラード達は次から次と新たな遠征に出かけて行った。山田は、冬のアンナプルナＩ峰南壁から帰って直ぐ、吉田と一緒にＫ２へ出かけた。最年少の岩崎は、まだ、インド、ネパールを放浪中で未だに帰国していない。最年長の新郷は、今夏、インドのバルテクンタへ再挑戦すべく入れ込んでいたが、メンバーの都合で時期を延期せざるを得なくなったようである。小生もまた、８月からブータンの最高峰、ガンケール・プンズムへと出かける。このように次から次と新たな夢が広がると、１年前の、あの荒涼とした世界の出来事も何だか遠い想い出のような気がしてくる。

慌ただしく過ぎ去る日々の生活の中では、どうしても過去の想い出に浸るよりは、新たな夢の方に時間は割かれてしまう。そんな中で、何とか自分達の行動の軌跡を書き記しておこうと一念発起して報告書の作成に取り掛かったものの、やはり、夢に食われる時間が多く、筆の方は遅々として進まなかった。加えて、原稿依頼者が国内不在と云うこともあって、原稿の集まりが悪く、当初の構想は何処へやら内容の片寄ったものになってしまった。

兎に角、早く、ひと区切りをつけて、新たな夢に没頭したいと云う思いが、見切り発車のような形で上梓する結果になってしまった。　（尾　形）

—千人の悪魔の峰—

昭和６０年７月１日発行

発行人　日印合同カラコルム登山隊１９８４年

編集人　尾　形　好　雄

発行所　日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506号

☎ 03-367-8521